北海道出版企画センター

北海道発掘シリーズNo. 8

北海道
厚岸町下田ノ沢遺跡

1972

厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会

序

厚岸が昔から先住民族のこよない居住地であったことは、数々の伝説や無数にある遺跡からもうかがい知ることができる。しかし、われわれが僅かに知っているのはごく近い昔のアイヌの事で、それ以上古い時代のことはアイヌについては勿論、竪穴やチャシを誰がつくり遺したのかについては、近年とみに盛んになってきた考古学に属する他の報告例などから厚岸のそれを推測するだけであったが、　地元としては初めて、　当町の古代文化を解明する科学的報告書が発刊されることになり、斯学については云うまでもなく、われ等郷土民にとっても限りない喜びである。

厚岸の埋蔵文化財は、厚岸湖の全周辺と海岸線の全域に分布しているので早くから斯学者の注目する所であり、大正11年には河野常吉氏が尾幌貝塚を、同15年には清野謙次氏が同じ尾幌貝塚、奔渡町ラスカント、筑紫恋、オカレンボウシの貝塚を、また昭和12年には東大の田中館博士が神岩の貝塚をそれぞれ発掘調査し、このほかにも数々の調査が行われているが、清野謙次氏の大正15年の調査報告が『日本貝塚の研究』に発表されている以外報告、発表例はなく、本格的な発掘調査報告はむしろ今回が初めてと云ってよい。

折しも当町は厚岸大橋完成という歴史的な年に当り、開基が定まり、町史も今年中には発刊の運びである。このような中にこの報告書が出ることの意義は大きい。

発掘調査を担当された諸先生方並びに関係者のみなさんのご努力に衷心からの謝意を表して序言としたい。

厚　岸　町　長　村　上　忠　次

序

埋蔵文化財の保存と管理には、どこの市町村でも大変な気のつかいようである。まして発掘調査を行いその報告書を出すという作業は、単なる保存管理とは違った意味で大仕事である。

この報告書にまとめられた内容は、第３次までの、６年間で３回に及ぶ調査の総まとめであるが、地理的理由から現地にキャンプしての１週間以上にわたる作業は、さなきだに神経を使う発掘作業だけにその労苦はひとかたではなかったのである。

第１回目の調査は７日間であったが、ほとんど小雨と霧の毎日で、３日目の夕方から４日目の朝にかけては猛烈な雷雨におそわれ、天幕を流された数名は、打ち捨てられた廃屋に逃げ込んでその中に仮テントを張り、ネズミと同居しながら稲妻と落雷のごう音におびえ通しの一夜であった。また、トランシーバーを使って発掘の現場と教育委員会が、日に数回各種の連絡をするのであるが、お互いに慣れないことで、一生懸命になればなる程ゆき違いができ、しまいにはトランシーバーを通してどなり合うひと幕があったりして、お互いの心づかいがまたひととおりではなかったのである。そのうえ、食事は限られたものでの現地料理で思うにまかせず、諸先生方もよく頑張ってくれたものである。しかし作業そのものは、厳しい中にも明るくにぎやかに行われた。それは、第１回目に漁業青年学級の生徒10人の参加を求めたのであるが、その青年達が最後まで発掘作業の主力であったからで、その根気のよさと豊かなユーモアは、担当の先生方に『こんなに愉快な発掘調査をすることは今後もあるまい』と言わせたほどである。

しかし、このような現場の作業のうえに、数千点に及ぶ資料を研究整理して、報告書としてまとめる作業がまた並たいていであるまいことは、報告文は勿論、数百にのぼる実測図版や写真が雄弁に物語っている。その結果、下田ノ沢式土器（仮称）という独特の土器が確認されるなど学問的収穫のあったことは、この発掘調査の意義が殊の外深いものと思われて嬉しい。

これを担当された先生方をはじめご協力いただいた沢山の方々に謹んで敬意を棒げ、斯学のよりいっそうの振興を心からお祈りする次第である。

厚岸町教育委員会教育長　加　藤　正　一

例　　言

1．　本書は厚岸湖の北岸の厚岸町大字別寒辺牛村字神岩に所在する下田ノ沢遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘は厚岸町教育委員会の主催により、次の通り進められた。

第一次調査　1965年6月4日より7日間

第二次調査　1966年6月4日より6日間

第三次調査　1970年6月4日より6日間

3．第一次調査は大場利夫博士が担当者となり、第二次、第三次調査は沢　四郎がそれを引継ぎ、調査員として、磯崎正彦（二次）大沼忠春（二次・三次）、山崎哲、山本文男、松田猛、西幸隆、豊原熙司（以上三次）らが専従した。

4．この三次に亘る調査に際しては、厚岸町教育委員会職員をはじめ、北海道教育大学釧路分校史学専攻生、釧路湖陵高校、同江南高校、同工業高校、同第一高校の考古学部の生徒、厚岸町漁協組青年部、厚岸町文化財専門委員、その他有志の参加協力があった。

5．遺物の整理については調査員全員がこれに当ったが、特に1966年の資料については、豊原熙司、金盛典夫の両氏の助力を得た。

6．本文執筆は関係者が討議の上それぞれ分担し、その文責を末尾に記した。

7．報告書の図版作成は土器については、大沼、山本、沢が、石器を山崎、山本が、骨角器を西、山本が、木製品、金属器を山本が主に担当した。

8．実測図縮尺の単位は、地形図及び遺構については第7図を除きメートルであるが、他はすべてセンチメートルで現わした。したがって図中には便宜上数字のみを記してある。

9．現在遺物は厚岸町郷土館に保管され、一部は展示されている。

10．本書の編集は、関係者の一人、沢が担当した。したがって、もし誤りがあるとすればそれはすべて沢の責任である。

目　　次

序

序

挿図目次

図版目次

例　　言

Ⅰ　調査の目的とその経過 …… 1

Ⅱ　遺　　跡 …… 3

Ⅲ　竪穴の発掘 …… 4

　第1号竪穴 …… 4

　第2号竪穴 …… 9

　小　括 …… 12

Ⅳ　貝塚の発掘 …… 12

　トレンチの層位 …… 12

　発見された遺構 …… 16

　出土した遺物 …… 21

　小　括 …… 41

Ⅴ　総　括 …… 42

付、厚岸湖と湖岸の遺跡付近の地形 ……岡崎由夫…… 117

挿　図　目　次

第１図　発掘区平画図および遺跡の位置 …… 2
第２図　住居址平面図 …… 5
第３図　各発掘区断面図１ …… 13
第４図　各発掘区断面図２ …… 14
第５図　1966年　第１、第２トレンチ遺物出土状態 …… 16
第６図　1966年　第２トレンチ泥炭層直上遺物出土状態 …… 17
第７図　1966年　第３トレンチ埋葬人骨 …… 18
第８図　1970年　第１、第３トレンチ平面図 …… 19
第９図　1966年　第１トレンチ拡張区石組遺構 …… 20
第10図　出土古銭 …… 40
第11図　住居址出土土器１ …… 47
第12図　住居址出土土器２ …… 48
第13図　住居址出土土器３ …… 49
第14図　住居址出土土器４ …… 50
第15図　住居址出土土器５ …… 51
第16図　住居址出土土器６ …… 52
第17図　住居址出土土器７ …… 53
第18図　1965年　第１トレンチ出土土器１ …… 54
第19図　1965年　第１トレンチ出土土器２ …… 55
第20図　1965年　第１トレンチ出土土器３ …… 56
第21図　1965年　第１トレンチ出土土器４ …… 57
第22図　1965年　第１トレンチ出土土器５ …… 58
第23図　1966年　第１トレンチ出土土器１ …… 59
第24図　1966年　第１トレンチ出土土器２ …… 60
第25図　1966年　第１トレンチ出土土器３ …… 61
第26図　1966年　第１トレンチ出土土器４ …… 62
第27図　石組および付近出土土器 …… 63
第28図　1966年　第１トレンチ出土土器５ …… 64
第29図　1966年　第２トレンチ出土土器１ …… 65
第30図　1966年　第２トレンチ出土土器２ …… 66
第31図　1966年　第２トレンチ出土土器３ …… 67
第32図　1966年　第２トレンチ出土土器４ …… 68
第33図　1966年　第２トレンチ出土土器５ …… 69
第34図　1966年　第２トレンチ出土土器６ …… 70
第35図　1966年　第２トレンチ出土土器７ …… 71
第36図　1966年　第２トレンチ出土土器８ …… 72
第37図　1966年　第３トレンチ出土土器１ …… 73
第38図　1966年　第３トレンチ出土土器２ …… 74
第39図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器１ …… 75

第40図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器２ …… 76
第41図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器３ …… 77
第42図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器４ …… 78
第43図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器５ …… 79
第44図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器６ …… 80
第45図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器７ …… 81
第46図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器８ …… 82
第47図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器９および第１号住居址出土徳利 …… 83
第48図　1970年　第１、第３トレンチ出土 土器10 …… 84
第49図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器11 …… 85
第50図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器12 …… 86
第51図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器13 …… 87
第52図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器14 …… 88
第53図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器15 …… 89
第54図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器16 …… 90
第55図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器17 …… 91
第56図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器18 …… 92
第57図　1970年　第１、第３トレンチ出土土器19 …… 93
第58図　1970年　第２トレンチ出土土器１ …… 94
第59図　1970年　第２トレンチ出土土器２ …… 95
第60図　竪穴住居址出石器 …… 96
第61図　1965年　第１トレンチ出土石器１および表面採集石器 …… 97
第62図　1965年　第１トレンチ出土石器２ …… 98
第63図　1966年　第１トレンチ出土石器 …… 99
第64図　1966年　第２トレンチ出土石器１ …… 100
第65図　1966年　第２トレンチ出土石器２ …… 101
第66図　1966年　第２トレンチ出土石器３ …… 102
第67図　1966年　第２トレンチ出土石器４ …… 103
第68図　1966年　第３トレンチ出土石器 …… 104
第69図　1966年　第１、第2、第３トレンチ出土石器 …… 105
第70図　1970年　第１トレンチ出土石器 …… 106
第71図　1970年　第１、第2トレンチ出土石器 …… 107
第72図　1970年　第２、第3トレンチ出土石器 …… 108
第73図　1965年　第１トレンチ出土骨角器 …… 109
第74図　1966年　第１、第2、第３トレンチ出土骨角器 …… 110
第75図　1970年　第１トレンチ出土骨角器１ …… 111
第76図　1970年　第１トレンチ出土骨角器２ …… 112
第77図　1970年　第１、第2、第3トレンチ出土骨角器 …… 113
第78図　第２号住居址および石組出土骨角器 …… 114
第79図　出土木製品 …… 115
第80図　出土金属器 …… 116

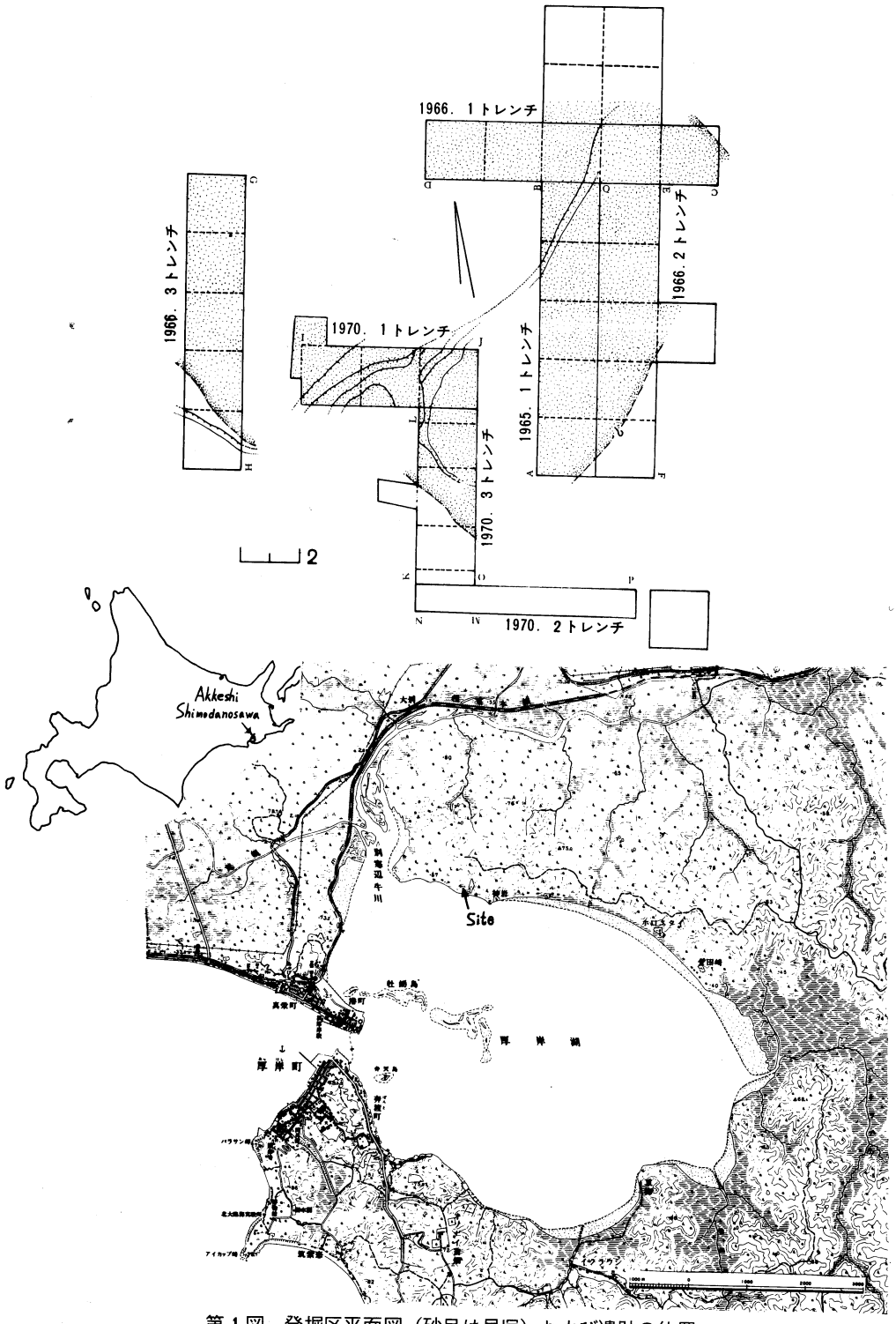
I　調査の目的とその経過

北海道東部の厚岸湾に隣接する厚岸湖畔には先史時代の遺跡が豊富である。これらの諸遺跡は昭和36年、道内遺跡台帳整備事業の一環として道教育委員会及び厚岸町教育委員会の提携によって分布調査がおこなわれ、厚岸湖北岸及び西岸の尾幌川河口から真竜にかけて、チャシ14ケ所、貝塚17ケ所、竪穴 222個の存在を確認した。この調査でわれわれの注意をひいたのは、局限された地域に集中的なまとまりをみせるチャシ、貝塚、竪穴群のそれぞれが、果して有機的な関連性をもって立地するものか、あるいは単に偶然の集まりを示すに過ぎないものだろうかということであった。つまりそれは前記三者が、相関的状態をもって立地しているのなら、それらの総合的な調査によって、湖畔一帯を舞台に活躍した先史時代人の生活文化を立体的な形で把握することが可能であると考えたからである。そして濃厚な分布を示す貝塚の存在は当然期待される人骨の発見と相まって、従来明瞭になり得なかった文化担当者の人種学的研究にも明るい希望を与えるという恵まれた条件が備っていたからであった。

こうした目的に沿って、遺跡群の一つ下田ノ沢遺跡に対する第一次の調査を昭和40年6月に行い、続縄文及び擦文、オホーツク文化期に属する住居址の存在を確認し、又貝塚の一部を発掘して同時代の遺物をかなり得ることができた。特に貝塚の調査では貝層下に泥炭層が存在するのを確認し、木質遺物の存在を確認したのである。

これまで北海道における木器文化の研究はアイヌのそれについては詳しいが、それ以上の年代になると木器そのものの特性から、資料に恵まれず、困難であったが、本調査によってその目安がついたのである。それは、一面で優秀性を高く評価された近世アイヌの伝統技術である木器文化への歴史的関連性を追究する糸口の一つになるかも知れぬものであり、他の一面では是川遺跡出土品などを中心に理解されている先史時代木器文化の内容へ、さらにいくばくかの光彩を添えることができるかも知れないと言うかなり大きな問題を含むものである。

こうして当初の目的に加え、既に失なわれてしまったものの多い有機質遺物の究明に絶好のフィールドを提供することになった下田ノ沢遺跡であるが、貝層の一部及び泥炭層についてはともかくその上層に形成されていた層序は、大部分が後世の撹乱をうけていて、多くの時期を異にする遺物の出土をみながらも、その組成となると不充分のそしりをまぬがれないものであった。このため、よりこれらの関係を正確に把握するため、以上の期待を含めて、昭和41年に第2次の調査を計画した。しかし本調査の結果は、第1次調査同様、多くの出土遺物をみながらも特に新たな成果を得るには至らなかった。そのため、特に層序の確認ということで、昭和45年に第3次調査をおこなったが、結果は同様でいたるところに近世における撹乱層をみたのみであった。だが、これら三度の調査を通して本遺跡に



第1図　発掘区平面図（砂目は貝塚）および遺跡の位置

おける遺物や遺構が、その始りを続縄文文化の前半におき、擦文、オホーツク文化を経て近世アイヌ、更に近代日本人のものも含むものであることが解った。だがこれらの相互の有機的関連性については三年に亘るとはいえ、限られた日数ではその目的を果し得なかった。このことについては、将来より大きな組織のもとに長い年月をかけて取り組む必要性を痛感し、これ以上の調査は打ち切ることにした。

(磯　崎　正　彦　・　沢　　四　郎)

Ⅱ　遺　　跡

厚岸湖周辺には標高60m ～70m の根室段丘が発達している。この段丘は厚岸湖北岸に河口を持つ別寒辺牛川や東岸のトキタイ川、東梅川、西岸の尾幌川とそれらに合流する小河川のの開折作用と厚岸湾、厚岸湖形成の過程における海蝕とによって無数の小支谷を生じている。開折および海蝕作用によって残された段丘面は、数多くの舌状台地となって湖岸を形成するが、これらの湖面に近い部分では、1～5m 前後の低い湖成段丘を伴うのが常である。しかもこの段丘は、北岸に関する限り湖岸に向って突き出した根室段丘面を残す舌状台地の面側に形成されるといった特徴をもっている。神岩遺跡群として、道の指定史跡として保存されている幾つかのチヤシ、竪穴、貝塚を含む遺跡群は、こうした北岸を中心に別寒辺牛川とその支流であるチライカリベツ川までの間に展開している。別寒辺牛川と北岸に続く丘陵との間、開けた独立丘、丸山にはチヤシ、貝塚及び和人の住居址が残り、遺物が散乱している。

下田ノ沢遺跡は別寒辺牛河口より算えて東へ三つめの小支谷の西側に発達した湖岸段丘上にある。この低い段丘は、標高5m ～3m 前後の二面によって構成されているが、更に小支谷を流れる無名の小川によって運ばれたとみられる土砂により形成されたとみられる1m 未満の堆積面を小範囲に発達させている。小支谷は、巾 150m 、奥行 200m ほどの小さなものであるが、奥の中央より北東よりに、突端に数個の竪穴を有する舌状の小丘陵が張り出し、二つの小谷に分れる。発掘調査の対象となった貝塚及び竪穴のある小支谷の北西側の標高3m ほどの段丘の裾を1m 未満の堆積面を切刻して無名の小川が西側の小谷奥を水源として流れ、厚岸湖に注いでいる。竪穴は11個あり、5m 段丘から3m 段丘上にかけて存在する。三次に亘る調査の中核となった貝塚は、台地裾部に沿って発達した段丘の地形なりに孤状をなしてひろがっている。貝塚の主体は3m 段丘のテラス部に形成されているが、その一部は5m 段丘の傾斜面までのび、その平担面に位置する竪穴住居址の縁辺にまで及んでいる。したがって孤を描いて拡がる貝層の内縁は傾斜面が強く、貝層の堆積状態も良くないが、外縁は段丘の平坦面から末端にかかり、貝層の堆積状態も厚く良好な

部分があった。カキを主体とする純貝層はこの部分に発達している。

3m段丘よりも低い小川右岸にみられる堆積面には、土器や石器はまったく出土していない。この面は現在畑地となって耕作されているが、奥の竪穴を有する小丘陵付近は湿地となっている。この堆積面は、小川と湖水との両方の作用によって生じたものであるかもしれない。小支谷の両側にある台地は、かっては更に湖面に突き出て岬状になっていたと思われるが、いずれもその標高60m前後頂部の突端に濠を有し、貝塚及び竪穴をともなうチャシとなっている。北岸におけるチャシは、この小支谷の東側のそれまでは確認されているが、それからトキタイ川までの間についてはその存在は明らかでない。貝塚は、神岩までの間に2個所あり、より奥にある杉本氏居住地の小支谷西側のそれは、下田ノ沢遺跡と非常に類似した在り方を示している。このような在り方は、厚岸湖北岸にみられる共通した現象のようである。

以上述べてきたように、本遺跡を含む厚岸湖北岸を中心とする遺跡群は、尾根道を伝い容易に連絡のとれる場所にある。11個の竪穴と1つの貝塚からなる下田ノ沢遺跡とした本遺跡もその例にもれず、すぐそばを流れる小川を辿れば、それぞれの遺跡を結ぶ役割を果す尾根へとつづき、これらの尾根を分水嶺として、北岸の裏側を流れる別寒辺牛川の支流チライカリベツ川の無数の支川と連絡を保っているものである。将来、こうした視点から神岩遺跡群の在りようを追求することはおおいに必要であると思われる（沢　四　郎）

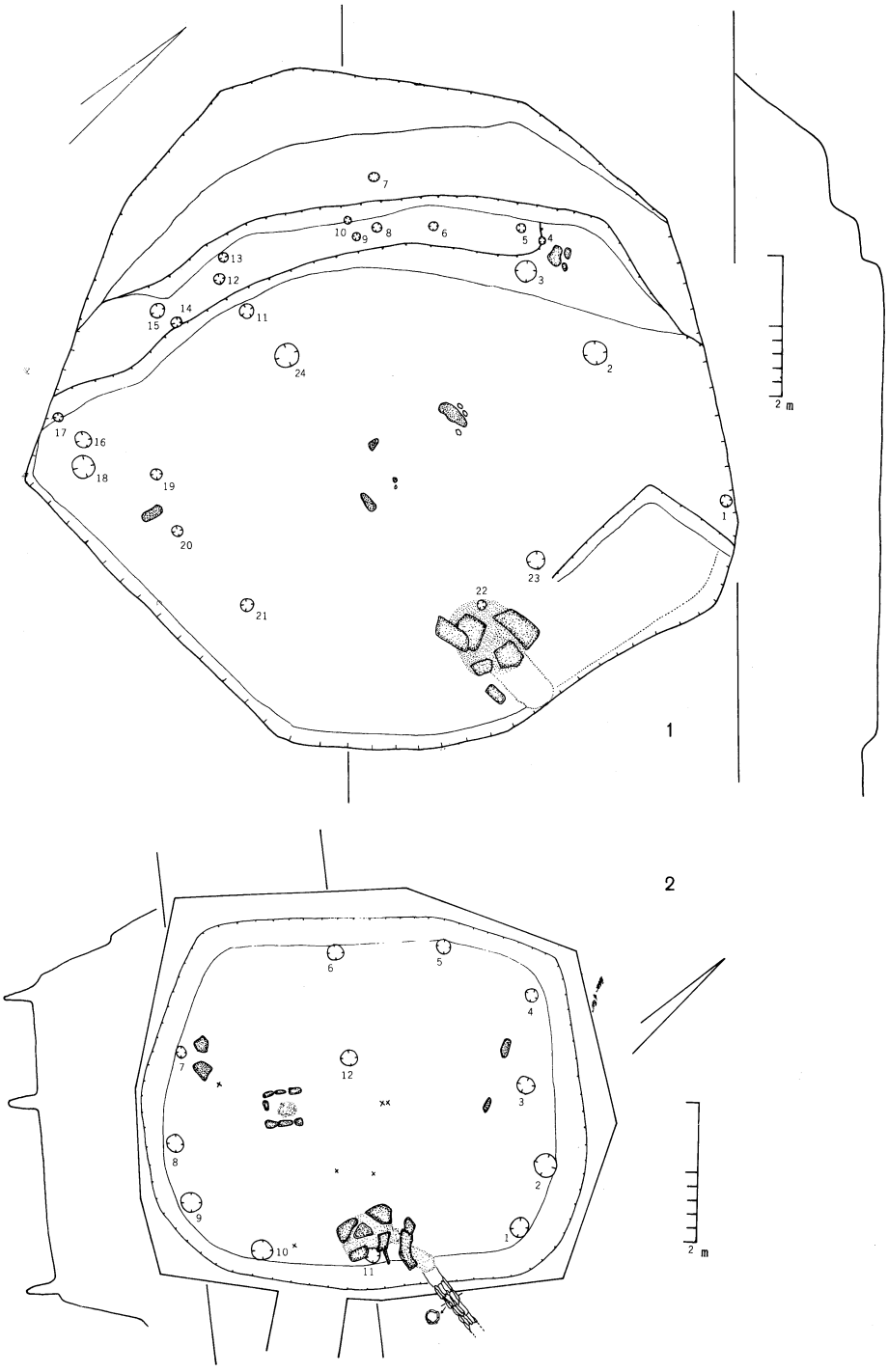
Ⅲ　竪穴の発掘

発掘地点における竪穴の数は表面からの観察では、円形および方形を呈する凹地11を数えた。これらの竪穴は主に5m段丘上に分布し、一部が3m段丘上にかかっている。発掘はこれらの竪穴の中から円形を呈する1号、矩形を呈する2号を選定し、貝塚との関係を追求した。その結果、表面からの観察ではまつたくその所在が不明な竪穴が無数に存在することが解り、その実数は30個を下らないのではないかと考えられる。

第1号竪穴　（2図1）

本竪穴は発掘前の所見では 7.9m × 7.2m、中心部の深さ90cmで、ほゞ円形に近い形状であった。北西壁を根室段丘の急斜面に接し、その斜角は70° 以上という急勾配をなしているが、南東側は沢に面して開けている。

層位　第1層表土、厚さ5～10cm。第2層は火山灰層で厚さ4cmほどであるが、中心部に厚く20cm近い。本層は中心部を除いて、周縁部の大半は撹乱をうけ、特に壁の立上り部分にはほとんど認めることはできない。第3層は黒土層で厚さは5～10cm、第4層は黒褐色土層である。本層は竪穴内全面にみられ、厚さは5～10cmである。第5層は礫まじりの黄



1．第１号住居址

2．第２号住居址

第２図　住居址平面図

褐色を呈する地山である。

遺物は第１層中から近代アイヌまたは和人の鉄製品、磁器類などが散乱した状態で出土している。第２層からはまったく出土をみない。第３層からは擦文式、オホーツク式を主体に少量の続縄文式土器が出土をみた。石器としては掻器などがある。黒曜石の剝片も多い。第４層上部は第３層の主体土器の他に続縄文式土器が出土し、本層下部から第５層上部にかけては、続縄文式土器が主体となる。

遺構　本竪穴ははじめ単一時期の所産と思われたが、発掘の結果、少なくとも３時期以上に亘り、ほゞ同じ場所を選定し、断続して営まれた例である。その範囲は互いに多少出入りはあっても10㎡以内で重なり合っていたもののようである。最新の遺構は、第１層直下外縁部では第２層を削平して営まれていた。それは竪穴の北隅に現われた巾１ｍ、長さ２ｍ、厚さ５cmの焼土を中心としていた。この焼土に倒れたような状態で両端を直交させた径10cm、長さ略70cm位の炭化した丸太がみられ、柱穴（No.２）がみられた。焼土中からは砂岩製の砥石が１個出土している。付近からは、アイヌ玉、貧乏徳利、半銭、かすがい、手斧、漆塗り椀の破片、釣鈎、舟釘、磁器片、ビール壜の破片が散乱し、その範囲は焼土を中心とした６㎡以内に集中している。これらの遺物のみられたより北隅にほゞ東西に軸をとる50個近い細長い石錘とみられる自然石が１ｍ間隔で２ケ所に分かれて出土した。このような焼土を中心とした遺物の出土状態は、ここに第２層或いは第３層上部を床面としたなんらかの遺構が存在したものと考えられる。

これらの遺構の下、第４層上部を床面とした住居地が存在した。一辺７ｍ前後の方形を呈すると思われる。北西壁は急斜面を２段に切ってつくられ、床面からの高さは外側が82cm、内側が55cmである。北東壁は擦文、オホーツク式を伴う別な竪穴によって切られ、南西壁は続縄文式を出土する竪穴を切っていて、立上りは明確でなかった。南東壁は傾斜面の途中につくられていたためはっきりせず、カマドの位置からそれと判断したにとどまった。カマドは板石でつくられ、煙道とみられる粘土帯が東西を軸にし斜行してみられたがこの付近の石はほとんどが動いており、カマドの構造等を追求するのは困難であった。

煙道近くからは擦文式土器の高杯口縁部破片、板石の下からは、深鉢およびオホーツク式に類似した土器片が出土している。床面近くから出土した土器はすべて擦文式土器であり僅かにオホーツク式土器があつた。床面はほゞ水平に近いが、僅かに東南に傾斜しているようにみられた。カマドの石組の下には、更に北東方向に拡がる続縄文式土器を出土する竪穴があるが、これについては、東隅に現われた一部以外、追求しなかった。

柱穴は北西壁の一段目のテラスに１個、二段目に10個、その壁中に１個、床面に12個の計24個が検出されたが、これらがすべて本住居址に伴うものかどうかは詳かでない。第１層から掘り込まれたNo.２は明らかに別物である。平均して径に比し深度が大きいのが気になる。（第１表）

第１表　１号竪穴Pit 一覧表

No.	径cm	深さcm	No.	径cm	深さcm	No.	径cm	深さcm
1	15	−40	9	13	−15	17	10	−15
2	30	−40	10	10	−20	18	30	−35
3	30	−50	11	20	−40	19	15	−50
4	10	−25	12	15	−15	20	15	−60
5	15	−20	13	10	−20	21	20×10	−50
6	13	−30	14	15	−20	22	10	−10
7	15	−10	15	20	−20	23	20	−30
8	14	−20	16	20	−40	24	30	−30

最下層の第５層を床面とした続縄文式土器を伴う竪穴の構造については明らかでない。

出土した遺物

自然遺物として、加工痕があるとみられる鹿角の他はカキが表面に散布していた程度である。文化遺物としては、土器、石器、金属器、磁器その他がある。

土　器

本竪穴からは、続縄文式土器、擦文式土器、オホーツク式土器が混在していたが、これらは遺構が短時期に重複したためである。以下三群に分けて記載する。

第１群土器

続縄文式に属するものを一括する。本群に属するものはその特徴から下記の如く類別されるが、いずれも断片的なものである。

第１類土器（11図１～４・７）薄手の斜行縄文、撚糸文を特色とするもので、１・２では突瘤文を形成しない。４は棒様の刺突文が認められる。突瘤を加工して補修孔としている。７には突瘤は認められない。

第２類土器（11図５・６・８～11、12図６～８）やや厚手、斜行縄文、撚糸文を地文とし、口唇直下に突瘤文がめぐらされている。横環する線縄文（11図５・６、12図７）太い隆線をもつもの（12図６・８）がある。口縁がやや内傾する深鉢を呈するものである。隆線上に縄文、縄端の刺突が施されている。

第３類土器（11図12、12図１・３～５・10）巾の狭く整った縄文の施文された土器である。口唇直下に縄端刺突をめぐらすもの、口縁部に二．三本の並列する撚紐の押捺がみられるもの、隆線に沿って撚紐の押捺文をめぐらすものがある。隆線の刺突を付す。突瘤の認められるものもある。第12図10は耳つき土器である。

第４類土器（12図９）、帯状縄文と三角形の刺突文が施されており、後北C_2、Ｄ式のグループに属するものである。

第2群土器

擦文式土器に属するものを一括する。施文の状態にやや差があり、便宜的に3類に分ける。

第1類土器　(13図1・4・9)、口縁の屈曲の複合が強く長鋸歯文が単独に重畳する構成をもつものと、横走する綾杉文、斜格子目文と複合する構成をもつものである。1は表土からの出土である。4・9は第3層から第4層にかけて出土した。

第2類土器(13図2・5・6・13、14図10)、口縁部の屈曲する度合がやや弱く、数本の沈線帯によって文様が構成されている。14図10は後述する第3群第2類土器をともない、本住居址を切っていた住居址から出土したものである。

第3類土器(13図3・7・8・10～12)、口縁が単純に外反し、口縁部の刻目は三角形の点列として表現されている。胴部文様には鋭利な刻線が用いられ、13図8の刻線帯は三角状の刻点列で縁どられている。7・10は高杯の口縁部破片、11は底部である。10に類似した破片は煙道付近からも出土している。

第3群土器

オホーツク式土器に属するものを一括する。施文の状態にやや差があり、3類に分ける。

第1類土器(14図3～6)、扁平な浮線によって、文様が構成されている。肥厚した口縁部には直線と波線による文様が構成され、胴部には波線と渦状線が描かれている。

第2類土器(14図7～9)、口縁はやや薄く、浮線には指頭などによる刻目がつけられている。

第3類土器(14図1・2)、刻目をもつ浮線の区画内に刻線による文様が施されている。

石　器

石器は石鏃、砥石、掻器、不定形剝片にリタッチのある石器、敲石、自然礫を利用した石錘、黒曜石の剝片92片などがある。内12点を図示した。石質は特に明示していない限りすべて黒曜石である。

石鏃(60図1～6)出土例すべてを図示した。1・2は有柄である。3もそれと同様かと思われるが基部を折損している。第3群土器に伴うものかも知れない。4・5・6は無柄である。第1群土器に伴うものであろう。

不定形剝片石器(60図7～9)縦長の剝片にリタッチのあるものである。10点出土した中から3点を図示した。第1群土器に伴なつたものである。

砥石(60図10～12)10、12は砂岩製、11は泥岩質である。11は金属器を研いだらしく、光沢を有する。

自然礫を利用した錘、蓆編み用の錘が出土している。

敲石　図示していないが手ごろな自然石の一端に打痕を有するものである。

金属器(80図6～11、10図2)

全部で７点出土している。内１点の半銭は厳密には金属器ではないがついでに一括記載する。これらの金属器は錆具合からみると二つのグループに分けられる。

６のかすがい、11の手斧はそう腐植していないグループである。比較的新しいという感じを受ける。７～10は錆がひどい。７は発掘時点ではサバサキの類と無雑作に処理したが錆を落した結果、明らかに異質のものと判明した。一端が巾広に、先に細いクサビ状の鉄製品である。舟釘の一種であろうか。８は釣鈎である。舟釘を曲げている。マレックかも知れない。９・10は舟釘である。後者の鉄器の錆のひどさは、一度使用されたものを更に使用したということに起因するのであろうか。10図２は半銭である。明治10年と打刻されている。

磁器類

貧乏徳利は細い頸部からなだらかな肩部に移行し、安定した底部に続く。 10個体近く出土したが、ほとんどが敲きつけられたような状態で破砕されていた。いずれも刻印はない。高さ 260mm、底径76mm、最大胴径 150mm前後の数値を示し、一升までは入らないようである。東京国立博物館の長谷部楽爾氏の鑑定によれば、唐津の種釉を用いて各地の諸窯で焼かれたものの一つであり、時期は幕末から明治にかけてのものであるらしい。他に湯呑茶椀が１例、復元できたが、これは瀬戸で焼かれた明治中期以後のものという。（47図４～７）

その他

木製漆塗り椀が出土している。これも極く新しい時期のもので、時期は湯呑茶椀と変らないようである。

第２号竪穴 （２図２）

本竪穴は第１号竪穴の南７ｍほど離れて存在した。発掘前の所見ではほゞ南北に長い6.85m ×5.85m、深さ62cmの矩形を呈していた。１号同様北西側は根室段丘の急斜面に接し南東側は沢に面していた。裾にはまばらにカキが散乱し、貝塚の末端に接している。発掘は東西に巾１ｍ、長さ10mのトレンチを設け、層序の観察をおこない、また壁の立ち上りを探った。

層位 第１層表土、厚さ10cm。第２層は白色火山灰層の風化したチョコレート色で厚さ12cm、第３層は黒褐色土層で厚さ10cm。第４層は黄褐色を呈する段丘礫層である。住居址の床面はこの第４層に形成されていた。遺物は表土に僅かのカキを含み、他に数片の擦文式土器片がみられた。第２層および第３層に擦文式、オホーツク式土器が出土し、続縄文式土器が混在した。石器も若干出土している。

遺構 発掘の結果、直線距離で北西壁５ｍ、北東壁 4.1m、南西壁 4.5m、南東壁 5.1ｍで長軸方位は Ｎ45°Ｅである。 南西壁と北西壁はやや膨みをみせる。壁の高さは北西

側110cm、南東側120cmを計り、床面は北西から南東方向へ若干傾斜していた。南西壁は第1群第2類土器を伴なう竪穴を切り、北東壁にも同様の落ち込みの断面が現われている。南西壁際に現われた竪穴には石組を伴うらしく、土器1個体分以上が出土した。またこの石組のものとみられる大形の自然石が壁沿いにみられたが、側壁の支えとして利用したものかどうかについては判然としなかった。柱穴は12個検出され、内11個は壁沿いにみられた。残り1個は中央に位置する。中心部よりややずれ、東側に開口した石囲いの炉がある。カマドは南東壁中央より少し東北に寄せて設けられていた。それに使用した板石は倒れ、構造を追求するに足る状態ではなかったが、この石組に続く煙道は若干斜行し、南東壁の盛土でできた土手を斜めに貫き、ほゞ東西に軸をとった形でみられた。煙道そのものの長さは長いカキの殻7枚をもってつくるという厚岸らしい特殊な手法をもっている。煙道の長さは110cm、径20cmである。カマドの右側に青灰色の粘土塊がみられた。カマド付近からは、第2群土器が破片ではあるが、2・3個分出土している。第3群土器は無文の破片が1片みられた。

本竪穴発掘終了後、入口を探すべく、カマドの右側、煙道より南に1.2m離して、住居址内に2.5m、外に1.5m、巾50cmの小トレンチを設けて調査した。その結果、本竪穴はこの床面下に営まれた第1群土器の時期の住居址の北西壁を壊し、盛土して南東壁を作っていることが明らかとなった。また本竪穴の床面直下に発する焼土と木炭がその竪穴を覆っていることも判明したが、これが本竪穴に続くものかどうかは明らかにし得なかった。入口の存在についても、確証を得るに至らず、後日を期した。

第2表　2号竪穴Pit一覧表

No.	径cm	深さcm	No.	径cm	深さcm	No.	径cm	深さcm
1	12	−20	5	11	−16	9	9	−24
2	15	−22	6	11	−16（斜め）	10	14	−22（斜め）
3	12	−20	7	10	−12（斜め）	11	11	−16
4	8	−13	8	13	−22	12	12	−20

出土した遺物

自然遺物としてはエゾシカの角とカキが僅かに表土にみられたに過ぎない。エゾシカの角は一対みられ、鋭利な刃物による切断痕を有するものである（78図1・2）。

土　器

土器は続縄文式、擦文式、オホーツク式土器が混在していたが、続縄文式土器は竪穴内部には顕著でなく、器形の窺えるものはすべて、南西壁外の竪穴及び小トレンチから出土したものである。また北西壁に転落したような状態で小形の完形土器がみられた。以下3群に分け記載する。

第1群土器

続縄文式に属するものを一括する

第1類土器（12図2・15図3）数十条の横走する縄文によって特色づけられる。15図3は実測右半面の口唇に刻線が並列し、左半面の口唇には縄文が施されるといった特殊なくせをもっている。

第2類土器（15図4）やや整った縦走する密な縄文によって特色づけられる。小形の口縁の内湾する器形を呈し、一対の隆起部内面には、縄端の押捺痕がみられ、さらに口縁部をめぐる突瘤がある。

第3類土器（15図1・2、16図1・2、4～8）、巾の狭い整った斜行縄文によって特色づけられる。口縁のやや内傾する深鉢形土器、耳付き土器（16図5・8）、小形土器（15図2）が認められる。口縁部隆線とそれに沿う撚紐の押捺文によって特色ある文様が構成されている。なお隆線の接点には刺突が加えられている。また漏斗状の小円を並べた文様（16図7）も認められる。16図8には、繊維が入れられた形跡がある。

第4類土器（16図3）口唇に刻目をもち条痕文を縁どる隆線、三角形の点列文によって特色づけられる。後北C_2・D式のグループに属するものである。

第2群土器

擦文式土器を一括する。施文差により便宜上3類に区分する。

第1類土器（17図1・2）口縁部の屈曲がやや強く、長鋸歯文を斜格子目文の組合せによる文様が構成されている。

第2類土器（15図5～7、17図3～5）、数本の沈線、あるいは刻線によって文様が構成されている。口縁部の屈曲がやや弱いもの、直線的に開くもの、などがある。

第3群土器

オホーツク式土器に属するものを一括する。施文差により3類に分ける。本群土器の多くは北東壁より出土をみたものである。

第1類（17図12）浮線によって文様が構成されているものである。

第2類土器（17図9～11）、口縁が薄く、浮線の区画内に刻線による文様が施されている。17図9は横走綾杉文と、それを数本の縦で切る文様を細刻線によって表現している。

石　器（60図13～17）

石器としては石斧の破損品1、掻器2、不定形剝片石器10、石槍1、敲石2がある。石斧および不定形剝片石器については割愛した。

石槍（13）有柄の小形品である。薄身の縦長の剝片を利用している。1例のみ。

石鏃（14）1例のみの出土である。無柄。

掻器（15）3点出している。一端に刃部を形成している。

敲石（16・17）17については誤って有肩石斧と報告したが、敲石とみた方が無難である。

小　括

調査の概要は以上の通りである。１号竪穴は単一時期の所産でなく偶然同じ竪穴が３時期以上に亘り使用されたものである。最上層の遺構は焼土を中心としたものであったが、アイヌか和人の杣夫のものか、判然としない。　細長い自然礫をキナ編み用の錘とみればアイヌ的色彩が強いが決め手にかける。その上限は、白色火山灰（Ｍａ －ｆ ）層の上にみられたことからこれよりは新しく、その下限は半銭、ビールビン、湯呑茶椀などから、明治中期以降～大正でまで下るものと思われる。中層の遺構は擦文文化期である。カマドは沢に面した南東壁にあった。

２号竪穴で特記すべきことは、石囲いの炉をもち、南東側にカマドを有するという組合せであり、しかも煙道が厚岸産のカキ殻によってつくられていたということであろう。

Ⅳ　貝　塚　の　発　掘

竪穴のある５ｍ段丘の裾から孤を描いて拡がる貝塚はそう大きなものではない。しかし貝殻の散布は小川に沿って幅20ｍ、長さ50ｍ程の規模で帯状にみられ、奥では、第11号竪穴付近までみられた。その中心部は、第２竪穴と小川に狭まれた間である。　発掘は表面観察により、最も厚い貝層の存在と予想される部分を選定し、1965年に一本のトレンチを設けて開始され、これを中心に二次、三次とその輪を広めていった。

二次調査では、第一次調査に設けられたトレンチ（1965年トレンチ）を基準にしてその東側へ直角に高低二面の段丘を縦貫するように幅２ｍ、長さ10ｍのトレンチを、さらに、1965年トレンチに隣接させて幅２ｍ、長さ10ｍの第２トレンチを設けた。また調査の進行に従って16㎡の第１トレンチ拡張区（Ｃ′、Ｃ″、Ｄ′、Ｄ″）を新設し、この３地点のトレンチを中心に作業を進めたが、その後第２トレンチの西10ｍの地点に幅10ｍ、長さ10ｍの第３トレンチを開設し、貝層の拡がりを追求した。

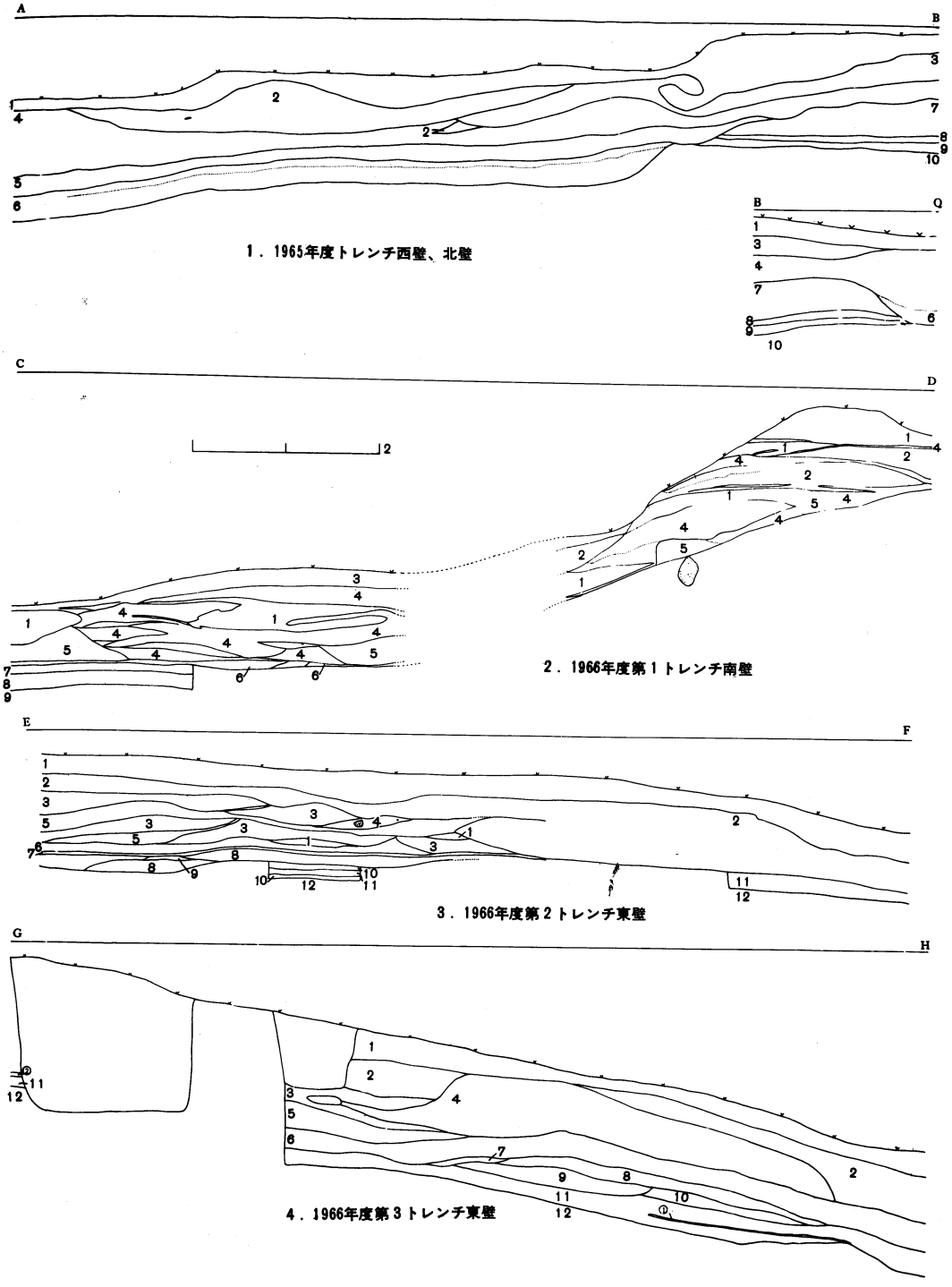
第三次調査は1966年の第３トレンチと1965年トレンチの間に直角に幅２ｍ、長さ６ｍの第１トレンチを設定し、２ｍ四方を一区とし、西から順に１・２・３区とした。その後１区に人骨の出土をみ、拡張区を設けた。さらに作業の進行に従い第２、第３のトレンチを加え、貝層の拡がり及びその下層の包含層の状態を追求した（１図参照）。

トレンチの層位

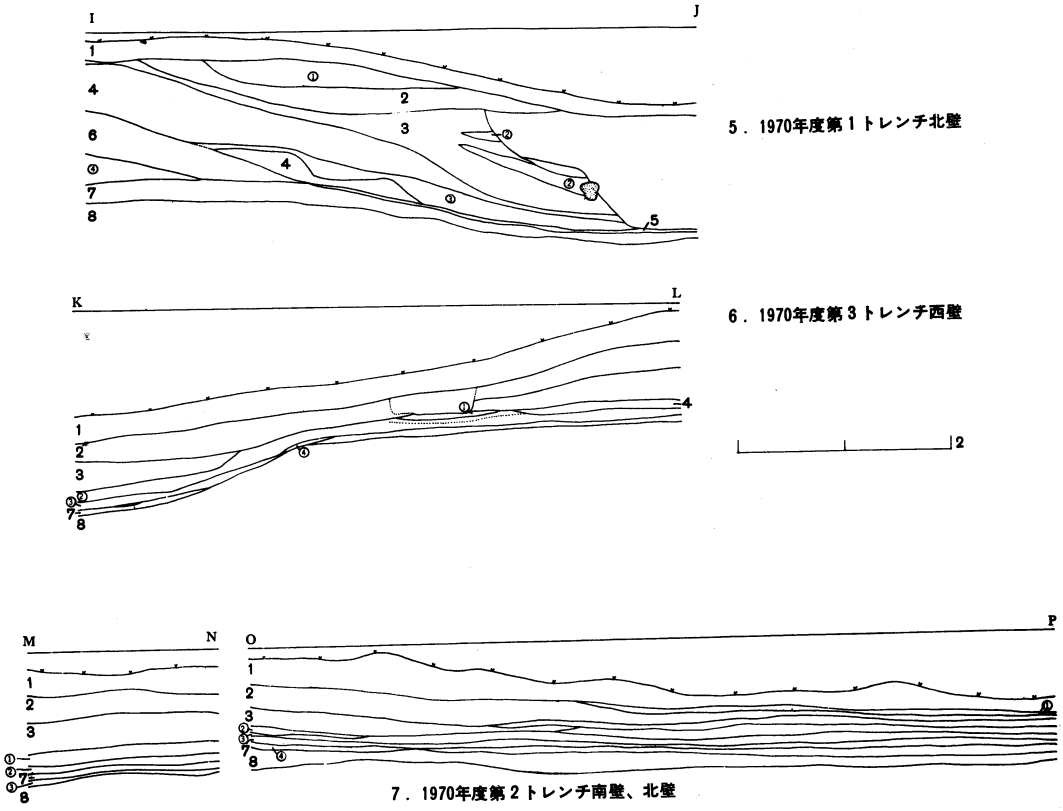
各トレンチは10層前後の層位を識別できたが、層序の混乱が激しく、判別に苦しんだ。以下各トレンチごとにその層序について記載する。

1965年トレンチ（３図１）

第１層表土、第２層貝混りのチョコレート色をした土層、第３層貝まじりの黒土層、第



第3図　各発掘区断面図1



第4図　各発掘区断面図2

4層混土貝層、第5層純貝層、第6層泥炭層、第7層褐色土層、第8層黄褐色土層、第9層・10層は白色に近い粘土層の互層である。

以上の10層を区別したが、遺物の出土をみたのは8層までである。この内第1層から第4層までは撹乱層である。第1層からは近代の金属器、磁器片を出土しているが、第2層以下の層にはその出土をみない。第5層から第8層までは、続縄文式土器が出土し、下層にいくに従って少なくなる。こうした傾向は後述する各トレンチに共通する。

1966年第1トレンチ（3図2）

第1層表土。第2層褐色土層。第3層破砕貝層である。この層は非常に細かく砕けた貝と灰の混じった層である。第4層は混土貝層である。第5層カキ主体にした貝層、第6層は魚骨腐蝕土層、第7層黄味のかかった灰白色粘土層、第8層白ぽい灰白色粘土層、第9層青色粘土層である。第4層までは撹乱層である。ここでも第6層以下は続縄文式土器が出土し、特に第9層及び第8層直上において最も多く出土した。C区では泥炭層が第6層直下にみられた。

1966年第 2 トレンチ（3図3）

第１層は1965年トレンチ発掘の盛土、第２層が本来の表土である。第３層は破砕貝層、第４層は黒色混土貝層、第６層は多少貝を混えた灰色層、第７層は魚骨腐蝕土層に類似した鉄分を含んだ層、第８層は純貝層、第９層は黄色粘土質土層、第10層は黒色粘土質土層即ち泥炭層である。第11層は褐色粘土質土層、第12層は青色粘土層である。ここでは、魚骨腐蝕土層の下に純貝層が入りこんでいる。これで純貝層は二分される。泥炭層はＢ区～Ｄ区にかけて拡がりをみせ一部がＣ区に及んでいる。木質遺物の殆んどはこの層から発見されている。

1966年第 3 トレンチ（3図4）

第１層表土、第２層黄褐色土、第３層は黄褐色で第２層に似るが木炭が多い。貝層を狭んで二つに分かれる。撹乱層の疑いが濃い。第４層は純貝層である。第５層は黄褐色土層で黄味が濃い。第６層は第５層と同じ色調を呈するが木炭が多く、全体としてはその木炭の細粒が目立っている。第７層は白灰の層である。第８層も第６層に類似し木炭の細粒が多い。第９層、第10層は同じ層と思われるが、第９層は黄褐色が顕著で、一見二次堆積風にみえる。第10層はこれが粘土質となっている。第11層は泥炭質の黒土層である。水分が多い。ここにはトレンチ南端C･D区で①の鉄分の多い魚骨腐蝕土層に対比される層が狭在している。北端の②は焼土である。土器は貝層及びそれ以下の層から続縄文式土器が出土し、その上層にはオホーツク式、続縄文式、擦文式土器が混在した。

1970年第 1 トレンチ（4図5）

第１層表土で耕作土、①は淡褐色を呈する破砕された貝を含む混貝土層である。第２層の黒褐色土層も同様の貝を含む。第３層の黄褐色土層は②の混貝土層を二層介在させている。第４層は純貝層である。③の黄褐色土により二分されているような形になっている。第５層は魚骨腐蝕土層で第６層の黄褐色土の上にのる。第６層は③と同じ性質の土質かもしれない。第７層の黒色粘土質の泥炭層と第６層間には④の赤褐色土層がみられる。第８層は粘土層の互層である。遺物は全層に亘り出土する。第１号人骨は第２層を少し掘りこんで埋葬されていた。擦文式、オホーツク式が出土するのはこの第２層までで、それ以下の層からは続縄文式土器が出土している。

1970年第 2 トレンチ（4図7）

第１層表土、第２層暗褐色土、第３層黄褐色土層と堆積をみせる。この下に第１トレンチに現われた第４層～第６層までの層を欠くが、第７層の泥炭層との間に①、②の酸化鉄の多い層を狭み、更にその下層に茶褐色土層があり第８層の粘土層となる。トレンチの東端には表土下に①の火山灰層がみられた。遺物は、魚骨腐蝕土層に対比される①、②の層と泥炭層直上に集中した。続縄文式土器である。表土に擦文式、オホーツク式土器及び続縄文式の新しい型式の土器が出土している。

1970年第3トレンチ（4図6）

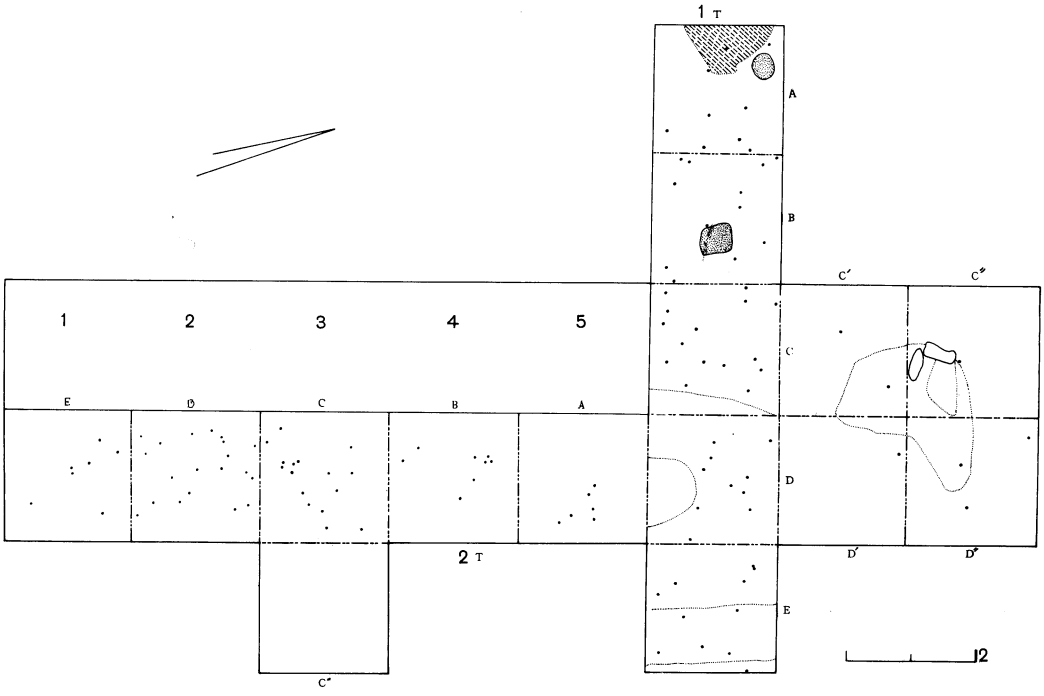
層序の記載は第1、第2トレンチに準ずる。4は混土貝層であるが、純貝層の末端らしい。①は混貝土層である。②、③は茶褐色土層、④は鉄分の多いレンズ状の堆積である。遺物は第7層までである。第8層には稀にみれるに過ぎない。遺構には第2層から掘りこまれた第2号墓壙がある。この他に東壁には魚骨腐蝕土層から打たれた杭が、2本泥炭層を貫き粘土層に刺さっていた。

発見された遺構

発掘された遺構には墓坑3例、石組、焼土、住居址様落ち込み、棒杭の配列などがある。

墓坑、3例ある。いずれも人骨を伴う。その保存は比較的よいが、後世の攪乱を受け、一部または大部分が破壊され全体が揃ってはいない。

1966年第3トレンチの墓坑　（7図）A区第2層を切って幅65cmの断面U字状に近い長楕円形を呈する墓坑が発見されている。人骨の埋葬頭位は南西である。墓坑の長軸方位はN 133°Wの長さ110cmを算 すると思われるが、北東側は表土直下から垂直に掘り込まれた近代のpitによって切断され、そのため右側臥屈葬の姿勢をとる人骨の足の骨は一部失われている。頭部及び胸部付近、墓坑周壁沿いにかけて、人頭大から拳大の礫が集中した。これはトレンチ北西壁のセクションでは、この墓坑の上面が浅い皿状の落ち込みとなって

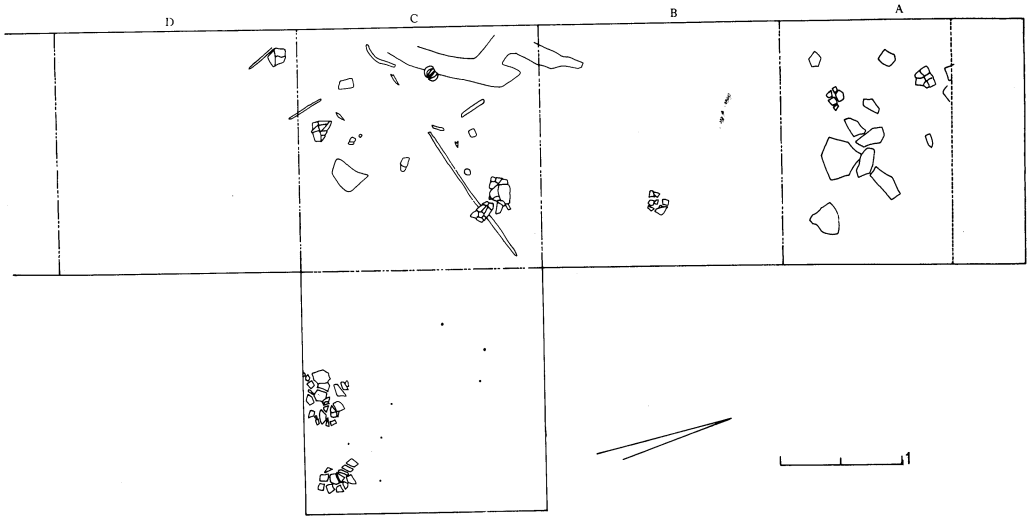


第5図　1966年　第1、第2トレンチ遺物出土状態

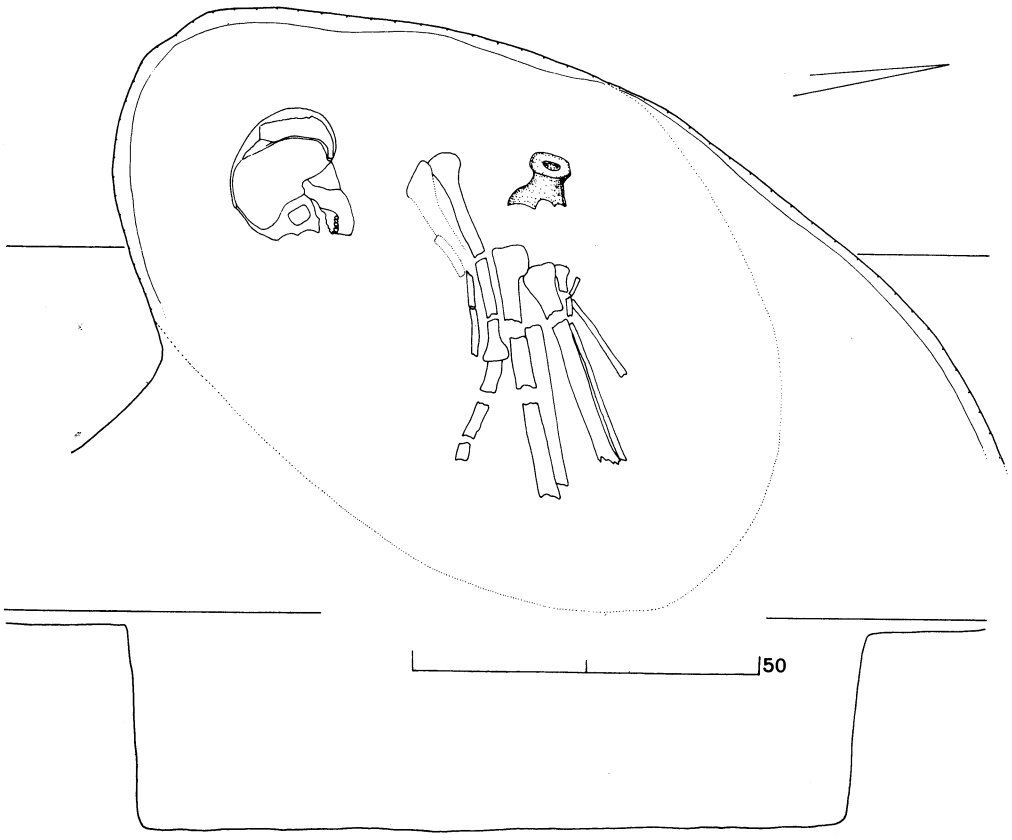
現われ、ほゞこの墓坑を覆う状態で観察された。この礫中に擦文式土器高杯の口縁を欠く破片(38図22)が1例混在した。他に時代を示す遺物はない。なお、南東壁に現われた人骨及び墓坑を切断したpit は幅2m 、深さ1.2m に達するもので、その底は遺物のなくなる地層である地山層の上面まで掘り下げられたもので、東西に軸をとった発掘溝とみられるものであった。

1970年の墓坑（8図1・2）　2例発見された。1号は純貝層の上を覆う第2層、第3層を削平して埋葬されていた人骨があった。この人骨は周囲を撹乱され、周壁の落ち込みが判然とせず、プランは不明である。上部は撹乱され、ほとんど表土に近いところで発見されたものである。したがって、発掘により観察された人骨は、腰骨と大腿骨を残すのみで、手足の骨、歯の一部はトレンチ内に現われた撹乱層中より出土をみたが、頭蓋骨はついに発見されなかった。この人骨はすべて背面をみせていたことからうつぶせの伸展葬であったと推察される。人骨の置かれた状態から察して頭位は7°南へふれるN 97°E とすることができる。時代を示す遺物は何も検出されなかった。

2号は1号ほど破壊されてはいないが、それでも大腿骨と腰骨の部分が撹乱を受け失われていた。この人骨も1号同様背面をみせたうつぶせの伸展葬であるが、頭位は1号とはまったく逆方向の西より20°北のN 70°Wをとる。墓坑は幅76cm、長さ190cmでほゞ東西に軸をとり、貝層を浅く10cm掘り込んでいた。墓坑の断面はU字状である。副葬品として人骨の南側に刃先を東にしたマキリ（80図2）が1例みられたが、墓標の存在等は詳かでない。

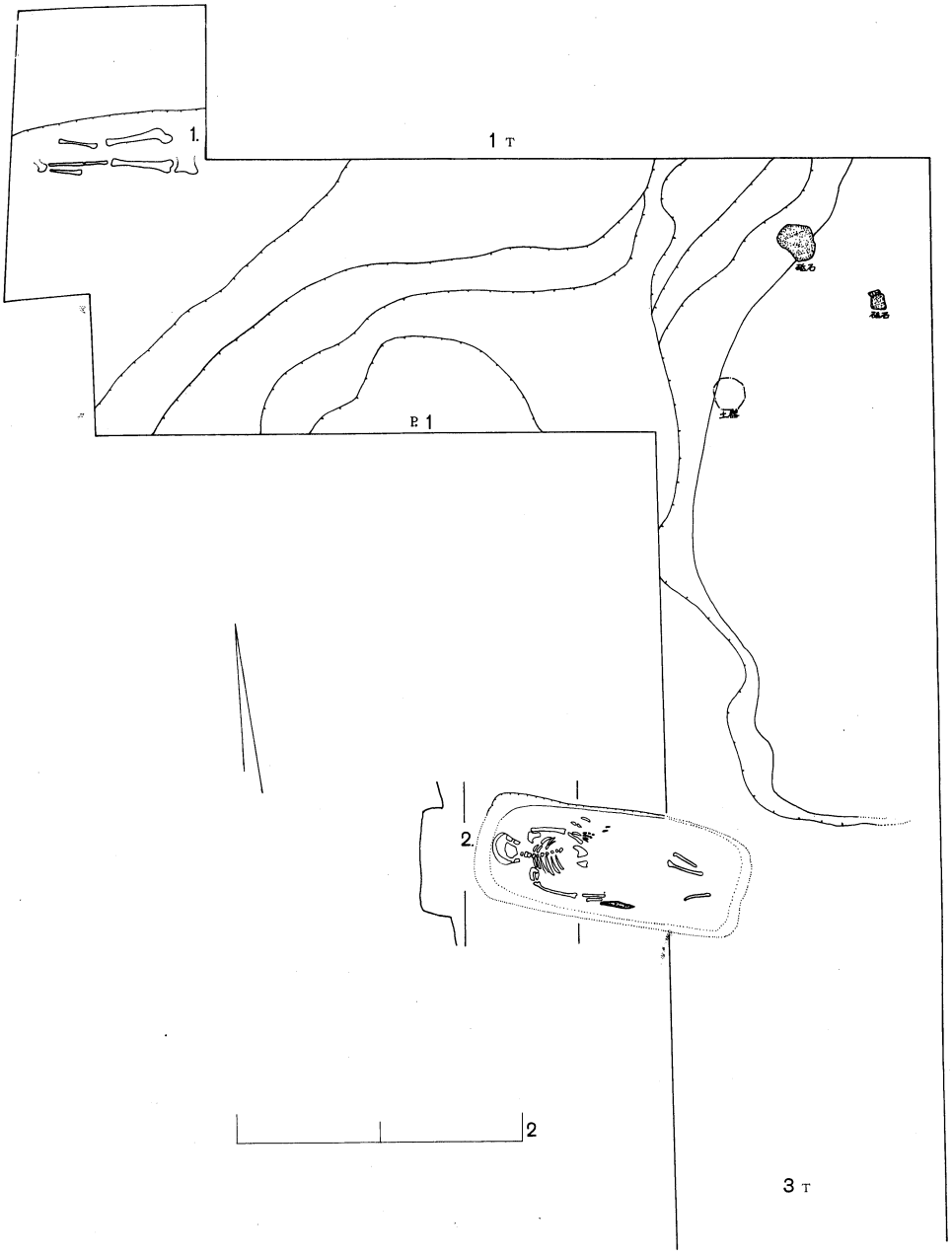


第6図　1966年　第2トレンチ泥炭層直上遺物出土状態

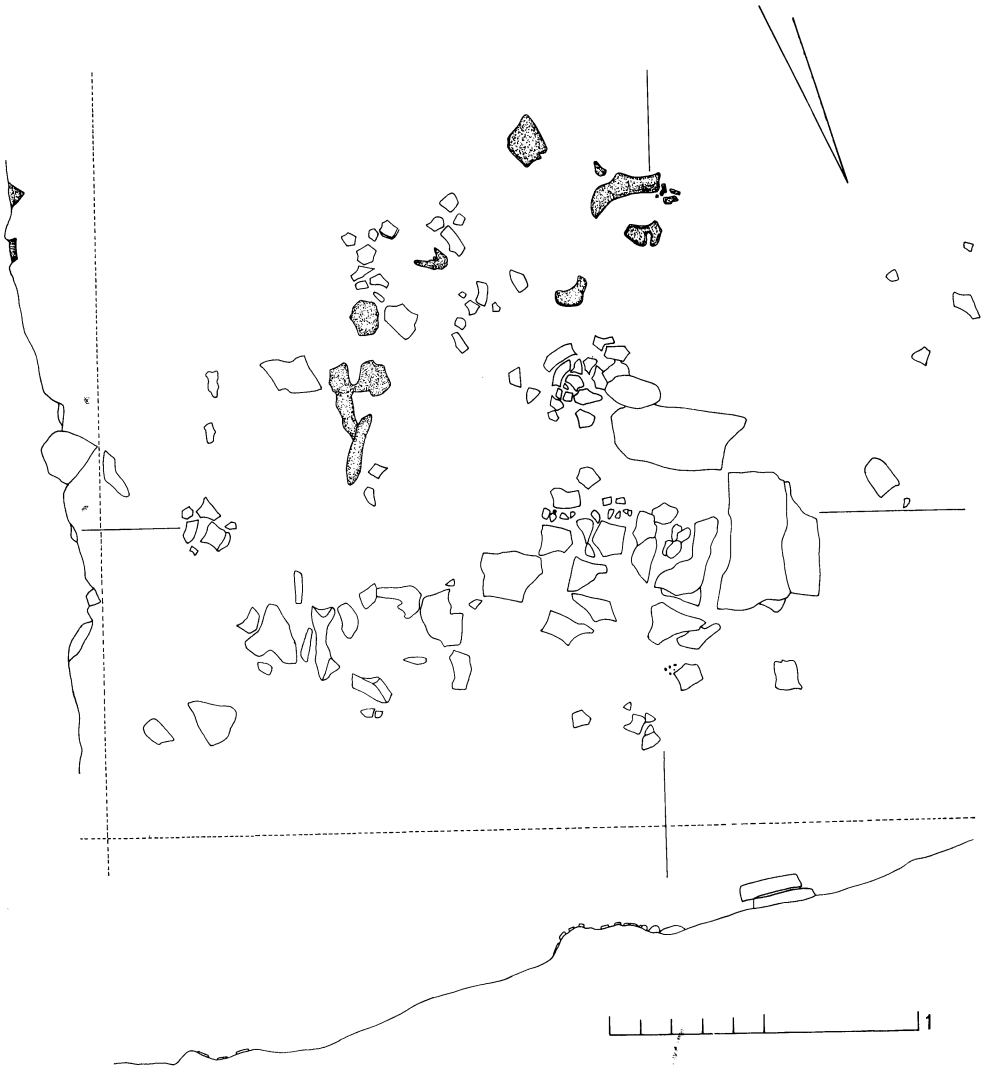


第7図　1966年　第3トレンチ埋葬人骨

石組　1966年第1トレンチ拡張区には安山岩質の小石と扁平な砂岩を使用した石組遺構を発見した。石組周辺には多量の土器、少量の石器と共に大形の海獣を主体にした動物遺骸が集中的に埋没しており、単なる残滓の廃棄場所としてだけでは解釈のつかない状態を示していた。長軸をほぼ東西にとっていた。しかし pit 様の下部構造などは検出できなかった。この石組は最上層の黒色土層中に構築されていたが、発見される土器は擦文式土器が主体を占め、オホーツク式土器を加え続縄文式土器もみられた。しかし本貝塚の主体をなす続縄文式土器は石組がつくられた黒色土層より、さらに一枚下った土層中に含まれており、石組と直接の関係はなかったようである。この石組遺構が、この遺跡において占める役割を明らかにするにはさらに多くの面積の発掘を必要とする。



第8図　1970年　第1、3トレンチ平面図



第9図　1966年　第1トレンチ拡張区石組遺構〔砂目は獣骨〕

その他の遺構　各年次のトレンチにみられるように、貝層の撹乱個所が随所にみられた。この大半は近代になってからのものであるが、中には1970年第1トレンチに現われたpit（8図P 1）のように紡錘車、擦文式土器を出土した住居址様の落ち込みがある。また、1966年第1トレンチA・B区には、ヨシの炭化したものがフラットな面を構成し、焼土が検出され、完形土器が出土し住居址の一部とみられるものもある（5図）。さらに泥炭層の存在をみた1965年トレンチ、1966年第2トレンチ、1970年第2トレンチでは、粘土層に突きささった棒杭が10数本発見されている。これなども何らかの遺構の存在を現わすものであろう。なお焼土は1966年第3トレンチA区においても第11層の上にのってみられた。

（沢　四　郎）

出土した遺物

遺物としては、土器、石器、骨角器、木製品、金属器、磁器片がある。磁器片は撹乱層から出土した近代の茶椀類である。他に自然遺物がある。

土　　器

出土した土器は、すべて続縄文、擦文、オホーツク各式に属する。これらの各々を第1群、第2群、第3群とする。図版が多数に亘るため、本文中に図版番号を省略してあるので、付表及び図版中の注記を参照されたい。

第1群土器

本群土器の一部が未撹乱の貝層及び貝層下土層に包含されていた。それと同様の特色をもつ土器を第1類とし、以下特色のあるものを摘出して第2類、第3類として記載する。

第1類土器、地文の構成は下記の如くである。

a、縄文の施された土器である。縄文はやや密に施され、原体にはLR、RLの両者が一般的に用いられている。他にわずかではあるがRLRの原体も使用されている。横位に回転施文された、右下り、左下りの斜行縄文の他に、左上方から右下方へむかって施文する例が多い。その結果RLの原体を使用した場合は縦走する縄文となり、LRの原体を使用した場合横走する縄文となる。

b、撚糸文の施されたものである。縦位、斜位に施されたものが多い。横方向に施される場合もある。原体の粗、密、不規則なるものがある。部分的に縄文を加えるものもある。

c、条痕文の施されたものである。地文として縄文あるいは撚糸文が施されている。

d、無文のものである。

条痕文と無文の両者はごくわずかである。装飾文様は口縁部に集中して施される。一番普遍的な文様は突瘤文である。口唇直下に一列横還して施されている。しかしながら、瘤の凸出度合にかかわらず、突瘤方法の用いられていないものがある。なお表面から突いて裏面に突瘤を形成するものもある。

突瘤の有無にかかわらず、口縁部文様をみるならば、無文帯に文様を施すものと地文の上に文様を施すものとに大きく区別される。前者をⅠ、後者をⅡとする。

Ⅰ、口縁部に無文地を設け、そこに線縄文をめぐらすものである。これには刺突文が加えられるものと縦の隆線を付すものも小量ある。

Ⅱ、地文上に施されるものであるが、線縄文をめぐらすものと、これに縄端あるいは棒状工具による刺突の加えられるものとが多い。さらに線縄文に隆線の加えられるものがある（以上Ⅱa)。沈線文で文様の描かれるものもある（Ⅱa′)。また縄端あるいは棒状工具による刺突文を多くは2列横環させる文様もみられる（Ⅱb)。隆線をめぐらすものもある（Ⅱc)。多くは口唇部の突起に対応して独立した文様の施されるものもある（Ⅱd）。

これには、隆線を垂下させるもの、刺突文を施すもの、垂下する隆線と刺突文とが組合わされているもの、刺突文と部分的な線縄文とが組合わされているもの、垂下する隆線と線縄文とが組合わされているもの、円形あるいは短かい棒状の貼付文をつけるもの、6段の横位の短かい線縄文を太い刻線が切るものなどがある。

Ⅲ、その他の文様として、口唇直下に縄端刺突文がめぐらされているものや、雑な沈線の施されたものがある。

器形は深鉢形と釣耳付の形態をとるものとがある。深鉢形には口縁の外反するものと、やや内傾するものとがある。　口縁部に4個所の山形隆起を付し一対にのみ瘤をつけるもの、一対隆起部を一対の小突起を付けるもの、一対の突起のみのものなどがある。釣耳付の形態をとるものには、平縁のもの、一対の隆起した耳部を一対の小突起を付けるもの、一対の耳部がわずかに隆起するものなどがあり、ほぼ直立する口縁をもつものと、口縁のやや内傾した下膨みの形態をとるものとがある。釣耳の作出には棒状工具で突くものと、半円形にした粘土帯を貼付する仕方とがある。底部は平底を呈するものと、若干揚底気味のもの、明確な揚底、丸底気味の平底を呈するものがある。立ち上りは底部から鈍角に開くもの、少し直立して急に開くもの、強く内弯するもの、外側へ強く突出するものなどがみられる。

第2類土器

a、縦行縄文をややまばらに施すものである。帯縦走するものと、それが不規則になるものがある。不規則のものでは第1類土器の縄文と区別がつかない。

b、幅の狭い帯状の整った斜行縄文が施されるものである。密に施される場合と、帯状に施される場合がある。施文の方向はさまざまである。これもややみだれた場合には第1類土器の縄文と区別できない。

装飾文様は隆線によるものと、線縄文によるものとがあり、さらに両者の組合されたものがある。他に縄端などの刺突文によるものがある。突瘤文は隆線文と線縄文の組合されたものにはあまり施されていない。

Ⅰ、隆線は垂下する形態をとり、接点、屈折部にのみ刺突を加える場合が多い。

Ⅰ′、刺突文による場合も隆線と同様垂下する形態をとるが、単独に広く用いられてはいない。

Ⅱ、線縄文によるものである。口縁部、胴部、底面にも施される。撚りの異なる撚紐を2本一組にして押捺している場合が多いけれども、それぞれ1本づつ押捺される場合、同じ撚りの紐を2本併列させる場合もある。

Ⅲ、隆線文と線縄文とが組合わせて施されるものである。

器形は深鉢形を呈するものと釣耳をつけているものとがある。深鉢形には雄大な把手を付けているものとほぼ平縁で小さな隆起部を付けるものとがある。いずれも口縁部がやや

内傾し、胴の強く張り出すものである。底部はあまりくびれずに広がる。

第３類土器

所謂後北C_1、C_2、Γ式の文様を備えたものである。

ａ、縄文の施されたものである。条に沿って押捺点をずらしてゆく斜位押捺手法による帯状縄文が顕著である。

ｂ、条痕文の施されたもので量は少ない。

他の文様要素には、微隆線文と鋭い刺突文、沈線文がある。

Ⅰａ、微隆線によって文様の構成されるものである。円形を描くもの、孤を描くものなどがみられる。

Ⅰｂ、沈線文によって微隆線と同様の文様を構成しているものである。

Ⅱ、縄文、条痕文によって文様が構成され、それを隆線で縁どるものや、口唇直下にやや太い隆線をめぐらすものもみられる。空間部にやや大きめの刺突を施すものが顕著である。

器形は大小の深鉢形、耳付土器、小形の器形をとるものなどが想定される。

第２群土器

擦文式土器である。一応便宜的に区分する。

ａ類、１本乃至２本の沈線で長鋸文を形成しているものである。横走綾杉文と組合わされるもの、同形の文様を重ねるものなどがある。

ｂ類、数本の沈線を単位として文様の構成されるものである。斜格子目を構成するものも関連があるかと思われる。

ｃ類、やや雑に引かれた沈線による施文のみられるものである。左下りの斜線帯に右下りの斜線を部分的に重ねる文様がみられる。

器形は25～30cm前後の口径をもつ深鉢、22cm前後の口径をもつ深鉢、さらにもうすこし小形の深鉢形を呈するものがある。高杯形土器には薄くつくられたものとやや厚いものとがある。基部に透しまではゆかないが、長三角形の面を切り取ったものがある。

なお擦文式土器に伴う紡錘車が一点ある。簡単な刻線による文様がつけられている。

第３群土器

オホーツク式土器の伝統を受けついだものを一括する。

ａ類、口縁部はあまり肥厚せず、胴部文様は爪などで刻み目のつけられた浮線文を用いて構成するものである。

ｂ類、擦文式土器の文様を借用したと見なされるものであるが、それを変形し独特の文様を構成するものもある。多くは浮線の区画内に文様を施すが浮線のないものもある。器形は口の広い深鉢形を呈するもので、底部は直線的に広がっている。

以上記載してきた３群の土器中、第１群１類土器、第２類土器をそれぞれ、下田ノ沢Ⅰ.同Ⅱ式と仮称したい。(大　沼　忠　春)

下田ノ沢遺跡出土土器一覧（住居址出土の土器については図版中に注記した。）

第18図

1　1－1－b
2　1－1－b
3　1－1－b
4　1－1－b
5　1－1－b
6　1－1－b
7　1－1－b
8　1－1－b
9　1－1－a－Ⅱ－c
10　1－1－a Ⅱ
11　1－1－a Ⅱ－c
12　1－1－a Ⅱ－c
13　1－1－a Ⅱ－d
14　1－2－b Ⅲ
15　1－1－a Ⅱ－c
16　1－2－b Ⅲ
17　1－2－b Ⅲ
18　1－2－b Ⅲ

第19図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－a
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－2－a
7　1－1－a
8　1－2－a
9　1－1－a
10　1－1－b
11　1－1－b
12　1－1－b
13　1－1－b
14　1－1－b
15　1－1－b

第20図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－b
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－a－Ⅰ
7　1－1－a－Ⅱ－d
　or 1－2－a－Ⅱ
8　1－1－a
9　1－1－a
10　1－1－a
11　1－1－a
12　1－1－a
13　1－1－a
14　1－1－a
15　1－1－a
16　1－1－a
17　1－1－a
18　1－1－a
19　1－1－a
20　1－1－a
21　1－1－a
22　1－1－a
23　1－1－a

第21図

1　1－2－Ⅲ
2　1－1－b
3　1－1－b
4　1－1－a－Ⅱ－d
5　1－1－a
6　1－1－a
7　3
8　1－3－a－Ⅱ
9　1－3－a－Ⅱ
10　2－b
11　2
12　2
13　2－b
14　3－a
15　3－a
16　3－a
17　3－a
18　3－a
19　3－a

第22図

1　1－1－c
2　1－1－a－Ⅱ－d
3　1－1－a－Ⅰ
4　1－1－a－Ⅰ
5　1－1－Ⅰ
6　1－1－a－Ⅱ－a
7　1－1－a－Ⅰ
8　1－1－a－Ⅱ－a
9　1－1－a－Ⅰ
10　1－1－a－Ⅱ－a
　or 1－2－a－Ⅱ
11　1－1－a－Ⅰ
12　1－1－a－Ⅱ－a
13　1－1－a－Ⅱ－a
14　1－1－a－Ⅰ
15　1－1－a－Ⅱ－b
16　1－2－b－Ⅱ
17　1－2－Ⅲ
18　1－2－b －Ⅲ
19　1－2－Ⅱ
20　1－2－b －Ⅰ′
21　1－1－a
22　1－2－b －Ⅰ′
23　1－2－b －Ⅰ′
24　1－1－c

第23図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－a
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－a
7　1－1－a
8　1－1－b
9　1－1－b
10　1－1－b
11　1－1－b
12　1－1－b
13　1－1－a－Ⅱ-a
14　1－1－a－Ⅱ-a
15　1－1－a－Ⅱ-a′
16　1－1－a－Ⅰ

第24図

1　1－1－a
2　1－1－b
3　1－1－a－Ⅱ-d
4　1－1－a－Ⅱ-d
5　1－1－b－Ⅱ－a
6　1－1－a－Ⅱ－a
7　1－1－b
8　1－1－a－Ⅱ-d

9 1-2-Ⅱ
10 1-1-a
11 1-1-a-Ⅱ-d
12 1-1-a-Ⅱ-d

第25図

1 1-1-a
2 1-1-a
3 1-1-a
4 1-2-b
5 1-2-b
6 1-1-a
7 1-1-a
8 1-1-a
9 1-1-a
10 1-1-a
11 1-1-a
12 1-1-a
13 1-1-a
14 1-1-b
15 1-1-b
16 1-1-a-Ⅱ-d
or 1-2-a-Ⅰ
17 1-1-a-Ⅱ-d
or 1-2-a-Ⅰ
18 1-1-a-Ⅰ

第26図

1 1-1-a-Ⅱ-d
2 1-2-a-Ⅱ
3 1-2-Ⅱ
4 1-2-Ⅱ
5 1-2-Ⅱ
6 1-2-Ⅱ
7 1-2-a-Ⅲ
8 1-2-Ⅱ
9 1-2-a-Ⅱ
10 1-1-a-Ⅰ
11 1-3-a-Ⅱ
12 1-3-a-Ⅰ-a
13 1-3-a-Ⅰ-a
14 1-3-a-Ⅰ

第27図

1 1-1-a
2 1-1-a
3 1-2-b-Ⅱ
4 1-2-Ⅱ
5 1-2-b-Ⅱ
6 1-2-Ⅱ
7 1-1-a-Ⅱ-d
8 1-1-a-Ⅱ-d
or 1-2-a-Ⅰ
9 1-2-Ⅲ
10 1-2-Ⅱ
11 1-1-a
12 1-2-b
13 1-2-b-Ⅱ
14 2-b
15 2-b
16 2-b
17 2
18 2
19 2
20 3-b

第28図

1 3-a
2 3-a
3 3-a
4 3-a
5 3-a
6 3-a
7 3-a
8 3-a
9 3-a
10 3-a
11 3-a
12 2-a-c
13 2-a
14 2-a
15 2-a
16 2-a
17 2-b
18 2-c
19 2-b
20 2-a
21 2-b
22 2-c
23 2-c
24 2-b
25 2-b
26 2-b
27 2
28 2
29 2-a
30 2
31 2

第29図

1 1-1-a-Ⅰ
2 1-1-b-Ⅱ-a

第30図

1 1-1-a
2 1-1-a
3 1-1-a
4 1-1-a
5 1-1-a
6 1-1-a-Ⅱ-a
7 1-1-a
8 1-1-a-Ⅱ-d
9 1-1-a
10 1-1-a-Ⅱ-a
11 1-1-b-Ⅰ
12 1-1-a-Ⅰ
13 1-1-a

第31図

1 1-1-b
2 1-1-b
3 1-1
4 1-1-a or 1-2
5 1-1-a
6 1-1-a
7 1-1-a
8 1-1-a

第32図

1 1-1-a
2 1-1-a
3 1-1-a
4 1-1-a
5 1-1-a
6 1-1-a
7 1-1-a
8 1-1-a
9 1-1-a
10 1-1-a
11 1-1-a
12 1-1-a
13 1-1-a
14 1-1-a
15 1-1-a

16 1－1－a
17 1－1－a
18 1－1－a
19 1－1－a
20 1－1－a
21 1－1－b
22 1－1－b
23 1－1－b
24 1－1－b

第33図

1 1－1－a
2 1－1－a
3 1－1－a
4 1－1－c
5 1－1－a－Ⅱ－b
6 1－1－a
7 1－1－a
8 1－1－a
9 1－1－a
10 1－1－a
11 1－1－a－Ⅱ－b
12 1－1－a
13 1－1－a
14 1－1－a
15 1－1－a
16 1－1－a

第34図

1 1－1－b
2 1－1－a－Ⅱ－c
3 1－1－a－Ⅱ－d
4 1－1－a－Ⅱ－d
5 1－1－Ⅰ
6 1－1－a－Ⅰ
7 1－2－Ⅲ
8 1－2－b－Ⅱ
9 1－1－a－Ⅱ－d
10 1－1－a－Ⅰ
11 1－1－c
12 1－1－a
13 1－1
14 1－1－a
15 1－1－a
16 1－1－a
17 1－1－a
18 1－1－a
19 1－1－a

第35図

1 1－1－b
2 1－1－b
3 1－1－a
4 1－1－a
5 1－1－a－Ⅱ－a
6 1－1－a－Ⅰ
7 1－1－a－Ⅰ
8 1－1－a－Ⅱ－a
9 1－1－a－Ⅱ－c
10 1－1
11 1－1－a
12 1－1－a(RLR)
13 1－2－Ⅱ
14 2
15 2
16 1－1－a－Ⅱ－b
17 1－1－b
18 1－1－a－Ⅱ－a
19 1－1－Ⅰ

第36図

1 1－1－c－Ⅱ－a
2 1－1－b－Ⅱ－d
3 1－1－a－Ⅱ－a
4 1－1－a
5 1－1－a－Ⅱ－c
6 1－1－a
7 1－1－b
8 1－1－a－Ⅰ
9 1－1－a－Ⅱ－b
10 1－1－a－Ⅱ－b
11 1－1－a－Ⅱ－a

第38図

1 1－1－a－Ⅱ－a
2 1－1－a－Ⅱ－d
3 1－1－d－Ⅲ
4 1－1－a－Ⅱ－a
5 1－1－d
6 1－1－a
7 1－1－b
8 1－1－a－Ⅱ－a
9 1－1－a－Ⅱ－b
10 1－1－a
11 1－1－b－Ⅰ
12 1－1－a
13 1－1－a－Ⅱ－a
14 1－1－Ⅰ
15 1－1－a－Ⅱ－b
16 1－2－Ⅱ
17 1－1－a
18 1－3－a－Ⅰ－b
19 3－a
20 3－a
21 2
22 2

第39図

1 1－1－a
2 1－1－b－Ⅱ－d
3 1－1－b－Ⅰ
4 1－1－b－Ⅱ－d
5 1－1－a
6 1－1－a－Ⅱ－d

第40図

1 1－1－a－Ⅰ
2 1－1－a
3 1－1－a
4 1－1－a
5 1－1－a
6 1－1
7 1－1－b
8 1－1－b
9 1－1－b
10 1－1－a
11 1－1－b
12 1－1
13 1－1－b
14 1－1－a
15 1－1－d
16 1－1－d
17 1－1－a
18 1－1－a－Ⅱ－d (RLR)
19 1－1－Ⅱ－d

第41図

1 1－1－a

2　1－1－a
3　1－1－a
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－b－Ⅰ

第42図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－a
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－a
7　1－1－a
8　1－1－a
9　1－1－a－Ⅱ-b
10　1－1－a－Ⅱ-b
11　1－1－a－Ⅰ
12　1－1－Ⅰ
13　1－1－a－Ⅱ-a
14　1－1－a
15　1－1－a
16　1－1－a
17　1－1－a
18　1－1－a－Ⅱ-b

第43図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－a
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－a

第44図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－Ⅰ
4　1－1－a
5　1－1－d
6　1－1－a－Ⅱ-d
7　1－1－a－Ⅱ-d
8　1－1－a－Ⅱ-d

第45図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－a
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－a
7　1－1－a

第46図

1　1－1－a－Ⅱ-d
2　1－1－a－Ⅱ-d
3　1－1－a-Ⅱ-d
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－a
7　1－1－a

第47図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－b

第48図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－a
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－a
7　1－1－a
8　1－1－b
9　1－1－a
10　1－1－a
11　1－1－a

第49図

1　1－1－a
2　1－1－a－Ⅱ-a
3　1－1－a－Ⅱ-a
4　1－1－a－Ⅱ-a
5　1－1－a－Ⅱ-b
6　1－1－a－Ⅱ-b
7　1－1－a－Ⅱ-a
8　1－1－a－Ⅱ-a
9　1－1－d
10　1－1－d
11　1－1
12　1－1－a
13　1－2－b-Ⅱ
14　1－1－a

第50図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－a
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－a
7　1－1－a
8　1－1－a
9　1－1－a
10　1－1－a－Ⅲ
11　1－1－a
12　1－1－b

第51図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－a
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－a
7　1－1－a
8　1－1－a
9　1－1－a
10　1－1－a
11　1－1－d
12　1－1－a
13　1－1－a－Ⅱ-d
14　1－1－a－Ⅱ-d
15　1－1－a－Ⅱ-d
16　1－1－a－Ⅱ-d
17　1－1－b
18　1－1－b
19　1－1－b
20　1－1－a
21　1－1－a

第52図

1　1－1－a－Ⅱ-a
2　1－1－a
3　1－1－a－Ⅱ-d
4　1－1－a－Ⅱ-d

第53図

1　1－1－a－Ⅱ-d
2　1－2－b－Ⅲ
3　1－1－a
4　1－2－a
5　1－2－b
6　1－2－b－Ⅱ

第54図

1　1－2－b－Ⅲ
2　1－2－Ⅲ

3　1－2－Ⅲ
4　1－2－a －Ⅲ
5　1－2－b －Ⅲ
6　1－2－Ⅱ
7　1－2－Ⅱ
8　1－2－b
9　1－2－Ⅱ
10　1－1－a
11　1－1－a
12　1－2－b

第55図

1　1－3－b－Ⅰ－a
2　1－3－Ⅰ－a
3　1－3－b－Ⅰ－a
4　1－3－b－Ⅰ－a
5　1－3－b－Ⅰ－a
6　1－3－b－Ⅱ
7　1－3－a－Ⅱ
8　1－3－b－Ⅱ
9　1－3－b－Ⅱ
10　1－3－b－Ⅱ
11　1－3－a－Ⅱ
12　1－3－a－Ⅱ
13　1－3－a－Ⅱ
14　1－3－a－Ⅱ
15　1－3－a－Ⅱ
16　1－3－a－Ⅱ
17　1－3－a －Ⅱ
18　1－3－a －Ⅱ
19　1－3－a －Ⅱ

第56図

1　2－a
2　2－b
3　2紡錘車
4　2－b
5　2
6　2
7　2
8　2
9　2
10　2
11　2
12　2
13　2

第57図

1　3－a
2　3－a
3　3－a
4　3－a
5　3－a
6　3－a
7　3－a
8　3－a
9　3－a
10　3－a
11　3－a
12　3－a
13　3－a
14　3－a
15　3－a
16　3－a
17　3－a
18　3－a
19　3－a
20　3－a
21　3－a
22　3－a
23　3－a
24　3－a
25　3－b
26　3－b
27　3－b
28　3－b
29　3－b
30　3－b
31　3－b
32　3－b
33　3－b
34　3－b
35　3－b
36　3－b
37　3－b

第58図

1　1－2－a －Ⅰ
2　1－2－a
3　1－2－b －Ⅱ
4　1－2－b －Ⅱ
5　1－2－a －Ⅲ

第59図

1　1－1－a
2　1－1－a
3　1－1－a
4　1－1－a
5　1－1－a
6　1－1－a －Ⅱ－d
7　1－1－a
8　1－1－a －Ⅱ－d
9　1－1－a －Ⅱ－d
10　1－3－Ⅰ－a
11　1－3－a －Ⅱ
12　1－3－b －Ⅱ
13　2－b
14　2－b
15　2－b
16　2
17　2
18　3－a
19　3－a

石　　器

過去3回の調査により出土した石器を年度別、トレンチ別に層位ごとに記載したい。石質については、石斧、礫器、石[illegible]、砥石、石錘、靴形状石器を除いた他全ては黒耀石を素材としている。尚、夏堀氏採集の石器を参考までに図示した。（61図36～48）

1965年出土の石器

第1トレンチ（61.62図）

表土・攪乱層（61図１～35）

石鏃（１～12）：計12例の出土で、完形品は５例である。形状の明確なものについては、二等辺三角形を基調とし、扁平で無柄の石鏃と言える。これらは概ねその底辺が直線的なもの（７）、軽微に内弯するもの（３、９）稍著しく内弯するもの（１、２、４～６）に分つことができよう。この層位においては内弯する底辺の形状をとるそれの側縁はやや曲線的である。

掻器（13～32）、掻器とは、ものを掻いたり、荒削りに使用したもので、定形的なものと不定形の剥片に部厚い刃部をもつものとがある。　又、便宜上、剥片にリタッチの認められるものも掻器として一括した。不定形の剥形に部厚い刃部をもつものはいくつかのグループに分けられそうである。14は定形的なエンド・スクレイパーであろう。15、16は半円形を呈し、刃部を端部に有する。その他原礫面を残す円形の剥片にやや周縁に刃部をもつもの、縦長の剥片の側縁に刃部有するものなどがある。26は舌状を呈し密な剥離を側縁にもつ。

石斧（33）：両刃、曲刃の肉厚の石斧である。玄武岩製。

砥石（34，35）：２例とも両面にとぎ跡を残し、断面は凹状を呈する。２例とも砂岩製。

貝層出土（62図１～34）

石鏃（２～４）：４を除き２・３は内弯する底辺をもつ。4は薄身で幅の広いタイプである。5は石鏃であるかどうか疑わしい。

石槍（１）：有柄の石槍で、先端を欠損しており、裏面にも調整がなされている。断面は半月形を呈する。

掻器（６～31）：14は定形的なエンド・スクレイパーである。８は前部からそれに続く両縁に部厚い刃部をもつ。この種の掻器は量的に多い。又、１つの傾向として端部から側縁にかけて半円状に刃部を有するもの（12、18、23）も多い。17の使用刃部は前部にあり、やや内弯するように思われる。28は石錐かもしれない。断面は三角形を呈する。その他側縁に刃部をもつもの、端部に刃部をもつものなどがあり、いずれも部厚い刃部を有する。

石斧（32、33）：玄武岩（32）、凝灰質砂岩（33）を用材とする磨製石斧である。32は上端・基部を欠損している。

敲石（34）：下方が狭ばまる卵形を呈し、ほぼ全面に敲打痕を認めることができる。

１号住居址、２号住居址出土の石器は遺構の項を参照されたい。

泥炭層（62図35～37）

掻器（36）：不定形の剥片を利用しリタッチを加えている。

石斧（35）：刃部を欠いているため詳細は不明である。肉厚である。蛇紋岩製の磨製石斧である。

石鋸（37）：現在する長さ42、30㎜、厚さ５㎜をはかる。軟質の砂岩製で石材の長辺に

あたる下縁に平行な数条の擦痕をとどめている。V字状の鈍い刃をもつ。最終調査(1970年）の第2トレンチ出土の擦切磨製石斧（72図59）と関連が深いと思われる。

1966年出土の石器

第1トレンチ（63，69図）

表土・破砕貝層(63図1～18、43、44)

石鏃（1)：トリミングが施され内弯する底辺をもつ。

掻器（2～15、43)：定形的な石器は見当らない。6は主剝離面に刃部をもちエンド・スクレイパー的様相をとどめる。10のみ横長の剝片を利用しており、刃部のなす角は90°近くに及ぶ。43は両面調整による刃部をもつ。11の様な刃部のつくりをもつものは図中に3例ほど見れる。2は端部を刃部として使用したものである。

ノッチ様石器（44)：中央に抉り込みが見られる。

敲石（16、17)：16は粗粒砂岩製、17は砂岩製の自然石を利用しており、共に敲打痕を側縁、両面に残す。

石組出土の石器（63図19)

19の石鏃のみ出土している。底辺は内弯する形態をとる。

貝層（63図20～40)

石鏃（20)：先端部を欠く無柄の石鏃である。

石槍（21、22)：両面調整の石槍で、断面は2例とも楕円形を呈する。基部、先端を欠く。

掻器（23～40)：甲高状を呈する30はラウンド・スクレイパーである。31も類似した様相をとどめる。27～29は厚みのある原礫面を残す剝片の側縁に刃部をもつ。24と同様、原礫の一端を打割して得た剝片を利用し、部厚い刃部を呈する。37の例は、24の様な剝片に更に打撃を加えて薄い刃部をつくりだしたものと思われる。側縁に刃部をもつ例が多い。

魚骨腐蝕土層（63図41)

石鏃（41)：やや内弯する無柄の石鏃である。

黄褐色砂質土層（63図42、69図4～7)

69図4はブレード状剝片の両縁に調整痕を残す。　5は剝片石器、6は部厚い刃部をもつ。7は石錐で、錐身はあまり長くない。　63図42は石斧である。刃部を欠く。蛇紋岩製の肉厚の磨製石斧である。

第2トレンチ出土の石器(64～67、69図)

表土・撹乱層（64～66図)

石鏃(64図1～5）：1　3は基部を欠損しているが、2、4、5はいずれも無茎凹基。

掻器(64図6～70、65図、66図1～18)：一括して記す。刃部の位置は、側縁、端部に部厚くあるものが圧倒的に多い他、薄身の剝片にリタッチを加えたものが若干ある。それらは幾つかのグループに分けられるようである。特徴的な石器について触れてみたい。原礫の長軸の

一端に打撃を加えて得られた断面半月状を呈する剥片に、端部から側縁にかけて刃部をもつもの、端部に刃部をもつもの、縦長のそれの一縁及び両縁に刃部をもつもの、ラウンドスクレイパー的なもの、更に半円状を呈する剥片に一撃を加えた後、側縁に刃部をもつものなどがある。原礫面を残さないそれらは、円形というより四角形に近い形状を示し、周縁に刃部をもつもの、半円状に刃部をもつもの、端部から一縁に刃部をもつものなどに大きく分けられるように思われる。その他厚めの縦長の剥片の側縁に刃部をもつものも、多く見ることができる。65図1、2は代表的なものと言える。両面調整のものは4例にとまる。65図65は石錐かも知れない。66図17は2条の桶状剥離の様相をとどめる打撃が加わっている。いずれも部厚い刃部を残す。その他、剥片に簡単なリタッチが加わるものが少数みられる。

石斧（66図19～21）：19は先端基部を欠損している石斧で粗粒玄武岩製。巾広の刃部を有す。片刃・曲刃である。20も粗粒玄武岩製。両刃。21は局部磨製石斧、刃部を欠く。玄武岩製。

砥石（66図22、23）：2例とも砂岩製である。 板状の22は片面に、23は表面にとぎあとを残している。22、23とも破損品である。

貝層（67図1～29）

石鏃（1）：石鏃であるか疑わしい。他の機能をもった尖頭器であるかもしれない。

掻器（2～28）：表土・貝層破砕貝層中の掻器と組成をやや同じくする。 23は基部を欠損しているが、石匙であろう。両側縁を刃部として使用したらしい。14は主剥離面に刃部を形成している。25～28を除き部厚い刃部を持つ。

石錐（29）：断面菱形を呈す。錐身は短い。

魚骨腐蝕土層（67図30～55、69図1）

石鏃（30）：先端部を欠く。底辺にはトリミングが施されている。

掻器（31～53）：定形的なものとしては38の傘状に剥離された円形のもの、34の端部に半円状に刃部を持つものをあげられる。すべて縦長の剥片を利用している。32は主剥離面に刃部をもつ。35は原礫面を残す剥片の短軸縁に刃部を持つ。その他簡単なリタッチの見られるものが若干ある。

砥石（67図54、69図1）：2例とも砂岩製である。 板状を呈し後者は前者より薄い。 又後者は裏面の左上部に擦痕をとどめている。

石斧（55）：ホルンフェルス製の欠損している片刃の石斧である。この欠落は使用の際下方からの力が加わったためである。

第3トレンチ出土の石器（68図1～17、69図2、3）

表土および貝層中（68図1～6、14～16）

石鏃（1）：先端、底辺の一端を欠いている。破損状態から見て底辺は内弯するものと思われる。

掻器（2～6）：5、6は両側縁に、2は端部に刃部をもつ。両面調整。

石斧（14・16）：14は刃部を大きく欠損している。片状花崗岩製。16は灰色凝灰質砂岩製の磨製石斧。刃部が欠落した後は敲石の機能を果したと考えられる。裏面は見事に研磨されている。

砥石（69図2）両面にとぎあとを残す。

敲石(68図15,69図3）は側縁に集中的に敲打痕を残す。輝石安山岩製の自然石を利用している。

貝層下層（68図7～13、17)

掻器（7～13)：7、8は一側縁に厚みの刃部をもち類似した形態をとる。10は側縁が刃部であろう。尖頭状を呈する。

敲石（17)：敲打痕を側縁に観察できる。

1970年出土の石器

第1トレンチ（70，71図)

表土・撹乱層(70図1～47)

石鏃（1～23、42)：24例とも無柄の石鏃である。1、12の身幅、身長の比が対照的である。3つの形状に分けることができよう。

石槍（43)：最大幅を中央部に持つ有柄の石槍である。

掻器（24～39、44～47)：24～29は端部に刃部を有する。34、44～47の使用刃部も端部である。38は側縁に刃部を有する。

石斧（41)：上端・基部を欠損している。細身で両刃、曲刃である。

石のみ（40)：刃部の大半を欠く。

貝層上黄褐色土層（70図48～55)

石鏃（48～52)：50を除き底辺は内弯する。いずれも薄身である。

掻器（53～55)：縦長の剝片を利用している。54は左側縁にリタッチを見る。

貝層（70図56～60)

石鏃（56）底辺が直状を成す無柄の石鏃、先端部を欠く。

掻器（57～60)：59を除き側縁を刃部としている。

魚骨腐蝕土層（70図61～71)

石鏃（62～64)：62、63は同じ形状をとる。64は10㎜前後の非常に小形のものである。

石槍（61)：先端・基部を欠く。柳葉形の石槍で断面は扇形を呈す。

掻器（65～68)：67、68は端部が刃部であろう。67のバルブの位置は左方である。

靴形状石器（69)：基部につまみをもつ。刃部は両面調整で、硬質砂岩製である。

石錘（70)：短軸に2個の打ち欠きをみる。軟質砂岩製。

砥石（71)：板状を呈し、一面にとぎあとを残す。破片。

泥炭直上（71図1～27)

石鏃（1～9）：9の有柄のものを除いた他全て無柄である。

掻器（10～26）側縁を刃部として使用している例が多い。14は端部から一縁にかけ刃部をもつ。

石斧（27）：玄武岩製の片刃の磨製石斧である。上端を欠損している。

貝層下住居址出土の石器（71図28）

砥石（28）：一点出土している。砂岩製の大形砥石で表面に幅広の3条のとぎ溝をみる。

第2トレンチ（71，72図）

泥炭直上（72図42～59）

石鏃（42～50）：無柄のものばかりである。49、50の剝片石鏃とも言うべき小形のものを除き第3トレンチ同層位出土の石鏃と同じく先端部を欠く。

掻器（51～55、57～58）：58は厚みのある縦長の剝片の一側縁に背面から剝離して刃部となしている。57には抉りこみが見られ、ノツチ様の掻器である。両面調整。51、52、54は端部を刃部としている。

擦切磨製石斧（59）左右両縁に擦切痕を残す。基部を欠く。輝緑凝灰岩製。尚、71図29、30は第2トレンチ泥炭直上の砥石と敲石である。29は砂岩、30は砂質凝灰岩製。

第3トレンチ（72図）

表土および混貝土層（1～9）

石鏃（1～4）4点出土している。3例は基部が内弯する。

掻器（5～9）いずれも部厚い刃部を端部側縁にもつ。

貝層（10，11）

掻器（10，11横、縦長の剝片を利用し部厚い刃部をもつ。

魚骨腐蝕土層（12，13）

掻器（12，13）2例とも側縁を刃部とする。

泥炭直上（14～41）

石鏃（14～29）全例無柄の石鏃で、先端を欠くものが圧倒的に多い。

掻器（30～40）原礫面を残し厚みのある剝片を利用している。33のような小形の側縁に刃部をもつ例は、39のような剝片の背面から打撃を加えて得られたものだろう。

敲石（41）円礫を使用している。周縁に敲打痕を残す。

なお、石質の鑑定については北海道教育大学釧路分校教授、岡崎由夫博士のご協力を賜った。

（山　崎　　哲）

骨　角　器

1965年第1トレンチ出土

刺器（73図1、6～18、20、22）

鳥管骨の先端を斜めに切り、鋭利な尖端部を作出したグループを刺器として分類した。

既に、基底部を横位に切断したものについては骨鏃としての用途が与えられているが、本遺跡出土のこれらの骨角器にはそうした特徴を充分に示す材料がみられないところから、刺器として一括した。

刺器は鳥管骨の先端を斜めに切断したもの（a 類）、縦に切断した後に先端部を作出したもの（b 類）とにわけることができる。

a 類：1、6～13、18、20がこれに相当する。いずれも斜めに切断する角度は共通しており、先端部の傾斜角は20°～30°の範囲に集中する傾向を示した。加えて、切断部分は1㎝を留めているにすぎない。18をのぞいていずれも切断側にやや斜走する擦痕が観察される。裏面、先端部付近においても同様に擦痕がみられる。基部方向は、横位に切断した痕跡をもつものはない。6、8の示すように破損した状態を呈する。

18のように最大厚3㎜を計る細身のたぐいはむしろ骨針として分類される可能性もあるが、完形でないところから本類に含めた。

22は先端部を破損しており、基底部と考えられる位置は横位に切断されている。

b 類：14～17のように縦裂して先端部を作出したグループがこれに相当する。基部を観察できるものはない。14、15両面の先端部付近に縦、斜走する擦痕がみられるが、さほど顕著ではない。16は裏面にのみ観察される。17も同様であるが先端部を欠損している。

骨鏃（73図2～4、21）

2は現存長3.5㎝を計るが両端部を欠損しており、明らかでない。鳥管骨を縦裂し、現存する先端部付近では両側縁から側面を斜めに切っているところから、側面部切断によって尖鋭部分が作出されたと考えられる。3も鳥管骨を利用し、一方向から先端部を作って加工されており現存長2.7㎝を計る。4は、先端部を欠くが、基部付近において、わずかながら抉入をもつ。両側縁にも同様な抉りがみられ、鳥管骨をもちいている。21は先端付近のみが現存し、比較的ゆるやかな例である。

骨柄（73図5）

先端部を欠損しており、着柄部分については明らかでない。

骨針（73図19）

完形で長さ6.3㎝、最大厚1.5㎜を計る。先端部はやや尖鋭に作出されており、基部付近は側縁に溝をめぐらして骨針形態を作出している。

1966年第1、2、3トレンチ出土

骨鏃（74図1、2、4、21、22）

いずれも鳥管骨からなる。1は鳥管骨を縦裂し、更に弯曲した内面を削除して先端部を作出している。基部はやや内弯する。2も同様な作出形態を備えているが、基部付近は明らかでない。4は73図4と同例と考えられる。基底部も同様な抉入をもつ。これらは最大厚3㎜を計るが、22のように円筒形を呈する体部形態もみられる。

骨柄（74図３）

先端部を欠損しており着柄部分は明らかでないが73図５とほぼ同じ形状と考えられる。

刺器（74図４、７、９、13～７）

ａ類：74図７、14～17で、いずれも先端部を留めているが、14はやや粗雑な基部をのこしている。前述したように骨鏃としての形態を備えているものはない。擦痕は切断面付近において斜走するわずかな擦り切り痕が観察される程度である。

ｂ類：74図４、13で、４は粗雑な縦裂が施され、先端部付近のみが尖鋭に加工されているにすぎない。13も同様であるが、先端部付近にわずかに縦走する擦痕がみられる。

ｃ類：比較的棒状を呈するグループを本類とした。74図９がこれに相当する。メカジキ骨製で周縁が磨かれており、ゆるやかな先端部をもつ。現存最大長12.2cm。最大厚1.2cmを計る。

骨錐（74図５、６）

鳥管骨を切断した比較的小形の錐である。５、６ともに両側縁部から斜めに切断して先端を作出し、特に６のそれは両端部に同形態のものがみられる。

骨銛（74図10）

先端部および側縁部の一部を欠損した回転式骨銛で１例のみ出土した。体部の中央位からやや側縁に寄った部分に結縛用の索孔を有する。図でも明らかなように側縁部に細かい刻みを施しており、体部も同例が横走する。

釣鈎（74図12）

現存する長さ4.3cm。一端が釣形をなし、鈎部の先端も比較的鈍頭を呈する。１例のみ出土した。

棒状鹿角製品（74図８、18～20）

体部の全縁に加工を施している。18、19のそれは、現存する先端部付近に比較的薄く加工を施し、特に19には1.5cm程の長さの篦状の刃部を形成している。20は両端部を欠損しているが前例と同様な用途を備えていたものと考えられる。しかし、８のように鹿角の原形をとどめている例は、むしろ先端部わずかに加工を施した刺器的な要素をもっていたと思われるが定かではない。

骨斧（74図23）

メカジキ骨製で完形。長さ15.8cm、最大厚2.0cmを計り、比較的硬質である。刃部付近は縦走する擦痕が１cmの長さで観察され、両刃形態を呈する。

1970年第１、２、３トレンチ出土

刺器（75図１～３、18～23、76図５～19、25、77図２、３、８～10、15）

ａ類：前述したとおり、鳥管骨を切断して作出した本類は第３次調査で12例出土した。いずれも基底部を欠いており完形ではない。やはり前調査と同様の結果が得られた。むし

ろ、76図７に示したように、両端部に切断面をもつ例は、これらのグループが骨鏃としてよりも刺器的な要素を備えていることを裏づける好例とも窺えよう。加えて、同図13などのように、現存する長さが16.5cmを示す例は更に具体的にこのことを物語っているとも解釈される。いずれにせよ、刺器として分類されるグループは、本遺跡においてはそうした性格を充分にもっていると判断しても大過なかろう。

また、各々の特徴については既に述べたとおりであり、さほどの変化は観察されない。

b 類：75図３、18～22、76図５、77図２、３のように鳥管骨を縦裂して先端部を作出した例は、比較的無雑作に切断しており、その再加工が先端部付近に集中し、a 類にみられると同様な擦痕を観察することができる。完形をとどめている資料に乏しいこともあるが、ある程度定形化した75図18および77図３などは骨鏃としての作用も考えられるが、一応本類として一括した。本遺跡からは３例のみの出土であるが、図21で示したように、横位の切断痕を残したグループがある。いずれも欠損しており判然としないが、刺器の作出過程で生じたとも推測されよう。

c 類：本類の中には、形態的に充分ヤスとしての要素を備えたものも含めた。図23および、図15はその好例ともいえよう。

骨鏃（75図11、17、76図３、77図11、14、16～18）

いずれも鳥管骨を縦裂し、75図11をのぞいて細身に加工されている。特に、前述したが75図17、77図16のように基部に若干の弯入を示す形態がある。むしろ斜走する擦痕が先端部付近に観察される。

牙玉（75図10）

図示ししたとおり一端部に径３mmの索孔を施し、他は自然面を残している。装飾品として分類されよう。

骨製針入（75図12）

一部を残しているにすぎないが、図示した底部付近に横走する刻線文様を彫刻しており、切断面の観察から楕円形を呈するものと考えられる。図示しな かったが第１次調査の際にも同例が一点出土している。

棒状鹿角製品（75図６～８、14～16、24、76図20～24、77図４、７）

便宜上一括したが、二種類に細分される。75図６、７のように先端部をとどめ、鹿骨を更に加工し、刺器的要素をもつものと、75図８、のように鹿骨の原形をとどめ、先端部を利用して刺突的な機能をもつグループがそれである。しかし、両者とも形態的にもそうであるが機能としての若干の差異は認められるであろう。第２次調査でも出土したが、76図21のように先端部をやや板状に加工した例がある。先端を欠いているので明らかでない。

骨銛（76図１）

先端部を欠損しているが、比較的判然とした回転式銛である。１例のみ出土した。現存

する長さ6.8㎝、最大厚6㎜を計る。

やす（76図2）

本例も両端部を欠損している。鳥管骨を利用し、断面図でも明らかなようにやや尖鋭な逆鈎形態を有する。

骨針（75図9、76図4、77図12）

いずれも欠損している。75図9をのぞいては断面がやや内弯し、基部付近の索孔については明らかでない。

釣鈎（77図1）

体部中央から欠損しているが、先端部において斜走する刻みを施し、断面図にみられるように斜位に3㎜ほど体部に削りを加えている。体部は比較的扁平に作出されている。

骨角器破損品（75図4、5、13）

4、5は、むしろ刺器形態をもつグループの基部とも考えられる。両者とも全縁に数面の剝離面をもち、一端部は斜位に削りを加えており、13も形態に異なりをみせるが、同種と考えられる。

篦状骨角器（75図25、77図13）

いずれも鯨骨製で硬質である。やや篦状をした体部を有し、先端部は比較的鈍頭である。25は方向が一定でないが、体部に短かい擦り切り痕をのこしており、13にはそうした痕跡は認められない。

骨篦（77図5）

メカジキ骨製である。体部中央から両側縁に拡がりをもち、篦状の先端部は薄身となる。

骨斧（77図6）

メカジキ骨製である。体部は自然面をとどめており、刃部付近がわずかに加工され、両刃形態を示す。

鹿角残欠（75図26、76図26）

いずれも鹿角の根元を残している。前述した棒状鹿角製品を作出した際の残欠と考えられる。切断面はいずれも1㎝の幅の剝離痕をのこし周縁にめぐらされる。前後するが、78図1、2に示した2号住居地内出土の鹿角残欠も同例であろう。

石組遺構出土の骨製品（1966年第1トレンチ）

鹿角残欠（78図3、6）

鹿角の根元付近に横位に切断痕をもつ。3の現存する先端部は人為的に切断された痕跡はない。体部は自然面をとどめているが、6のそれは縦走する擦痕が体部全縁に観察される。

骨角器未製品（78図4、5）

ともに体部に加工痕をもち、4は片面のみ上部から加工されている。両端部は縦に数十

面の切断痕をとどめており、切断は一側縁から集中的に施されている。5のそれは板状を呈し、わずかに現在する先端部断面に横位に一側縁からの切断痕を観察することができる。いずれも大型の哺乳類の骨製と考えられるが判然としない。

板状鯨骨（78図7）

図では顕著に示されていないが、両端部の側縁を斜めに細かい加工を施している。体部にみられる使用痕は方向は一定ではないが、下方部では比較的整った横走する使用痕をもつ。裏面にも同様な使用痕をのこしている。やや小形の同例については、俎あるいは敲台としての用途が与えられているが、本例も俎として使用されたであろうと考えられよう。

（西　幸　隆）

木　製　品

本遺跡における特色のある出土遺物として各種の木製品がある。3次に亘る発掘調査において泥炭層および泥炭層から下部の青粘土層にかけて20点程出土している。以下に比較的保存状態が良好で、ほぼ形態をうかがうことのできる資料のみ概略を記述する。

1965年貝塚トレンチ出土木製品

弓？（79図1）

樹皮をむかれたまま、多数の自然木に混在して出土した。出土時においては図示以上に弯曲していた。2本に折れており、現存の長さ1m 5cm、径は図下部で24mm、図上部では18mmを計る。2面に削り跡が観察され（a）、また節の部分も削りとって滑らかにしている。図上端は焼けこげており（b）、先端部に切り込みが認められる。

板材（79図2）

長さ62cm、幅8cmで、断面は樹皮の方向に厚く、中心の方向に薄い狭扇形をなしている。おそらく、斧または楔状のもので樹木の繊維に沿って、中心から放射状に割って作り出された割板と思われる。

皿状木製品（79図4）

長さ16.5cm、幅5cmの破片で、裏面は焼けこげている。高さ5mm程の立ち上りを持ち、全体は角形もしくは舟形を呈するようである。板材を刳貫いて作ったものと思われる。

棒杭（79図3）

前述の木製品と伴に多数の自然木に混在して横倒しの状態で泥炭層より出土した。そのため、他の出土棒杭が尖端部のみの残存であるに対し、本資料はそれらのほぼ全形を推定するに足るものといえよう。残存部は径5.4cm、長さ98cmであるが、取り上げる際に破損した部分もあるので、本来は優に1m以上の長さをもつものである。先端は両面から削って楔形に尖らせている。

棒杭（79図7）

泥炭炭層から垂直に青粘土層まで突き刺った状態で出土した。現存部の長さ25cm、径4.5

cm。先端は一方向から斜めに削っている。また図左側面にも削り跡が観察される。

1966年第２トレンチ出土木製品

棒杭（79図５）

現存部の長さ18cm、径3.5cmで、先端は３方向から削っている。

棒杭（79図６）

長さ32cm、径４cmの現存部を有し、先端から20cm程の部分より曲っているが、これは天然の曲りである。先端は各方向より削られている。

棒杭（79図８）

現存部で長さ10cm、径2.5cmを計り、先端は各方向から削られている。

棒杭（79図９）

本資料は出土木製品のうちで最も保存状態の良好なものである。現存部は径2.5cm、長さ16cmで、先端はかなり鋭利な刃物痕を留めている。

棒杭（79図10、11）

小形の棒杭で、各々径1.8cm、1.4cmで、保存状態は余り良くない。

以上の棒杭は全て泥炭層から青粘土層にほぼ垂直に突き刺った状態で出土したものである。尚、1966年１トレンチ、３トレンチからは木製品は出土しなかった。

また、1970年第３トレンチ南端の泥炭層から青粘土層に突き刺った状態で棒杭が１例出土している。これら木器の材質は次のとおりである。79図１はイチイ(オンコ)、同２はモミ(トドマツ)、同３もモミ(トドマツ)、同４はグイマツ、同５～７はニレ、同８はモミ(トドマツ）であとは不明である。

なお、材質の鑑定については、北海道教育大学釧路分校助教授、鈴木順雄博士のご協力を賜った。

（山 本 文 男）

金 属 器（80図１～５、10図１）

三次に亘る調査で計５点出土している。これに便宜上古銭を加えて記載する。

サバサキ（80図１）第三次１レンチ表土出土。全長285mm、巾43mm、厚さ６mm

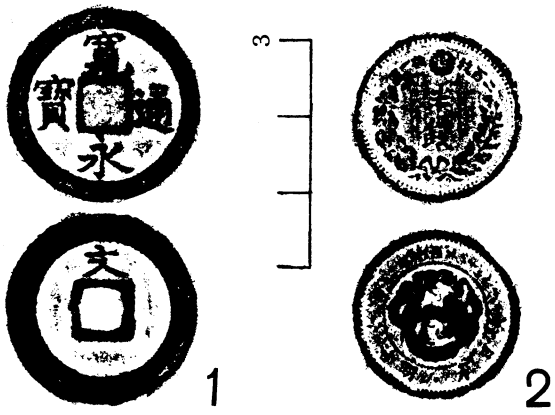
マキリ（２）第三次２号墓壙出土。伸展葬の右側、手の近くに置かれていた。柄の木質部が付着している。全長250mm、巾23mm、厚さ３mmの薄身マキリである。

鉄鍋破片（４・５）厚さ3.5mmの鋳物製の鉄鍋、底部破片２例がある。同一個体と思われる。第三トレンチ表土出土。５は脚が付いている。

煙管（３）第一次貝塚トレンチ出土。黄銅製吹口のみ１例。３区の攪乱層より出土したものである。胴の張ったタイプである。管部径７mm。

古銭（10図１）寛永通宝が１枚、第一次貝塚トレンチ攪乱層より出土している。裏に文の字が刻印されている。

（沢 四 郎）



第10図　出土古銭

自　然　遺　物

自然遺物としては人骨３体分のほかに貝類、鳥類、獣類、魚類、植物質遺物がある。貝類以外は専門家の同定が済んでいないのでそれについての詳細は後日報告したい。泥炭層の花粉分析は1970年第２トレンチの試料を岡崎由夫氏が分析されているのでそれを参照されたい。

貝類　カキ、アサリ、オオノガイ、ウバガイ、ホタテ、オオイシカゲガイ、エゾフネガイ、ヒメエゾボラ、エゾタマキビ、クロタマキビ、ホソウミニナなどがあり、就中貝類の95％はカキで占められている。所謂ナガカキと称されるような長大なもので、20cmを越すものもある。各トレンチにみられる純貝層はカキ一色によって構成されている。なお貝層下に薄い層を形成していたカワシンジガイが混じり、ほとんど原形をとどめず、剝落した真珠層の存在によってそれと知れる程度であった。1970年の発掘はシジミが１点、この層から出土している。カキ以外の貝類はほとんどが純貝層以外の混土貝層、混貝土層中より出土したものである。

鳥獣魚類　獣類としてはクマ、シカ、家犬のほかクジラ類、トドなどの海獣類がある。鳥類、魚類の骨も豊富であった。1970年の調査では各トレンチの泥炭層の上層にみられた魚骨腐蝕土層中からニシンとみられる魚の鱗が多数検出されている。

小　括

貝塚の発掘は前述した通りである。

貝層及び土層の堆積は各トレンチにおいても多少の違いはあるが、10層前後の識別が可能であった。しかし出土遺物の混乱にもみられるように、限られた狭い範囲に相接近した年代の人々の生活が営まれたことから、遺物包含層は撹乱が激しく加えて近代における畑の耕作その他の事由により、乱掘の跡が随所に現われ、複雑な層序を構成している。

1965年トレンチは第4層までが撹乱層である。これは1966年第1トレンチ、第2トレンチにおいても同様な結果を得ている。第3トレンチは第3層までが撹乱層である。

1970年第1トレンチ、同第3トレンチでは第2層の上面から掘りこまれた近代アイヌの墓壙が発見されていることから、少なくともここにおいては第2層以下はそれらの墓坑よりも古いとみなされる。

出土遺物は貝層を中心とした上下に多かつた。特に貝層下層の泥炭層からも出土したことは注目される。

出土遺物は土器、石器、骨角器、金属器、陶磁器、木器からなるが陶磁器類は近代における撹乱層から出土したものである。

土器は縄続文式、擦文式、オホーック式の各式の土器が出土した。続縄文式は三類に分けられる。これらの内未撹乱の貝層、貝層下層から出土した土器を下田ノ沢Ⅰ式、同Ⅱ式と仮称した。オホーツク式はいわゆる隔合形式の土器である。

貝塚出土の石器類は石鏃が比較的多かった。石槍は少なく、また、スクレイパーが数量的に圧倒的に多いのが特徴である。骨角器類は刺突具が多い。

注目すべき遺物としては、木製品とした板材、弓らしいもの、皿状木製品に、棒杭が発見されている。いずれも下田ノ沢Ⅰ式に伴なったものである。皿状木製品は材質が本道に自生しないグイマツであり、その渡来系路が注目されよう。

出土した自然遺物の内貝層を中心とした貝類はすべて現生種であり、カキが主体となっている。

遺構としては、墓壙3例のほかに、石組、住居址様の落ちこみ、棒杭の配列、焼土などがある。墓壙にはいずれも人骨を伴なったが、いずれも後世の撹乱を受け全体が揃っていない。

V 総　　括

三次に亘る本遺跡発掘の概要は前述したとおりである。遺物に関する考察は別の機会に詳述する予定であるので、ここでは小括と少し記述が重複する部分もあるが、気付いた幾つかの点について大まかにふれ、総括とする。

本遺跡における竪穴は、発掘地点の細長の狭い部分に第一次調査の段階において11例を認めた。その後、年次を追うに従ってその数を増した。地形測量図にも示したとおり、実線で示した以外、かならずしも普通一般の竪穴址のように明確な落ちこみをみせない浅い皿状のものが多いようである。しかしこれらの落ちこみは、各トレンチ、また1号、2号住居址の発掘の結果でも窺われたように、竪穴住居址、もしくはそれに近い遺構の存在の現われであることが解る。

1号、2号竪穴は、いずれも東側の壁際に石組を伴ない煙道をもつカマドを有している。擦文文化末期の竪穴住居址である1号は3回以上に亘り重複して利用されたとみえ、2号も2回に亘りほゞ同一空間が利用された可能性がある。また、これらの竪穴住居址は、開けた三方に前後する時期の竪穴と互に壁や床面を切り合い、本遺跡における続縄文、擦文・オホーツク、アイヌという変遷の中で、住居が営まれたということを背景に複雑な姿を示している。これは貝塚においてもみられ、ここを居住の場として占有した人々の生産基盤が細部においては、多少の違いはあるにせよ、共通した何かを互いに持っているということができる。さらに本遺跡では、地形測量図では充分に表現されていないが、沢の奥に舌状に張り出た標高10m ラインの高さに落ちこみのはっきりした竪穴が18個ほどが一部は直線に、一部は2列という形で約150mの長さに亘り分布している。これらの形状は隅丸の方形、長方形、円形とあり、一時期のものでなく、幾つかの時期にまたがるものである。また、発掘地点の背後の斜面を登った標高20m ラインに6個、25mラインに2個、頂上部の50m ラインに2個の竪穴が分布している。こうした一つの地点において、地形及び高さを異にする集落址の存在は、年代、季節、生態による違いなどいろいろなこと想起させるものがある。唯ここで言い得ることは、同様な遺跡の在り方は、厚岸湖に面した遺跡にほゞ共通した現象として認められるということであり、将来さらにその質的な違いについて追求する必要があろう。これらの竪穴が分布しているまわりには、絶対量において差はあるが、カキ、エゾシカの骨が散布し、中には小ブロックの堆積を形成しているものもある。

貝の散布は発掘した竪穴住居址の背後の斜面にまばらに見られたが、これは、頂上部、中部からの崩れ落ちたものと、この辺に多いハシブトガラスによって持ちこまれたものであろう。

三回に亘って発掘した貝塚の貝の散布範囲は、東西20m 、南北50m と帯状にみられ、当初かなり大規模なものを予想させたが、本来の貝層は、竪穴のある5m 段丘を中心に斜面

に沿って孤状に分布しているのであった。したがって、斜面上部に浅く、下るにつれて厚く堆積し、その下層に発掘区によって多少の違いをもちながらも、包含層は黄褐色砂質土層、魚骨腐蝕土層、泥炭層、粘土層を介在させ、青色粘土層上面をもって遺物の出土は尽きる。しかし、貝層は単一時期のものだけではないらしい。遺物の出土傾向は大まかにみて、純貝層の上にくる混土貝層中には続縄文、擦文、オホーツク式土器が出土し、純貝層以下の層位から続縄文の前半の土器群が出土している。　貝層を構成の貝類の組成は、カキが95%以上を占め、オオノガイ、ウバガイ、ホタテ、オオイシカゲガイ、エゾフネガイヒメエゾボラ、エゾタマキビ、クロタマキビ、ホソウミニナなどである。
下層の魚骨腐蝕土層中には、カワシンジユガイの表皮のみられる薄層があった。これは当時のこの沢の底層の状況を反映するものである。

それはともかく、貝層の貝類相はすべて現在の厚岸湖内から湾内外に産する貝類であり現生種である。厚岸湖の周囲にみられる貝塚は、少なくともこれまでの踏査では大半が本遺跡と共通する種でもって構成されている。しかし、清野謙次博士の調査された対岸の真竜側に所在するオカレンボウシ貝塚、オボロ貝塚では、これに、縄文前期の貝塚として知られた釧路市東釧路の貝塚や釧路村細岡の貝塚で出土している暖系のアカガイが加わり、疑問をなげかけている。

動物遺骸の同定はすべての資料について終わっていないが、鯨類、トドなどの大型海獣類、カジキ類、エゾシカ、家犬その他鳥類、小魚類が出土しており、量的には海獣類の遺骸が最も多いが、これらのことについては正確な同定が得られた上で報告したい。

貝塚の発掘は一つには良好な包含層を求めて回を重ねた面もある。にもかかわらず、全トレンチにおいて随所に撹乱層がみられ、異常な状況を示していた。このことと関連して清野謙次博士は大正15年の人類学雑誌上に興味ある通信を寄せている。博士はこの年、人骨を求めて７月から８月にかけ、本町に滞在し、大別、チラカベツ、尾幌、オカレンボウシ、筑紫恋の貝塚などを発掘した。それを報じた中で、筑紫恋を除く他の貝塚はいづれも数年前に建築用の貝灰の原料としてカキの殻を採取したため、これらの貝塚の大部分が荒らされ、特に神岩の貝塚は全滅したと述べている。このことについて、この辺の事情に詳しい本町在住の田口省一郎氏に聞いたところ、大正４、５年頃から数年の間に、厚岸湖周辺の比較的便利な場所に存在した貝塚は、軒並み貝灰用の貝殻を得るため乱掘されたという。同氏も大正６年から一時それに従事した。その掘り方は次の様なものである。まず表土を剝ぎ、保存のよいカキ殻を手当り次第掘り出し、破砕された貝類及び石その他の邪魔物は次々と後へ投げ捨てるか、或いは掘った穴へ埋め戻し、掘り進む。貝は、真竜にあった貝灰工場に運び換金したという。この様なわけでオボロ貝塚は全滅に近い状態となり、対岸の大別貝塚を荒し、別寒辺牛川を渡って神岩周辺の貝塚に手をかけたのである。尾幌川の河口で貝灰採集中に得た人骨頭部を当時来町された河野常吉氏にあげた記憶があると

いっている。このことは清野博士も記録している。下田ノ沢については、湖岸寄りの部分の貝層は掘ったが、奥には手をつけなかった筈といっているが、誰か別の人が手をつけている可能性はあるという。これによって、ほゞ異常なまでの層序の混乱は説明がつく。今後この一帯の貝塚の調査に当っては、この事実に充分留意する必要があることが解った。

他に主な遺構として、墓坑および石組がある。石組は、1966年第3トレンチ拡張区に発見されたが、続縄文式土器の本来の包含層である褐色土層の一枚上、黒土層に構築されていたものである。石組周辺には多量の土器と少量の石器と共に海獣類の骨が集中的に出土し、単なる浅滓の廃棄場所としては片付けられない性質をもったものである。近くに発見された土器は擦文式が最も多かった点で注目される。後述する墓坑とともに何かここに居を占めた共同体の宗教的側面を現わした遺構のようである。

墓坑は3例あるが、葬法、頭位に注目すべきものがあろう。1966年第3トレンチで発見された墓坑は、その形状とともなった人骨の埋葬姿勢からみて、近世アイヌのものではない。高杯の脚部の破損品の出土状態は副葬品とみられる性質のものである。頭位の方向はN133°Wで、ほぼ南西に位置する。墓坑の周りに比較的大きな自然礫がみられた点も注意をひく。時期はほゞ高杯の時期とみて大過なかろう。清野博士がオボロ貝塚で発掘した3例の副葬品としての土器は、図版でみる限り擦文式である。埋葬頭位は、東枕の仰臥屈葬とされ、本例とは頭位においてまったく逆の方向であることが注目される。

1970年の2例はうつぶせという特異な埋葬方法をとり人骨は背面をみせていた。貝灰の原料採取のため、周りを乱掘され、全身は揃っていないが、その出土状態から頭位は推察できた。もしこの推察に誤りがないとすれば、第1号の頭位はN 97° Eで7° 南へふれ、第2号はN 70° Wで真西より20° 北へふれている。頭位はまったくの逆方向である。だがしかし、出土層位、副葬品の状況からして、近世アイヌのものであることは疑えない。当地方の先史人の埋葬頭位が問題化している折柄、新例を追加したことになろう。

出土した土器は、続縄文式土器が最も多く、擦文式、オホーツク式は比較的少ない。これらの土器は、記載の便宜上3群に分けた。第1群は続縄文式、第2群は擦文式、第3群はオホーツク式である。第1群土器は更らに細分し、1類から3類までに分けた。このうち第1群1類及び第2類は、貝層及びその下層に良好な包含層をもち、多量に出土した特徴のある土器である。それ故、本遺跡の地名を冠して、第1群1類を下田ノ沢Ⅰ式、同2類を下田ノ沢Ⅱ式と仮称することにした。Ⅰ式が古くⅡ式が新しい。編年的に道東の続縄文式の中で、前半に位置するが、釧路の緑ヶ岡式より新しく、興津式に並行もしくはそれより少し遅く位置するものと思われる。Ⅰ・Ⅱとも将来は更らに細分の可能性を秘めているが、詳細については、他の遺物とともに別の機会に述べたい。Ⅱ式は南千島にも分布している。

出土遺物の中で土器に次いで多い数を記録したのは石器類である。その後に骨角器、木

製品 金属器、陶磁器という順を辿る。石器は石鏃が比較的多く石槍は少ない。全体として、二次加工用具である掻器が圧倒的多数を占めている。骨角器は銛に特色あるものがあるが、総量では刺器の類が圧倒的な数を記録している。最も本遺跡を特色づけるものは点数および種類数こそ少ないが、何と言っても木製品の存在である。これらの遺物は貝層下層に位置する泥炭層の存在によって出土したものである。木製品は、棒杭様の先端部にみられる鋭利な刃物による切口面から、間接的に金属器の存在を思い浮べるのに充分な素材である。材質は記載でもふれたとおり、イチイ、ニレ、モミ類（トドマツ）、グイマツである。これらの樹木のうち、イチイ、ニレ、トドマツは本道に自生するが、グイマツはない。本種の分布は、千島、樺太、カムチャッカ、沿海州、満州、シベリアといった北方系の植物である。したがって、これによって作られた本遺跡出土の皿状木製品は、その原郷土を本州以外の道外に求めなければならない。ここで最も近い産地ということになれば、南千島、つまり、クナシリ、エトロフ、色丹島ということになる。そして当然ここに浮び上ってくるのは、近世における厚岸とそうした島々との関係であり、それはとりもなおさず、厚岸アイヌとクナシリ、エトロフなどの島々との関係である。それは今更いうまでもなく、エトロフ島漂着記や有名は蝦夷地一件などにみられるように、非常に密接な関係をもっていたということができ、こうした下地は、既に下田ノ沢に貝塚を営んだ人々の年代まで遡れるものであることを示すものとされよう。

謝　辞

本報告の作成にあたり、終始変らぬご指導をいただいている、北海道大学大場利夫博士、北海道教育大学釧路分校岡崎由夫博士、木質遺物についてご教示を得た北海道教育大学釧路分校鈴木順雄博士、陶磁器の鑑定をしていただいた東京国立博物館長谷部楽爾氏に対し、ここに改めて銘記し感謝の意を表したい。また本報告書の一日も早い完成を願い直接、間接にご協力を賜わった厚岸町教育委員会ならびに同公民館、同文化財専門委員の各位、斜里町金盛典夫氏、標茶町豊原熙司氏、さらにこの面到な印刷を引受け気永に協力された田畑印刷文具株式会社に対し、ここに厚くおん礼申し上げる次第である。

本書に収録できなかった自然遺物については後日別の機会に公表したいと考えている。

（沢　四　郎）

引用及び参考文献

坪井正五郎：石器時代の遺物遺跡は何者の手になったか　東京人類学会雑誌第31号
ＰＰ382～403、1888年

河野　常吉：チャシ即ち蝦夷の砦　札幌博物学会会報　第１巻１号　1905年　（北海道の文化第13号所収ＰＰ38～23）

：厚岸町の史蹟　北海道史蹟名勝天然記念物調査報告　ＰＰ191～197　1924年

清野　謙次：北海道貝塚発掘略記　人類学雑誌第41巻第９号　ＰＰ454～459　1926年

：日本貝塚の研究　ＰＰ444～452　459～474　1969年　岩波書店

北海道編集：蝦夷地一件　新北海道史第７巻　史料一　1969年

高倉新一郎編：エトロフ島標着記　日本庶民生活史料集成第４巻　1969年

岡田宏明　岡田明子：厚岸町筑紫恋のチャシと貝塚　釧路市立郷土博物館々報　No.117
1961年

羅臼町教育委員会：羅臼　羅臼町文化財報告　1　1971年

釧路市教育委員会：東釧路　1962年

北地文化研究会：浜別海遺跡　1971年

斜里町教育委員会：ピラガ丘遺跡―第二地点発掘調査概報―　1972年

根室市教育委員会：北海道根室の先史遺跡　1966年

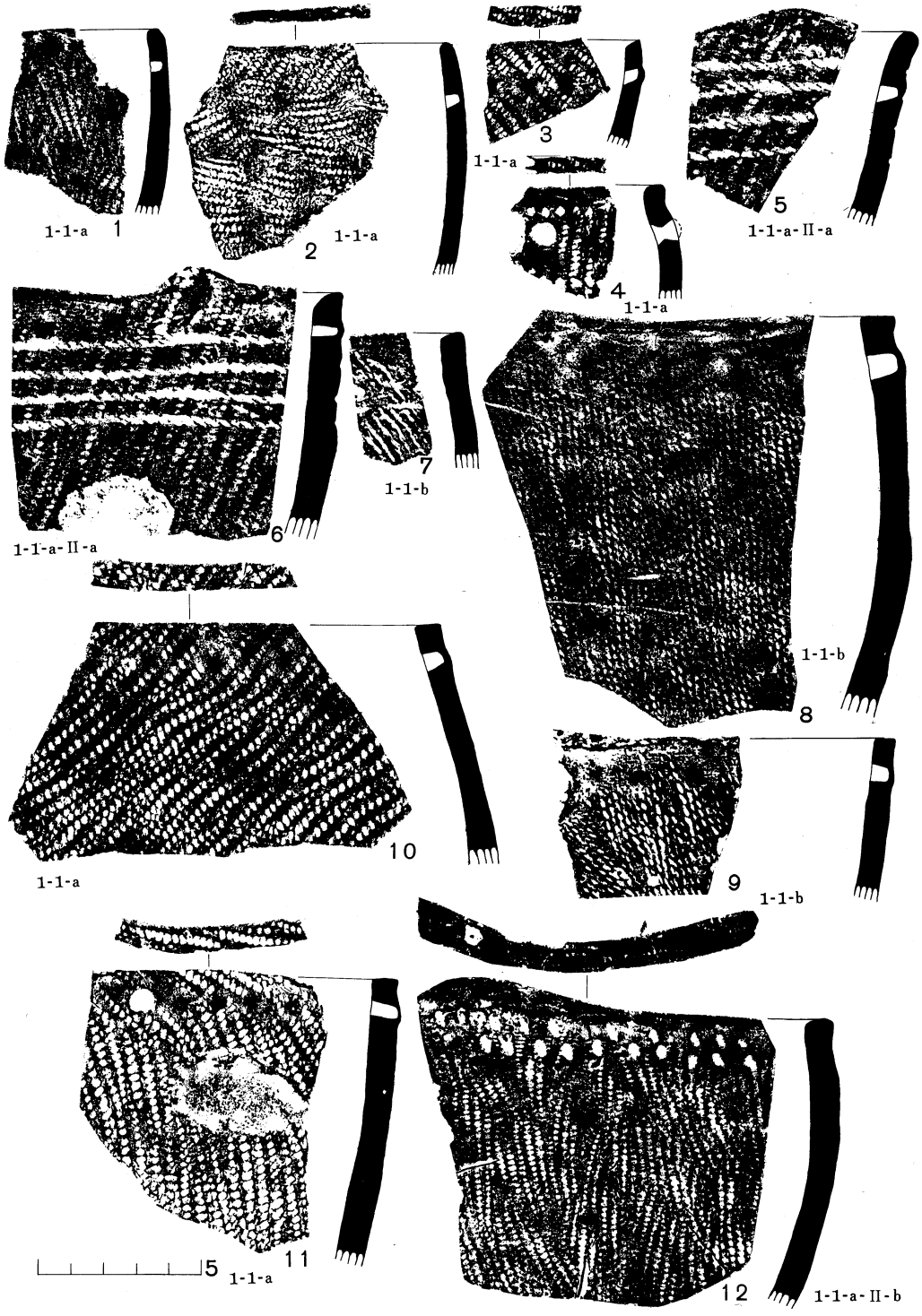
北海道教育庁社会教育課：北海道の文化財第11集　Ｐ84　1969年

西　幸隆：釧路地方のオホーツク式土器　釧路市立郷土博物館々報　No.207　1970年

犬飼　哲夫：北海道の鹿とその興亡　北方文化研究報告７　ＰＰ４～45　1952年

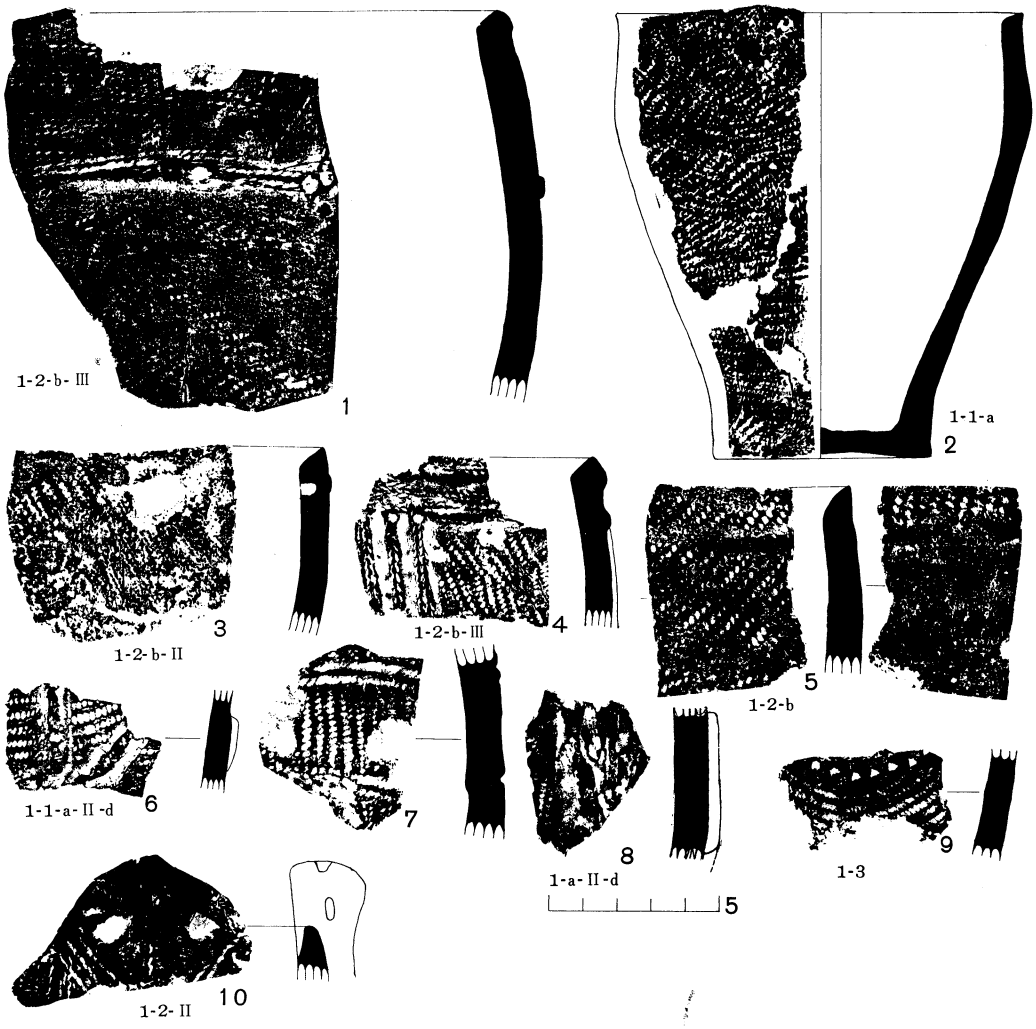
藤本　英夫：北の墓　学生社　1971年

大場利夫　沢　四郎：北海道厚岸町下田ノ沢遺跡調査略報　釧路の古代文化第８集
ＰＰ20～24　1965年



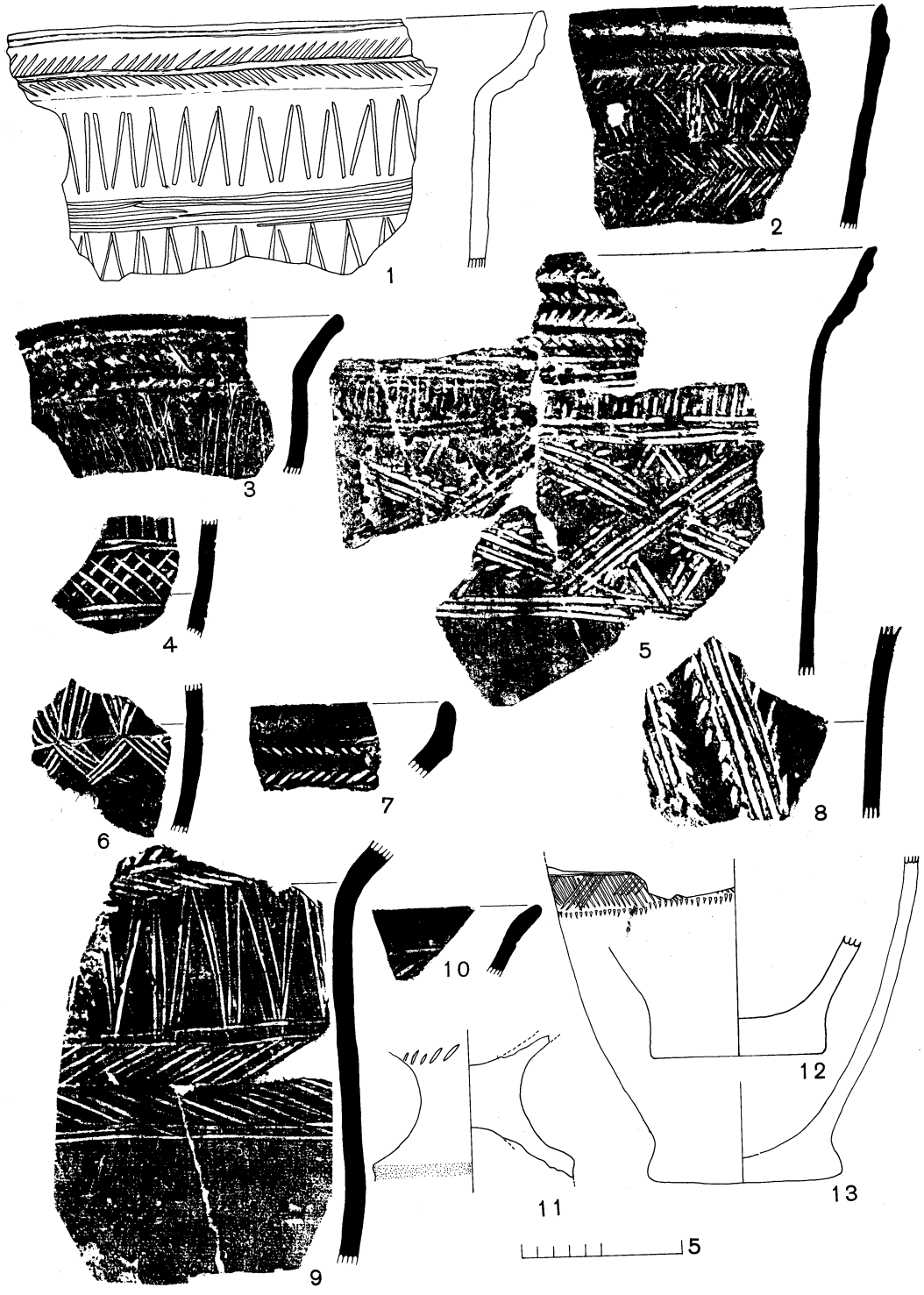
第11図　住居址出土土器　1

1～12　1号住居址



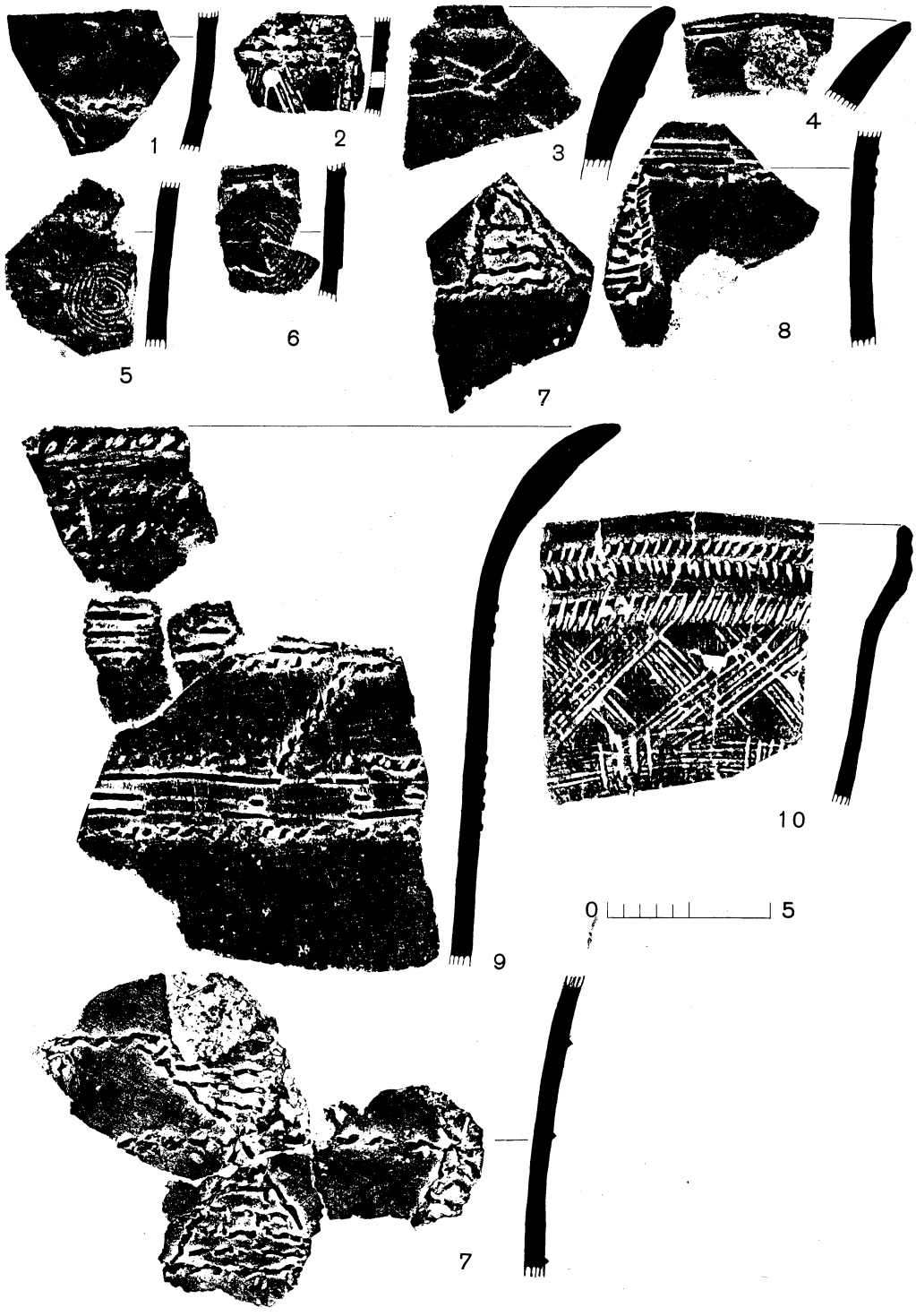
第12図　住居址出土土器　2

1、3～10　1号住居址　2、2号住居址



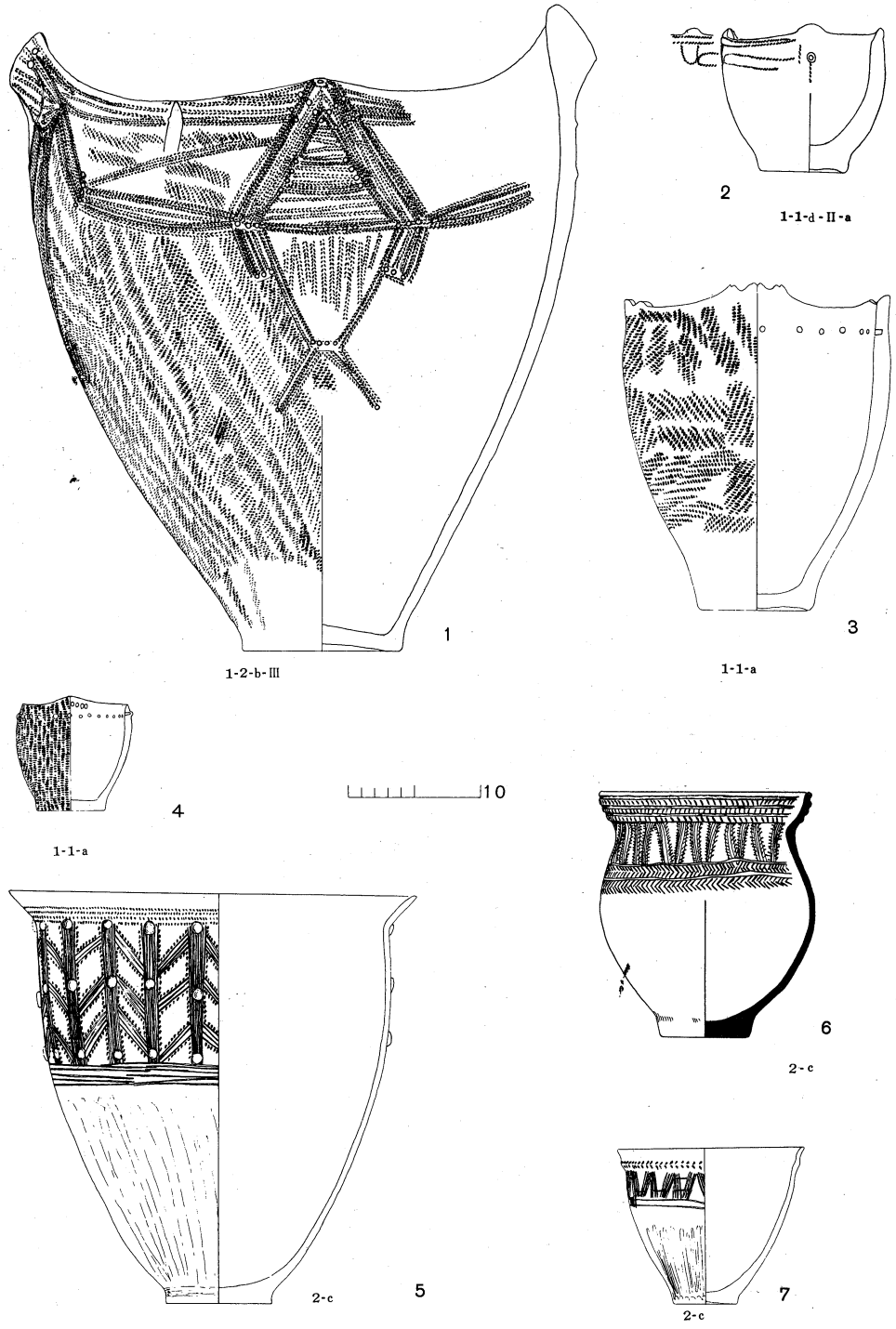
第13図　住居址出土土器　3

1～13　1号住居址



第14図　住居址出土土器　4

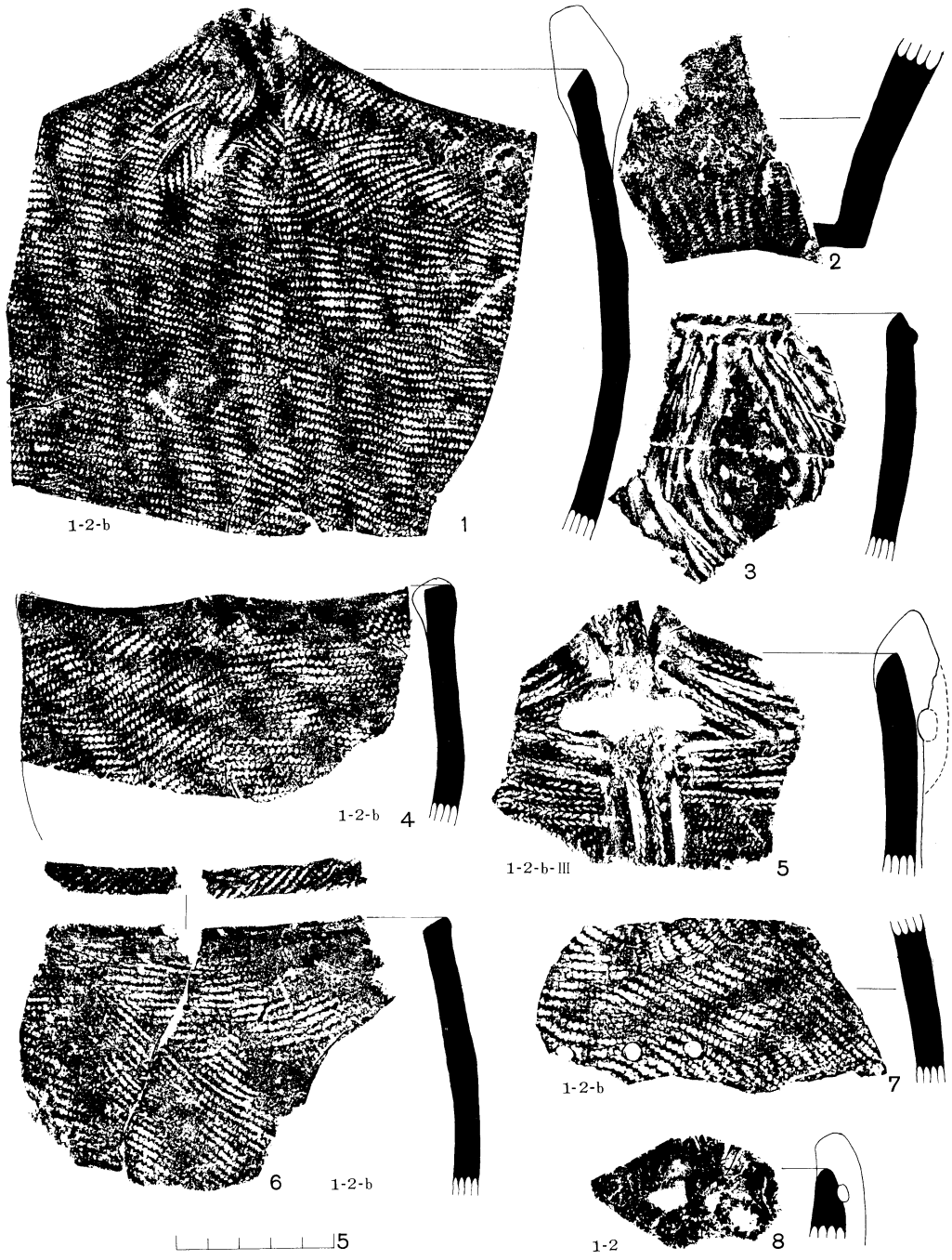
1～7　1号住居址



第15図　住居址出土土器　5

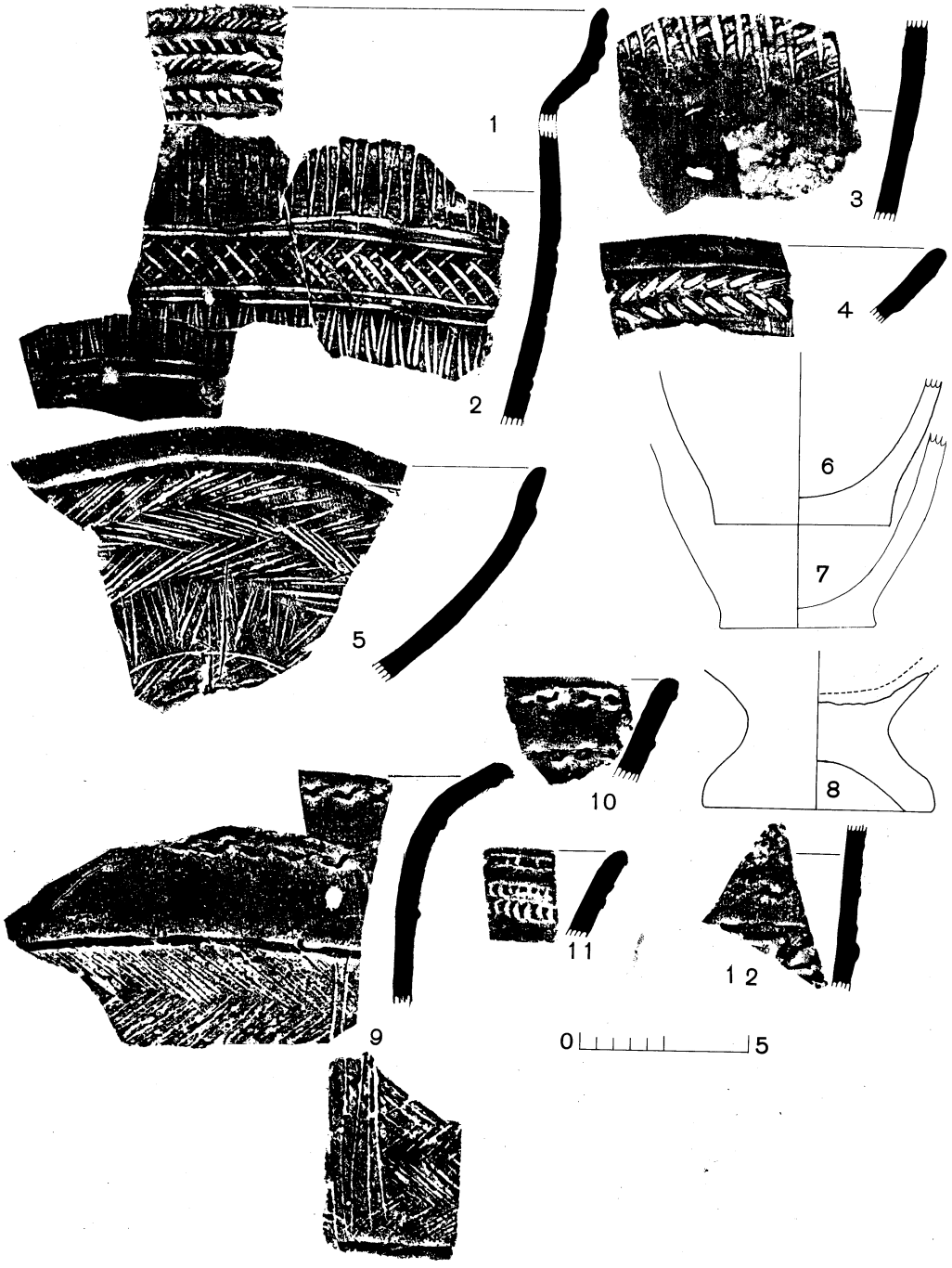
1～4　2号住居址外

5～7　2号住居址床面



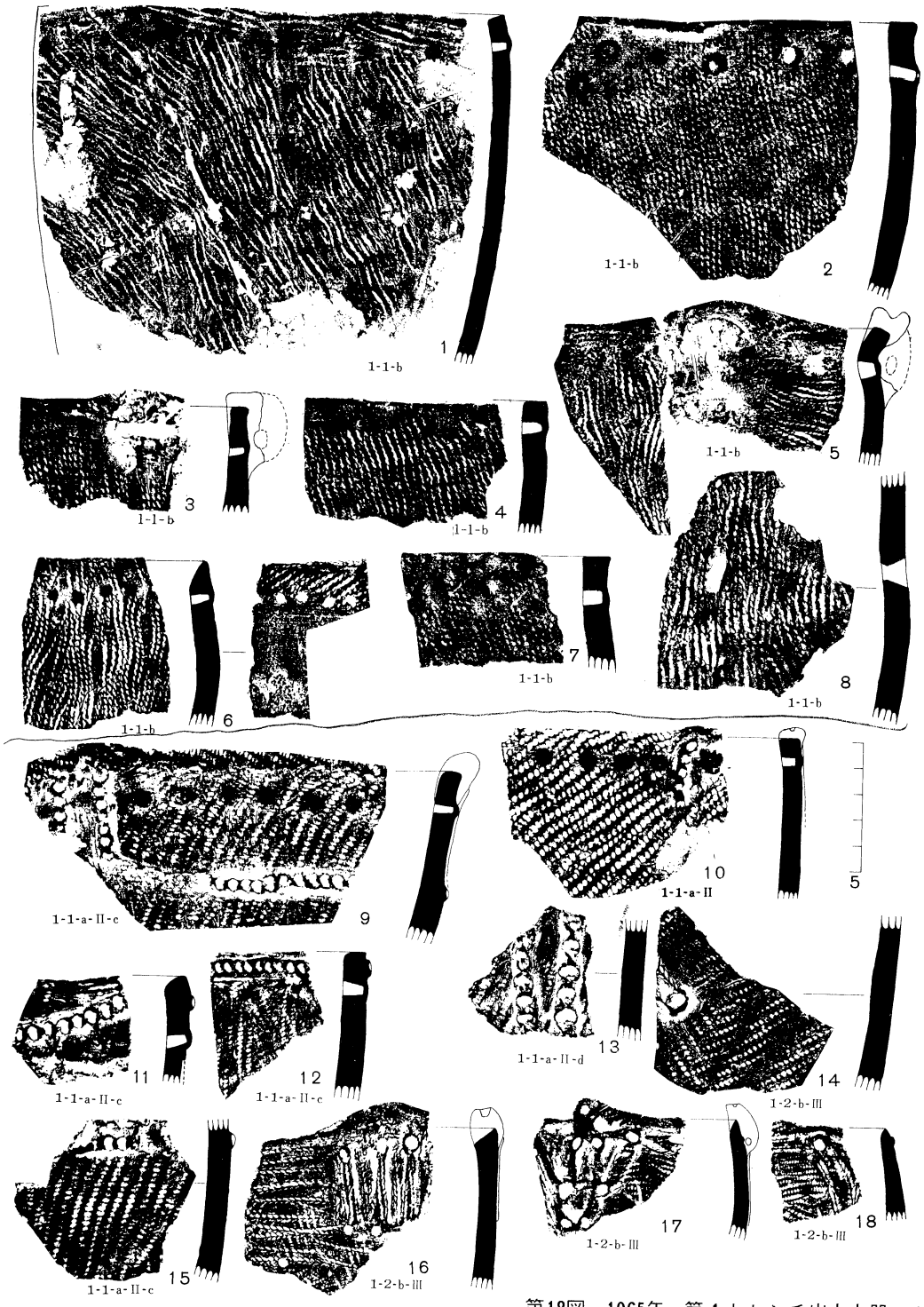
第16図　住居址出土土器　6

1～8　2号住居址



第17図　住居址出土土器　7

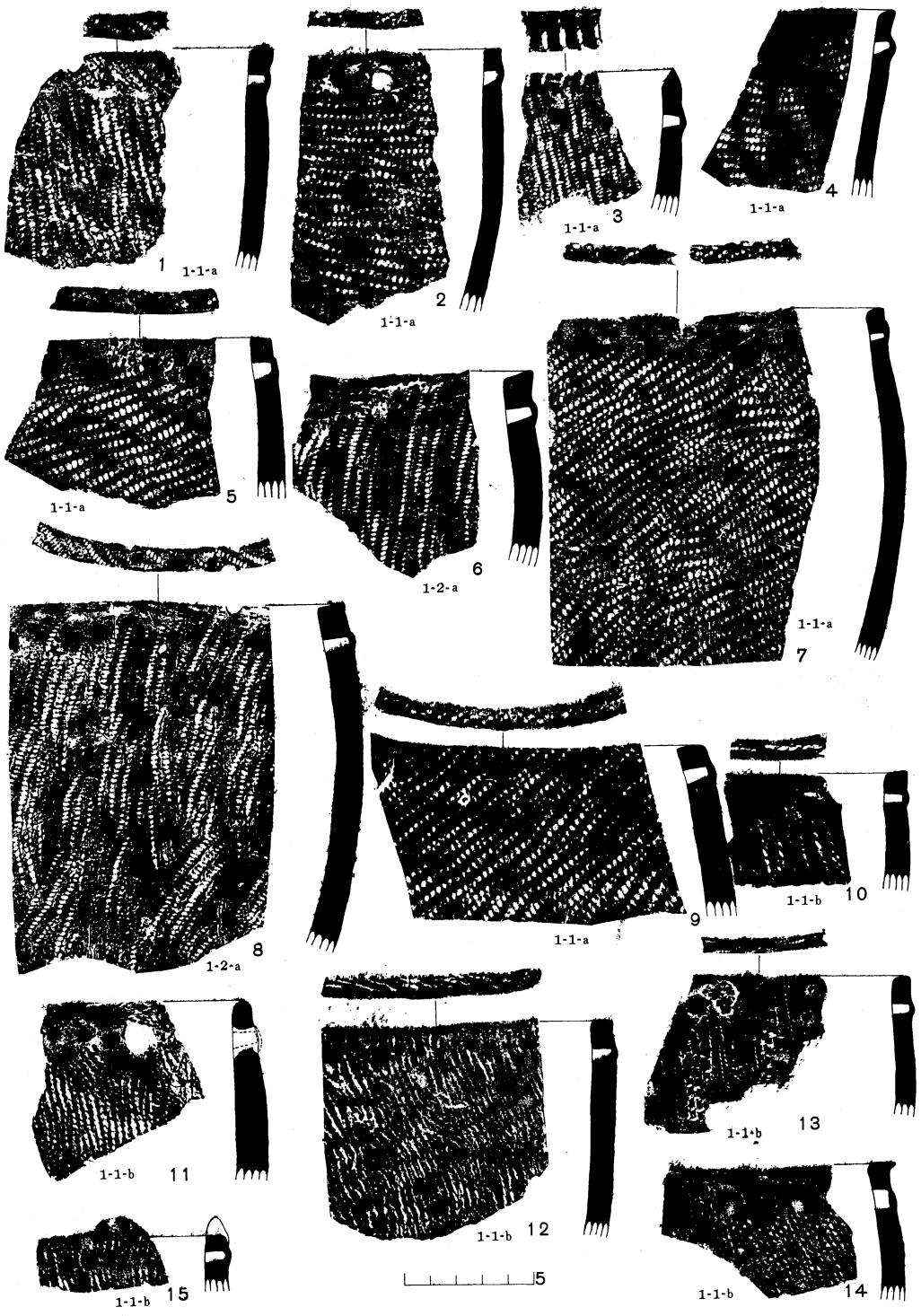
1～12　2号住居址



第18図　1965年　第1トレンチ出土土器　1

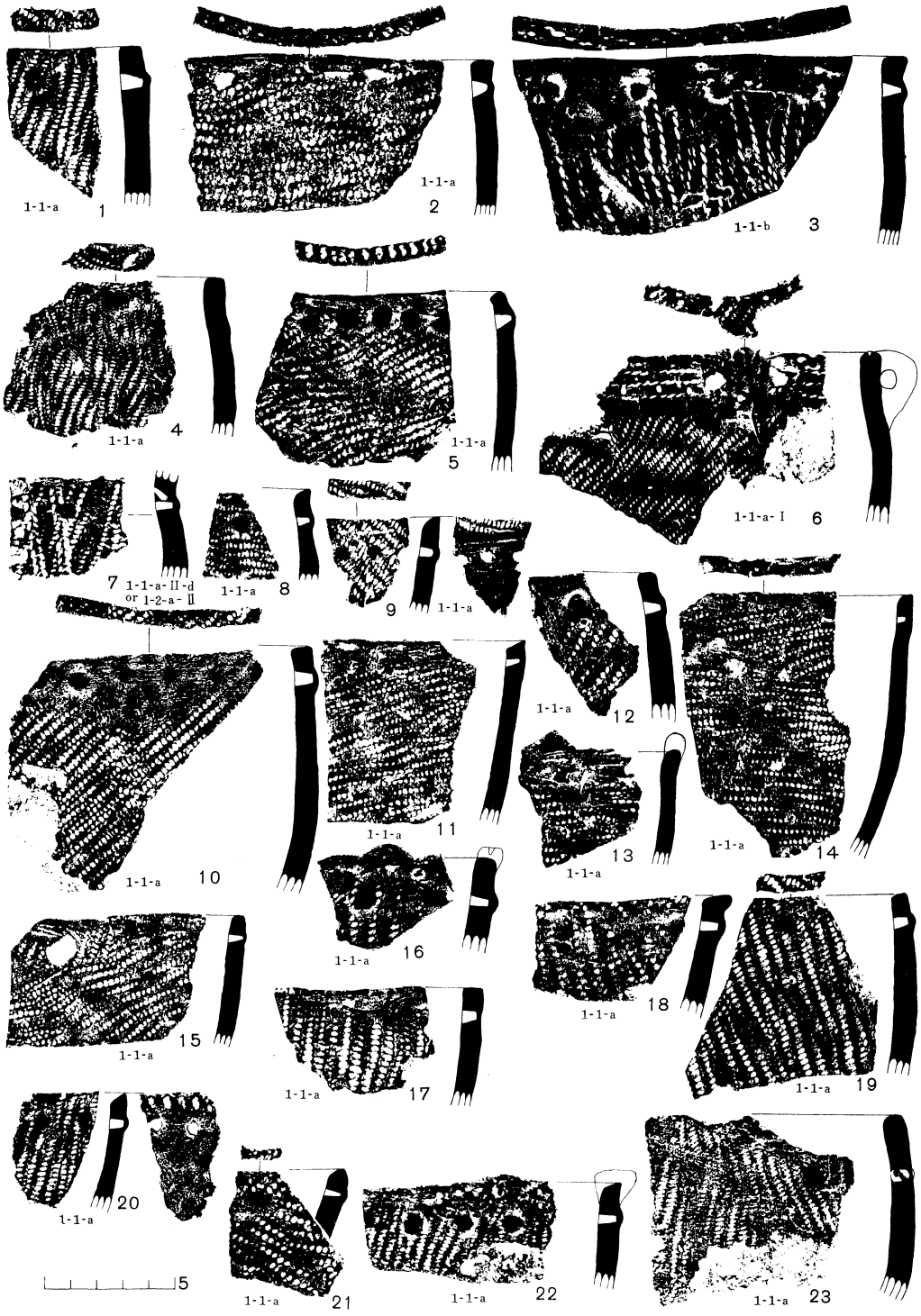
1～8　純貝層下層

9～18　純貝層上層



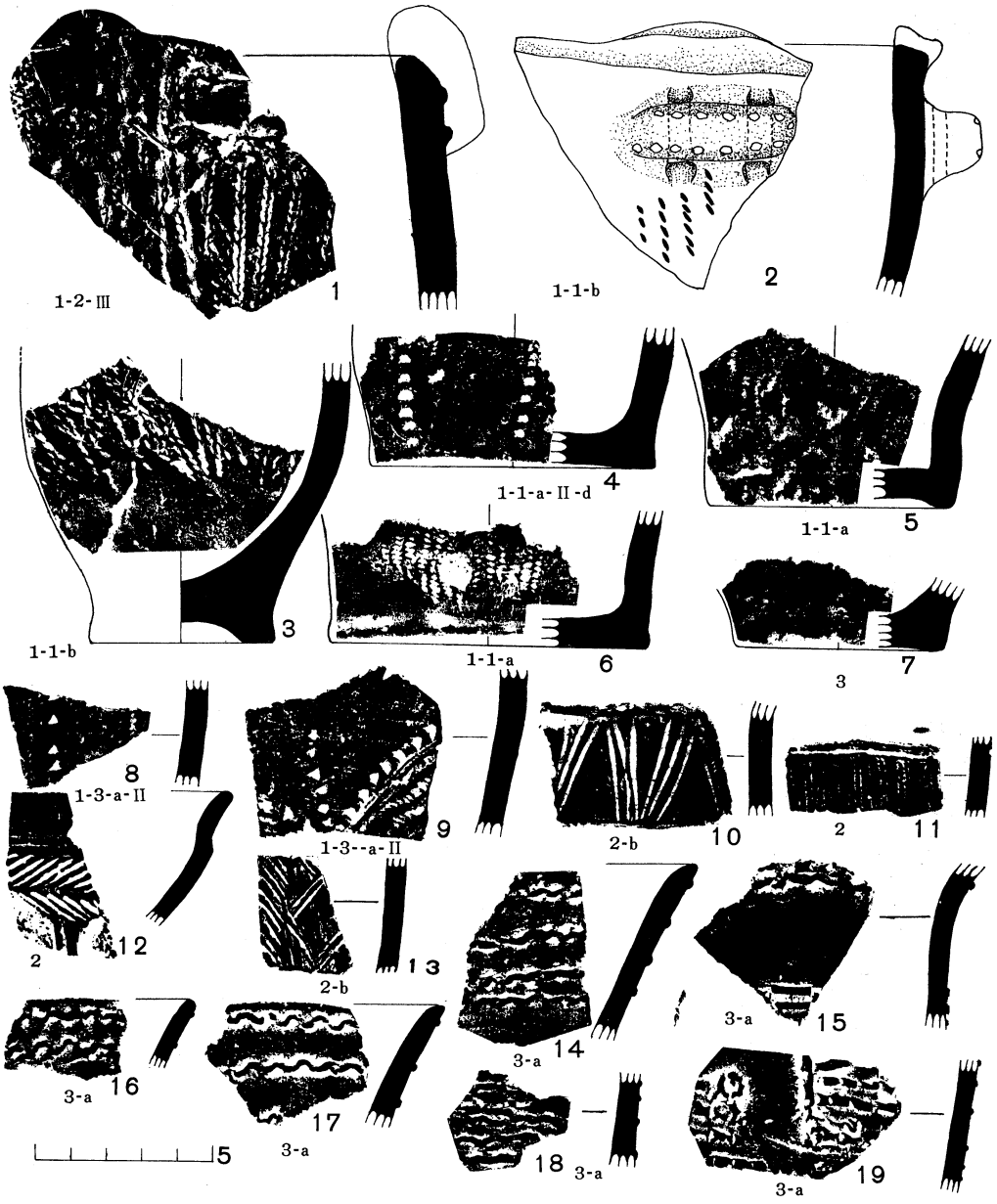
第19図　1965年　第1トレンチ出土土器　2

1～14　泥炭層直上



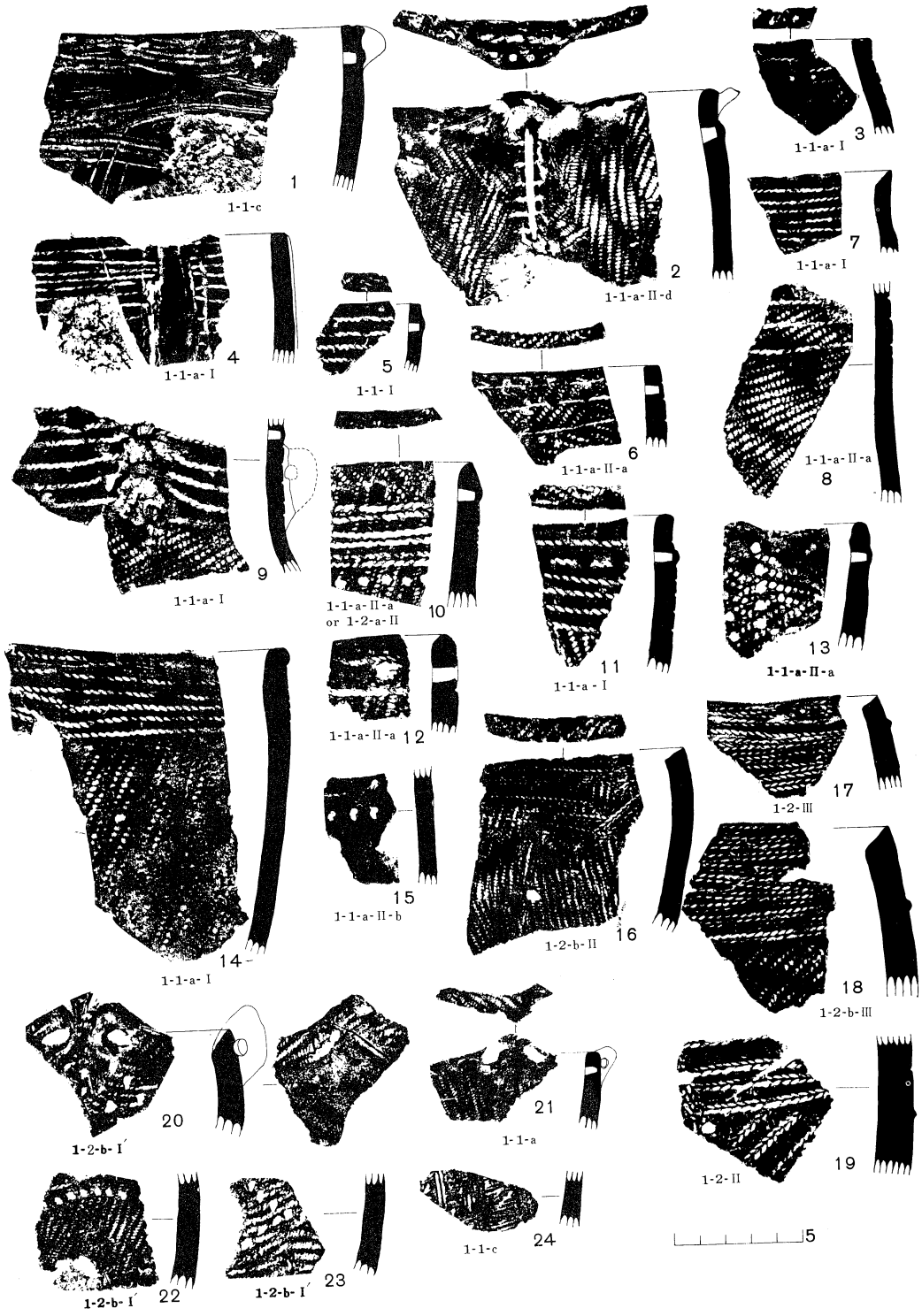
第20図　1966年　第1トレンチ出土土器　3

1～7　泥炭層　　8～23　破砕貝層



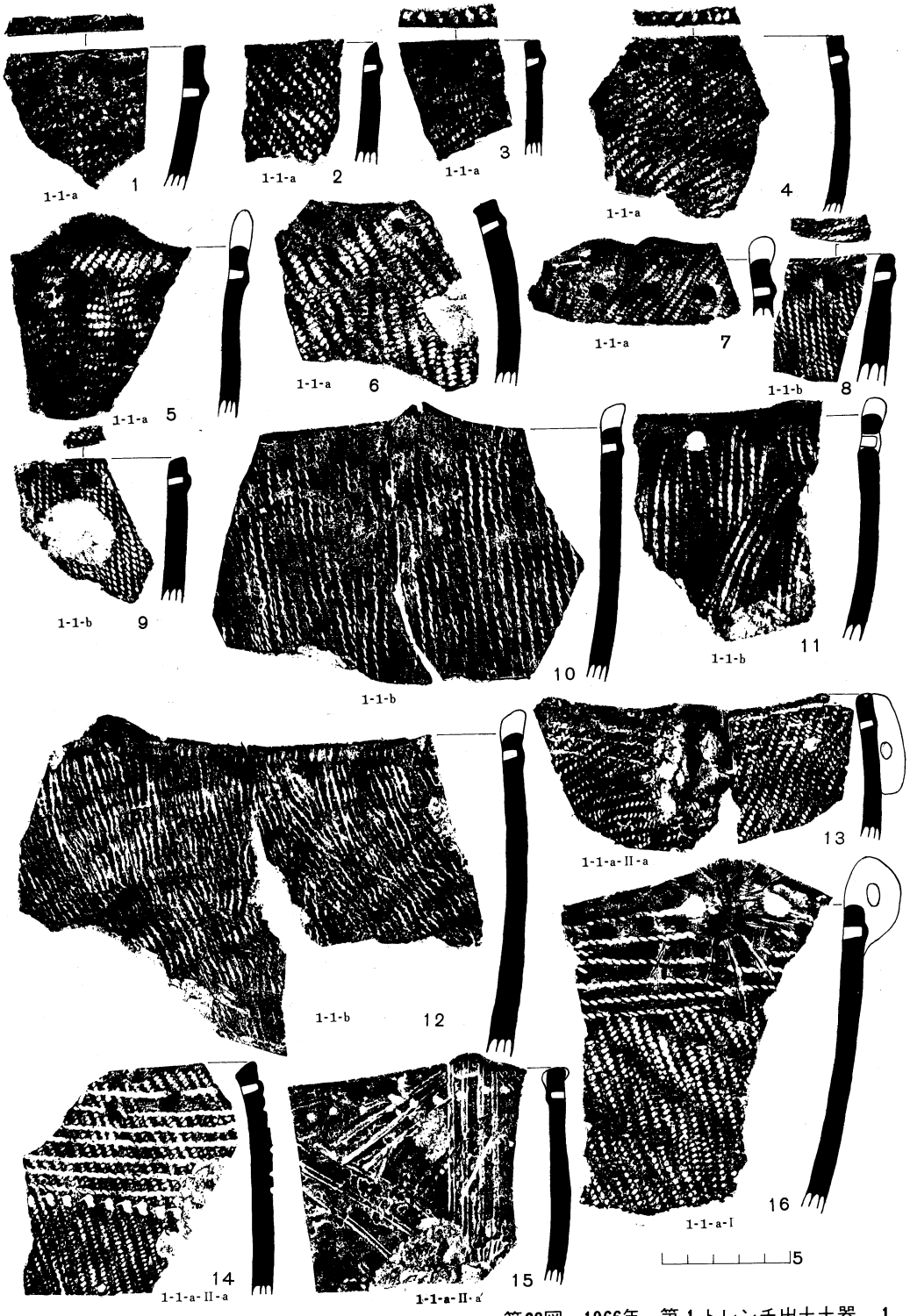
第21図　1965年　第1トレンチ出土土器　4

1～19　破砕貝層



第22図 1965年 第1トレンチ出土土器 5

1～24 貝層およびその上層



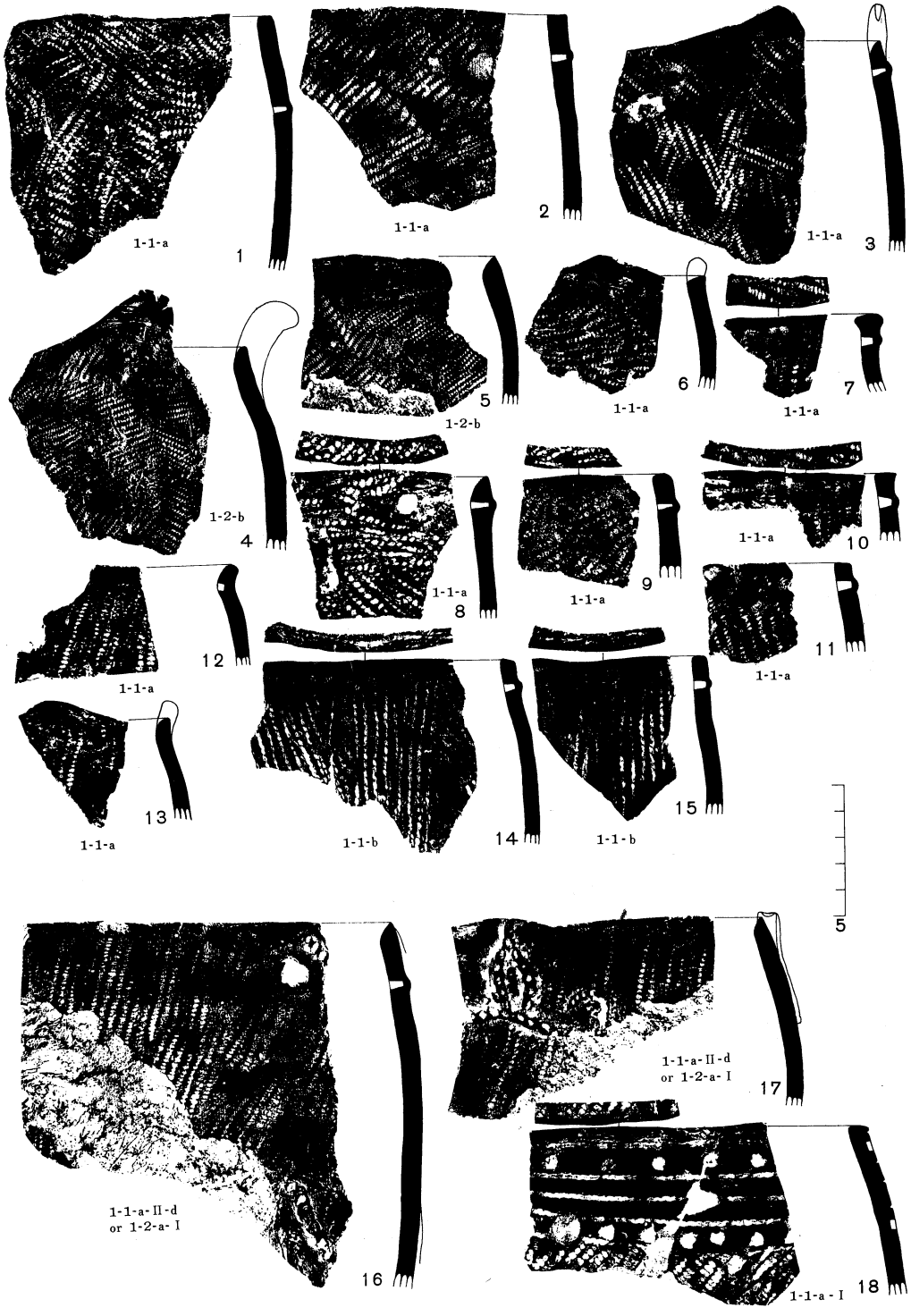
第23図　1966年　第1トレンチ出土土器　1

1～16　黄褐色砂質土層

第24図　1966年　第1トレンチ出土土器　2

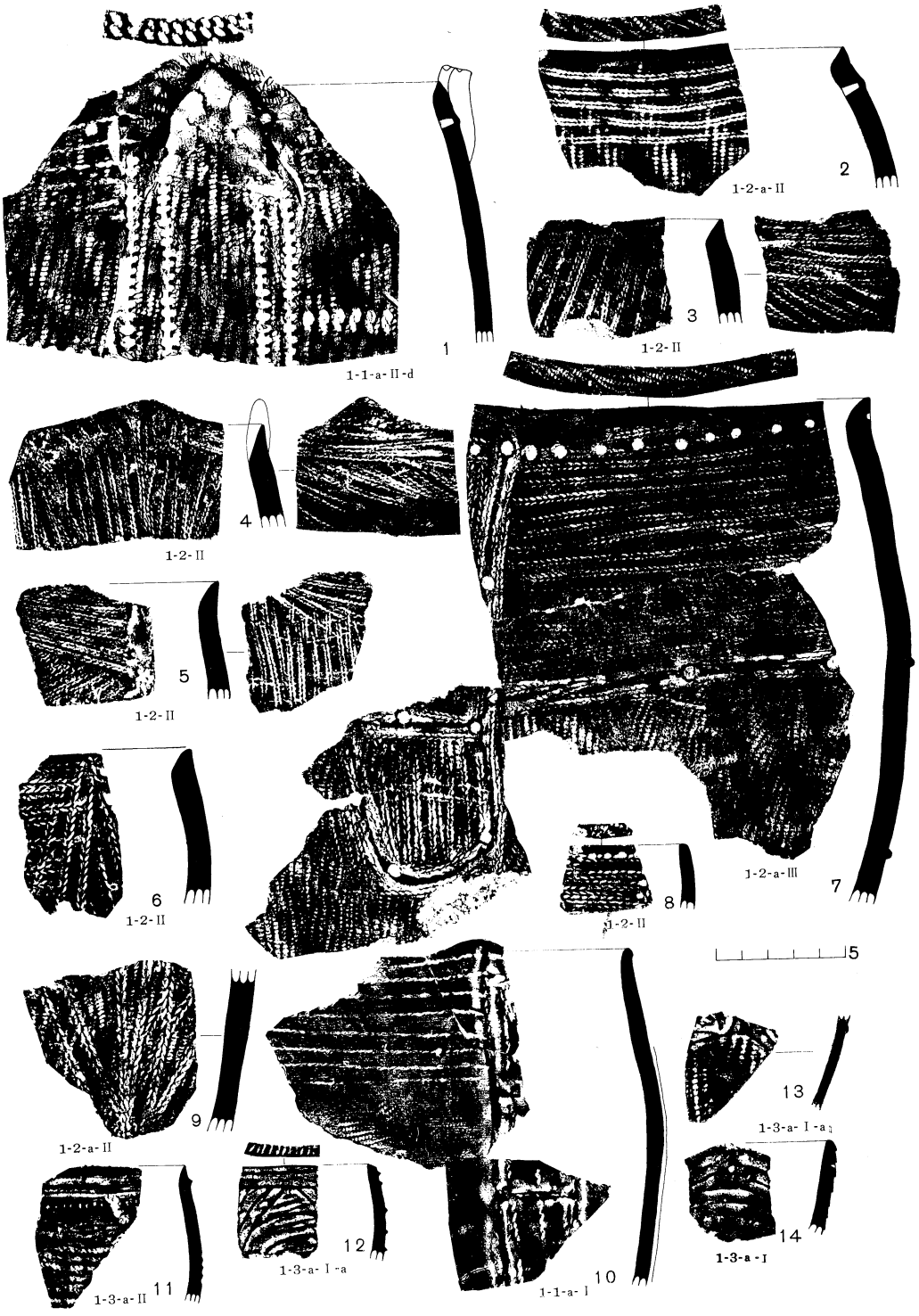
1～4　泥炭層　　5～7　魚骨腐蝕土層　　8　純貝層直下

9　純貝層中　　10～12　貝層下黄褐色砂質土層



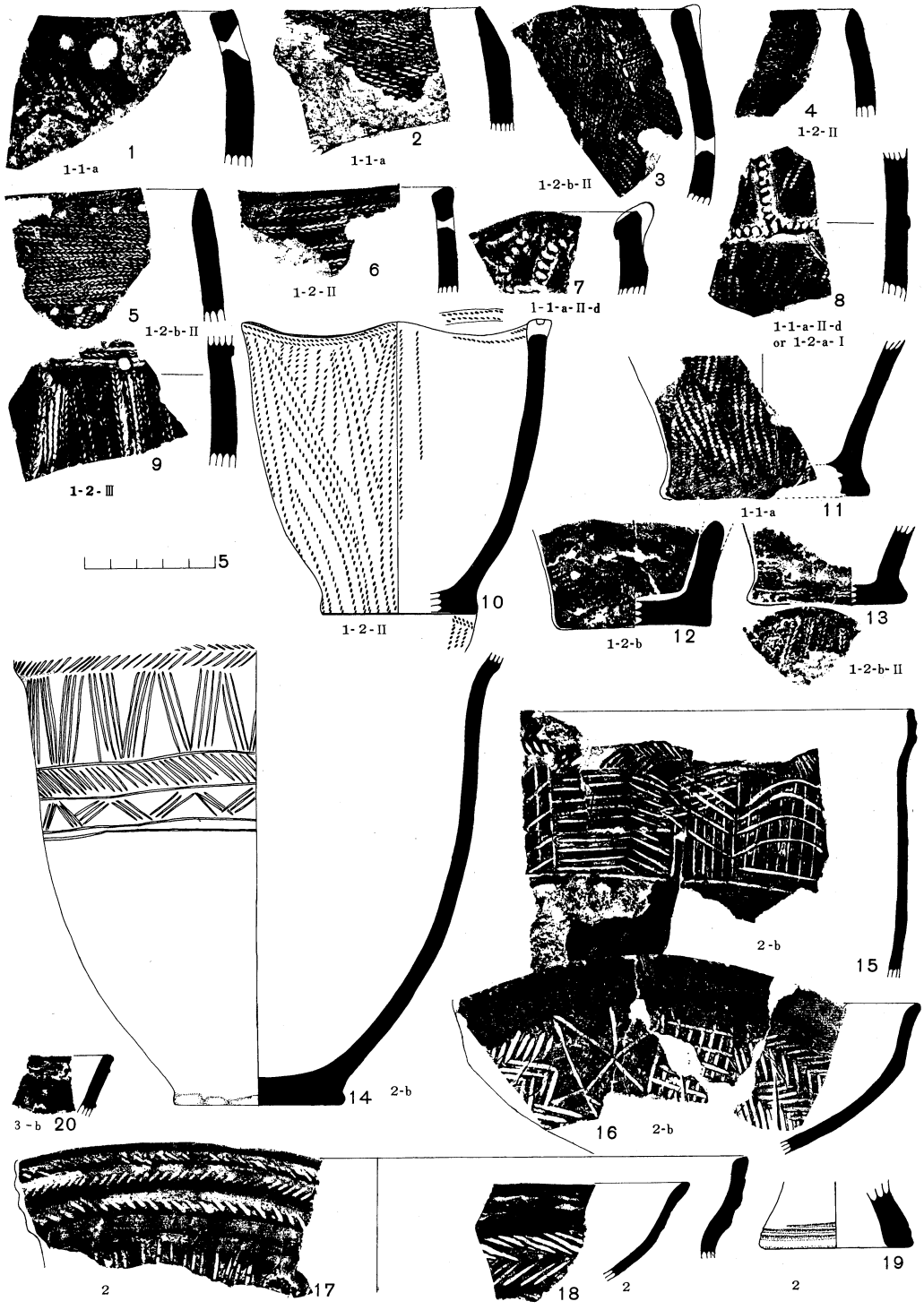
第25図　1966年　第1トレンチ出土土器　3

1～18　表土および破砕貝層

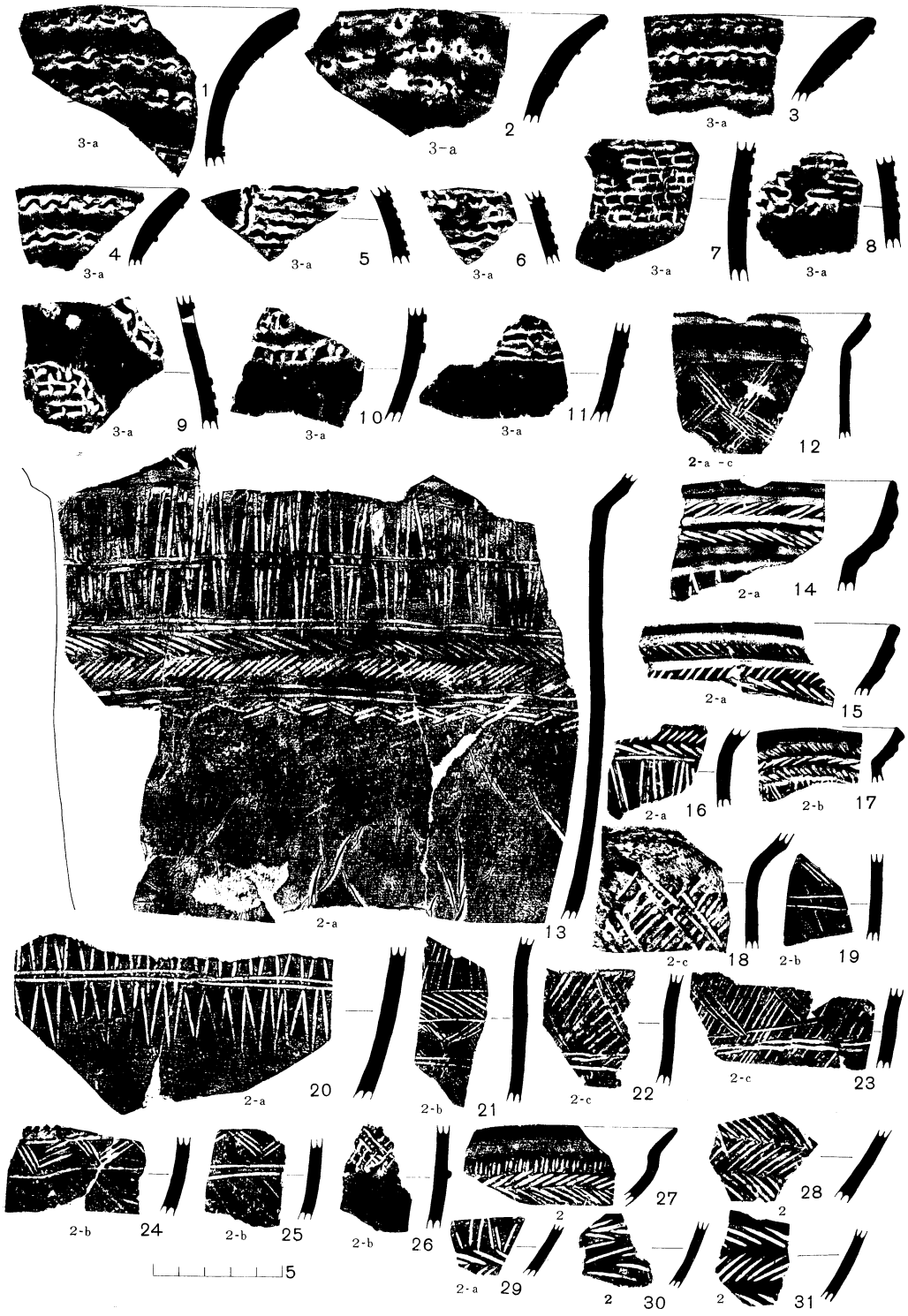


第26図　第1トレンチ出土土器　4

1～14　表土および破砕貝層



第27図　石組および付近出土土器

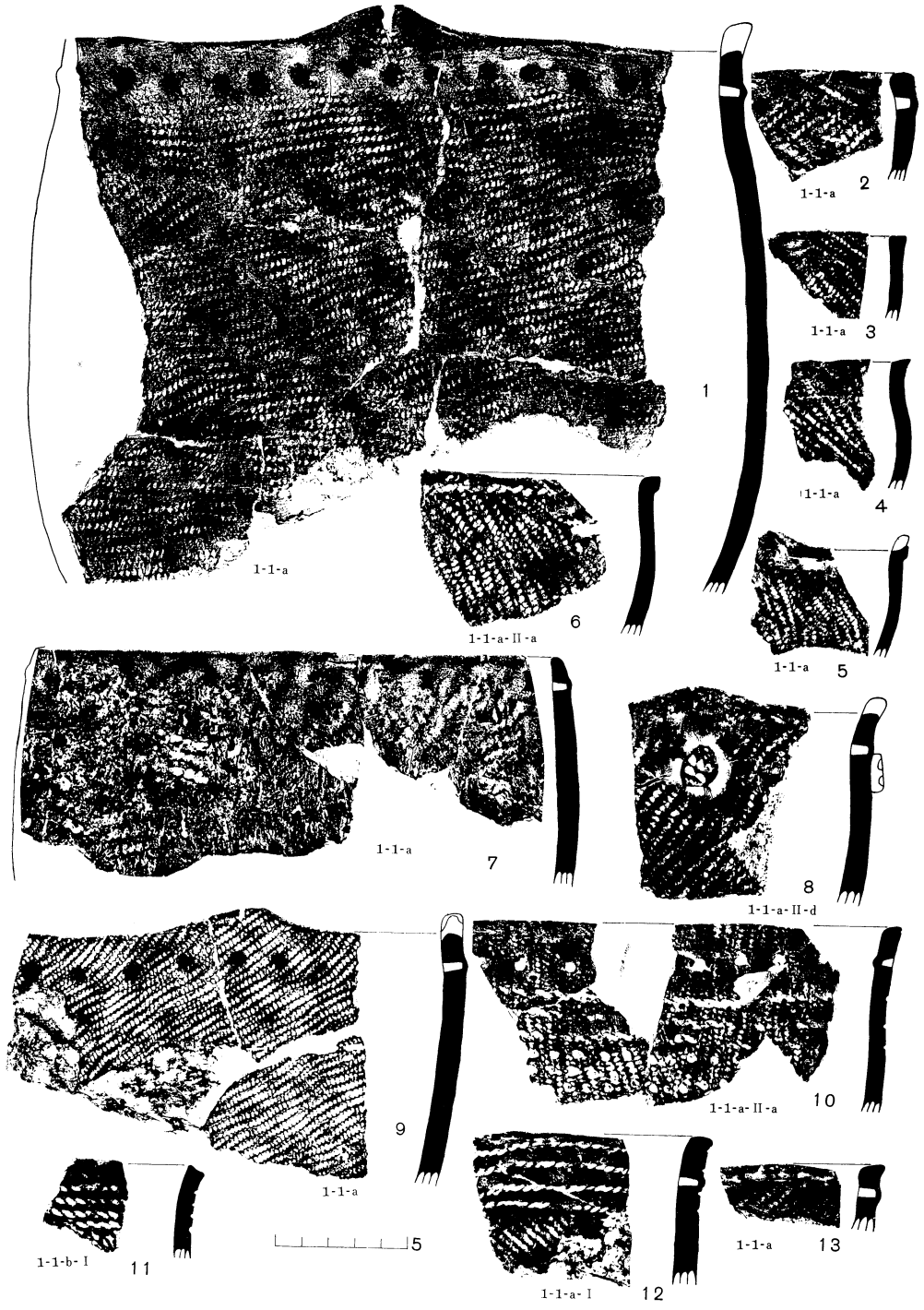


第28図　1966年　第1トレンチ出土土器　5

1～31　表土および破砕貝層

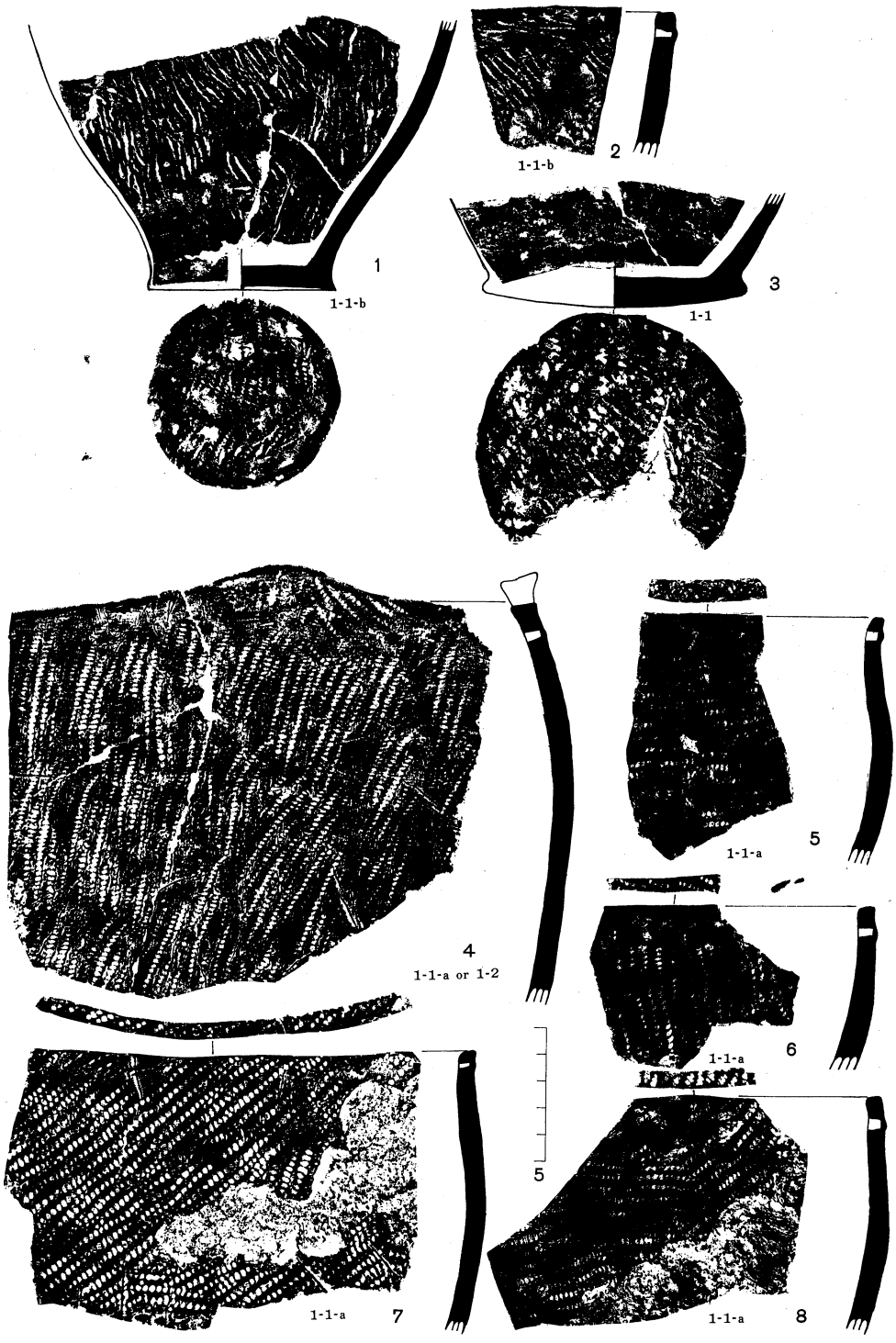
第29図　1966年　第2トレンチ出土土器　1

1～2　魚骨腐蝕土層



第30図　1966年　第2トレンチ出土土器　2

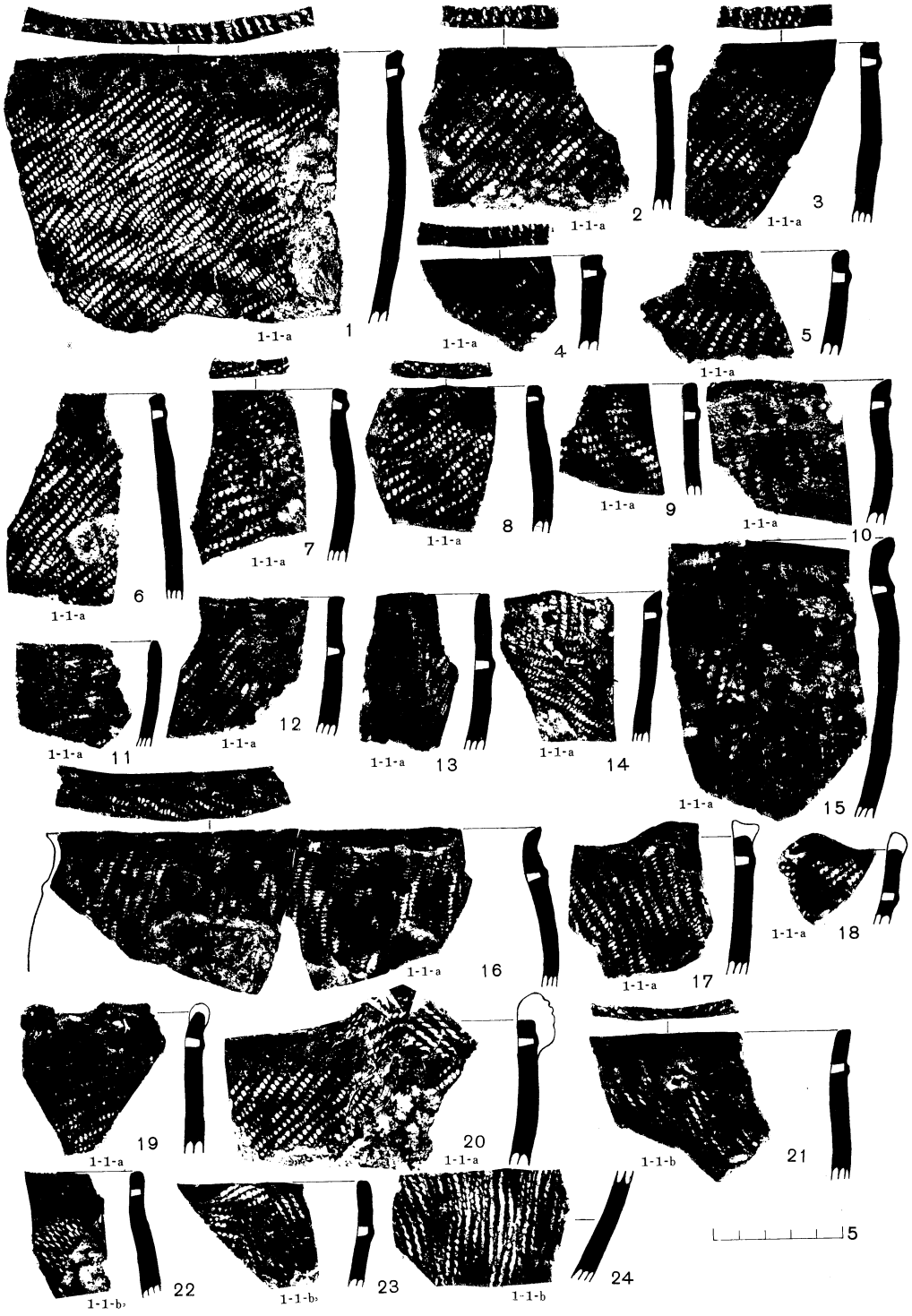
1～13　魚骨腐蝕土層



第31図　1966年　第2トレンチ出土土器　3

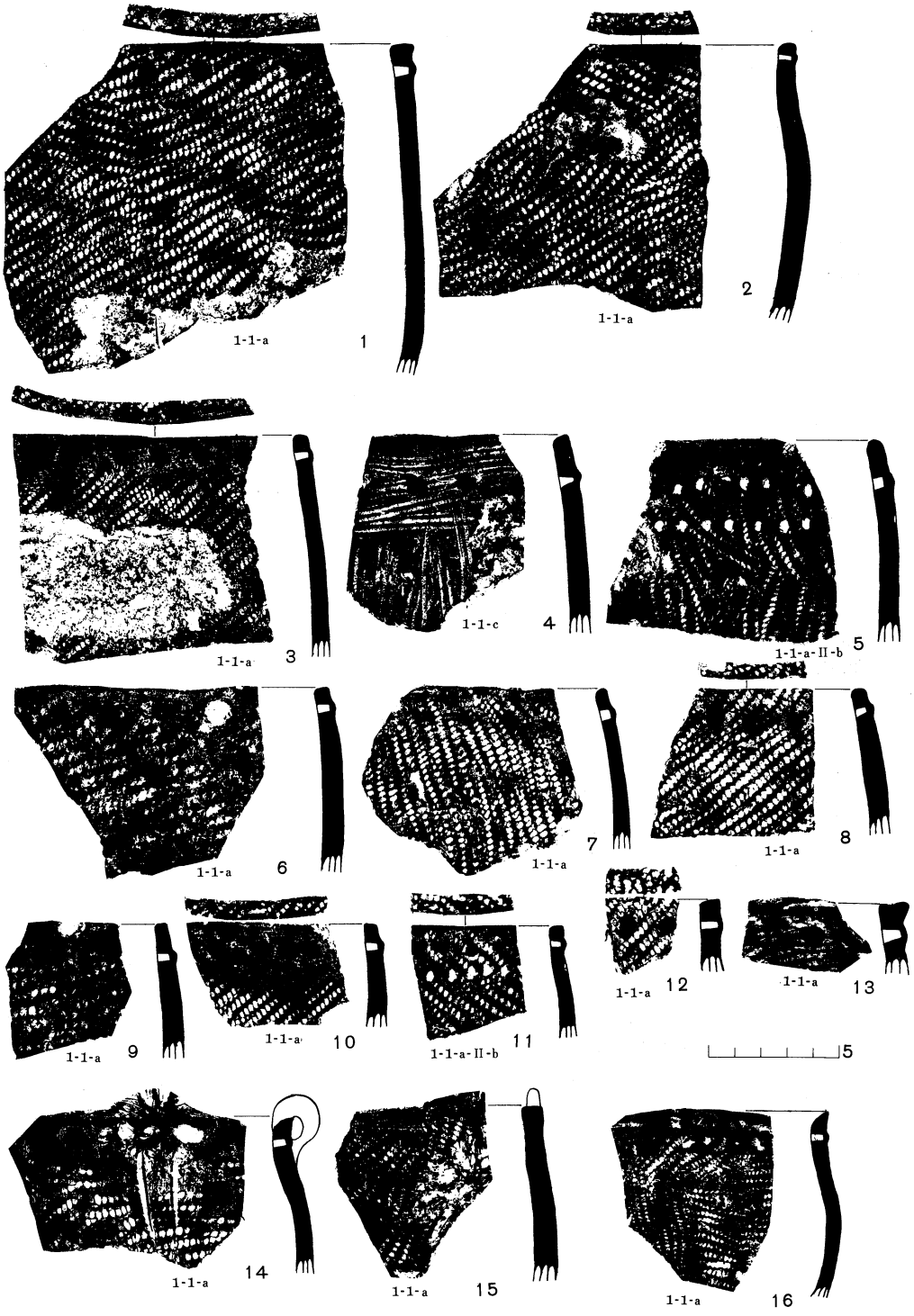
1～3　魚骨腐蝕土層

4～8　破砕貝層



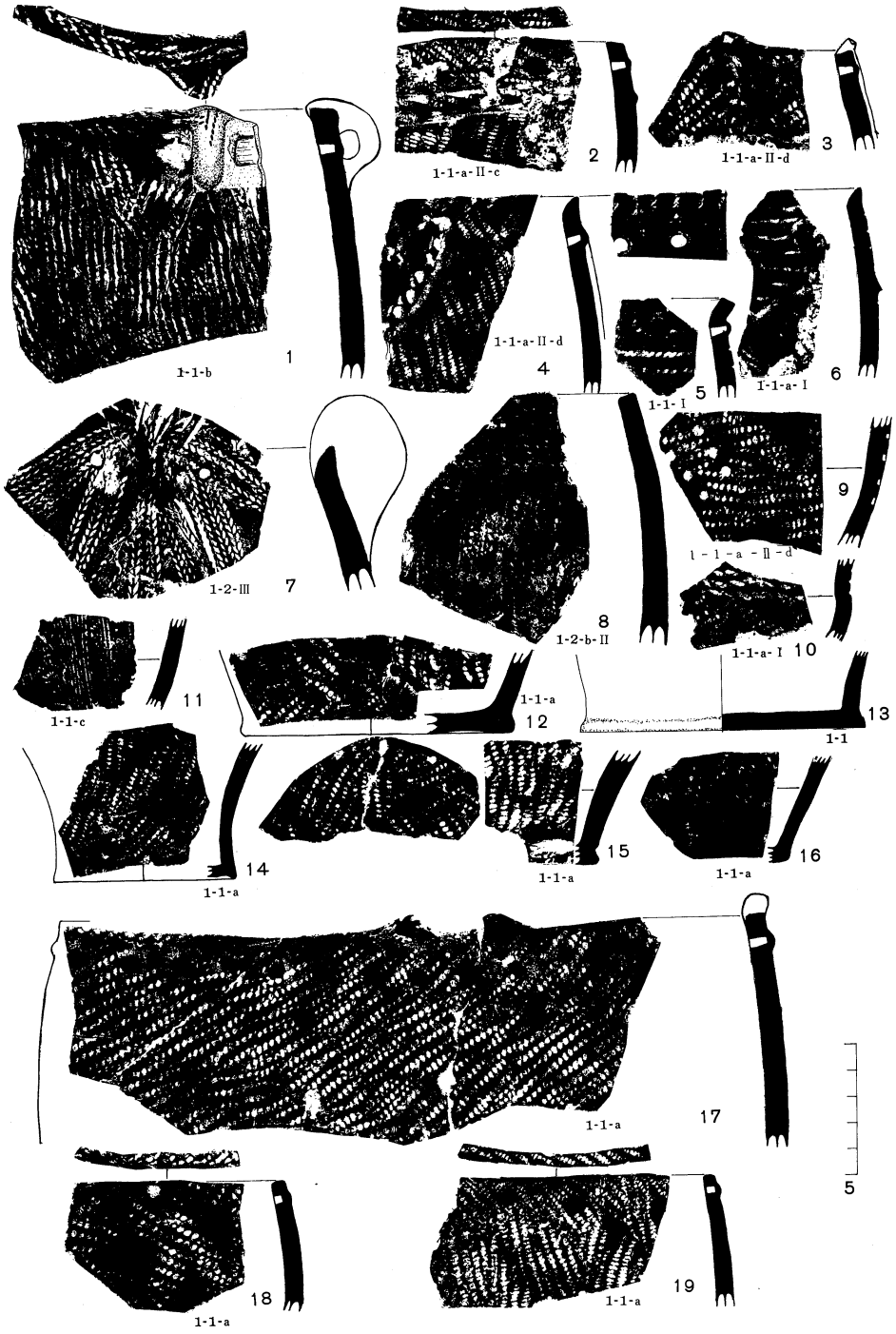
第32図　1966年　第2トレンチ出土土器　4

1～24　破砕貝層



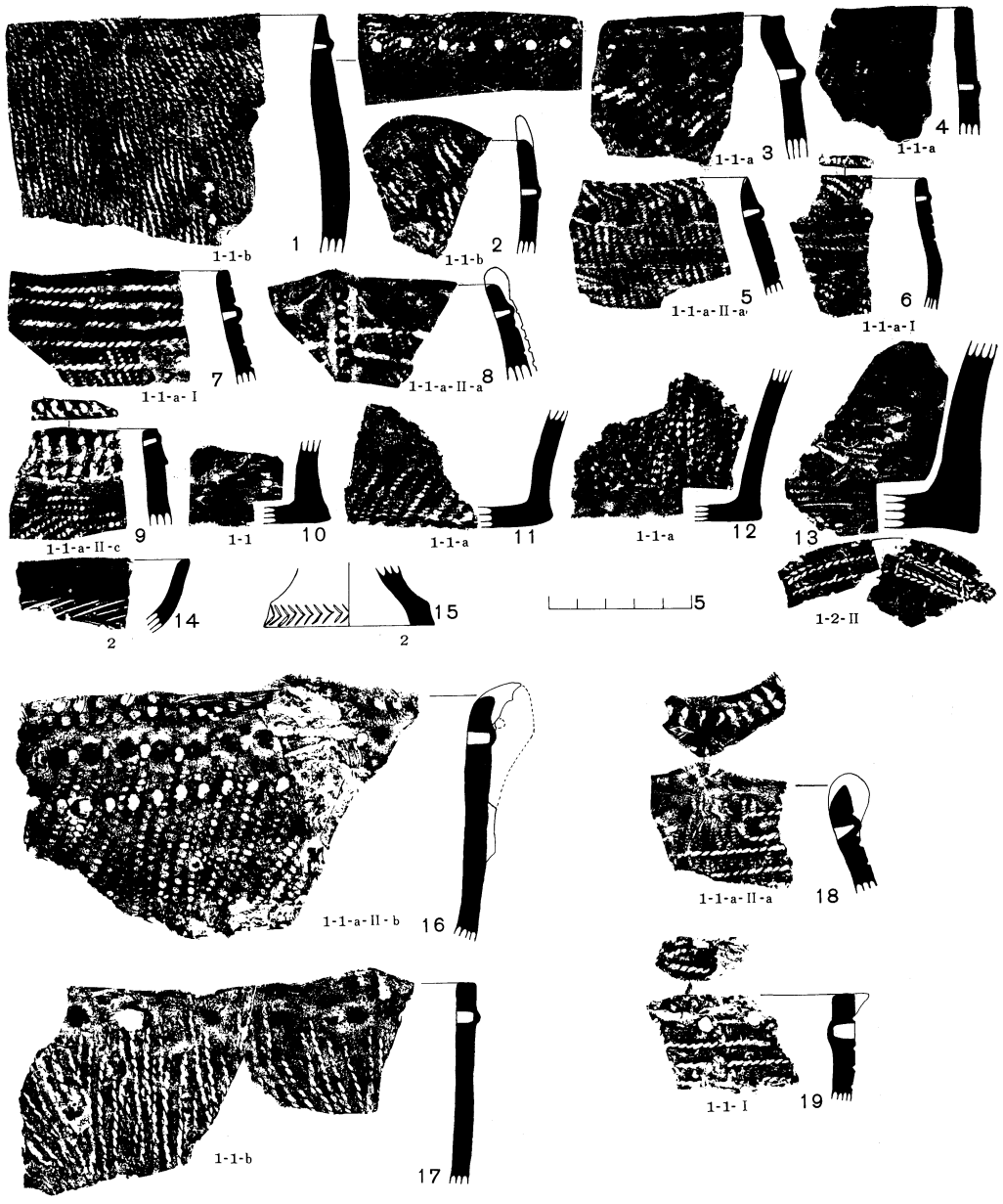
第33図　1966年　第2トレンチ出土土器　5

1～16　表土



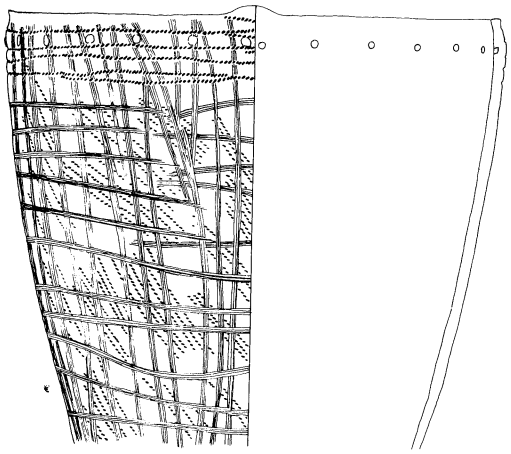
第34図　1966年　第2トレンチ出土土器　6

1～16　破砕貝層　　17～19　表土

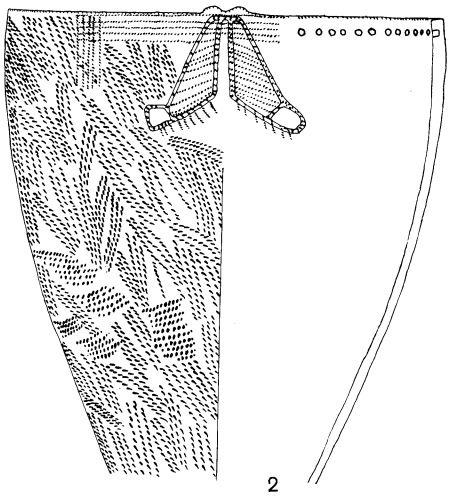


第35図　1966年　第2トレンチ出土土器　7

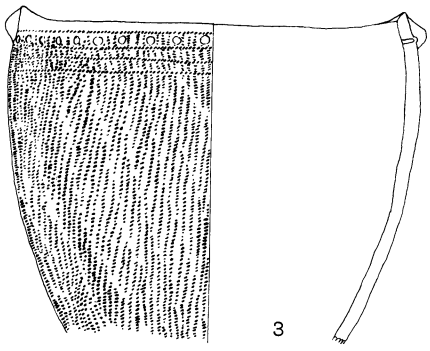
1～15　表土　　16～19　破砕貝層



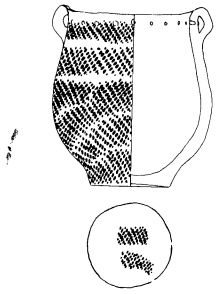
1-1-c-II-a　1



2　1-1-b-II-d



3　1-1-a-II-a



4　1-1-a

10

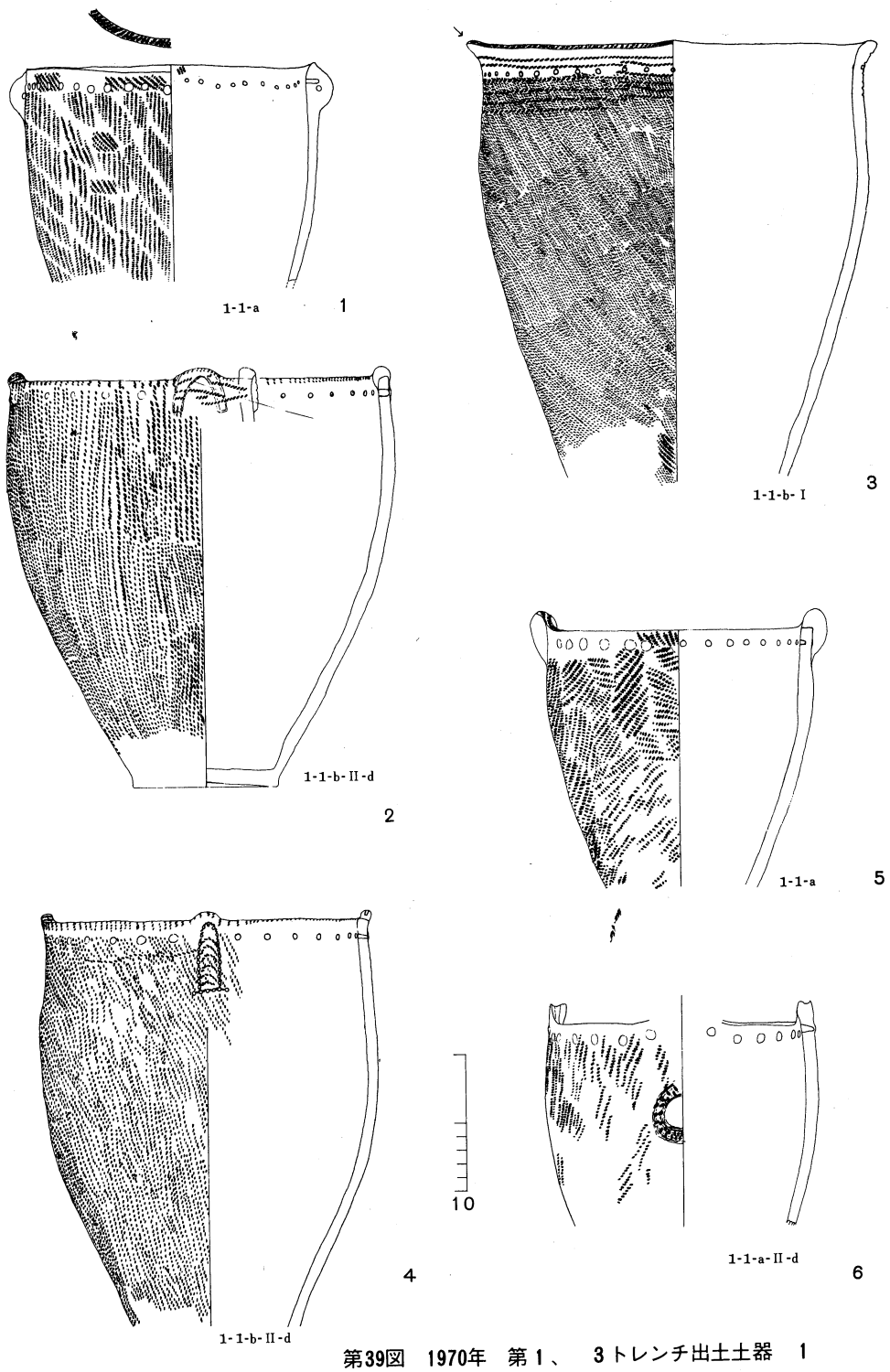
第36図　1966年第２トレンチ出土土器　8

第37図　1966年　第3トレンチ出土土器　1

1～11　純貝層下

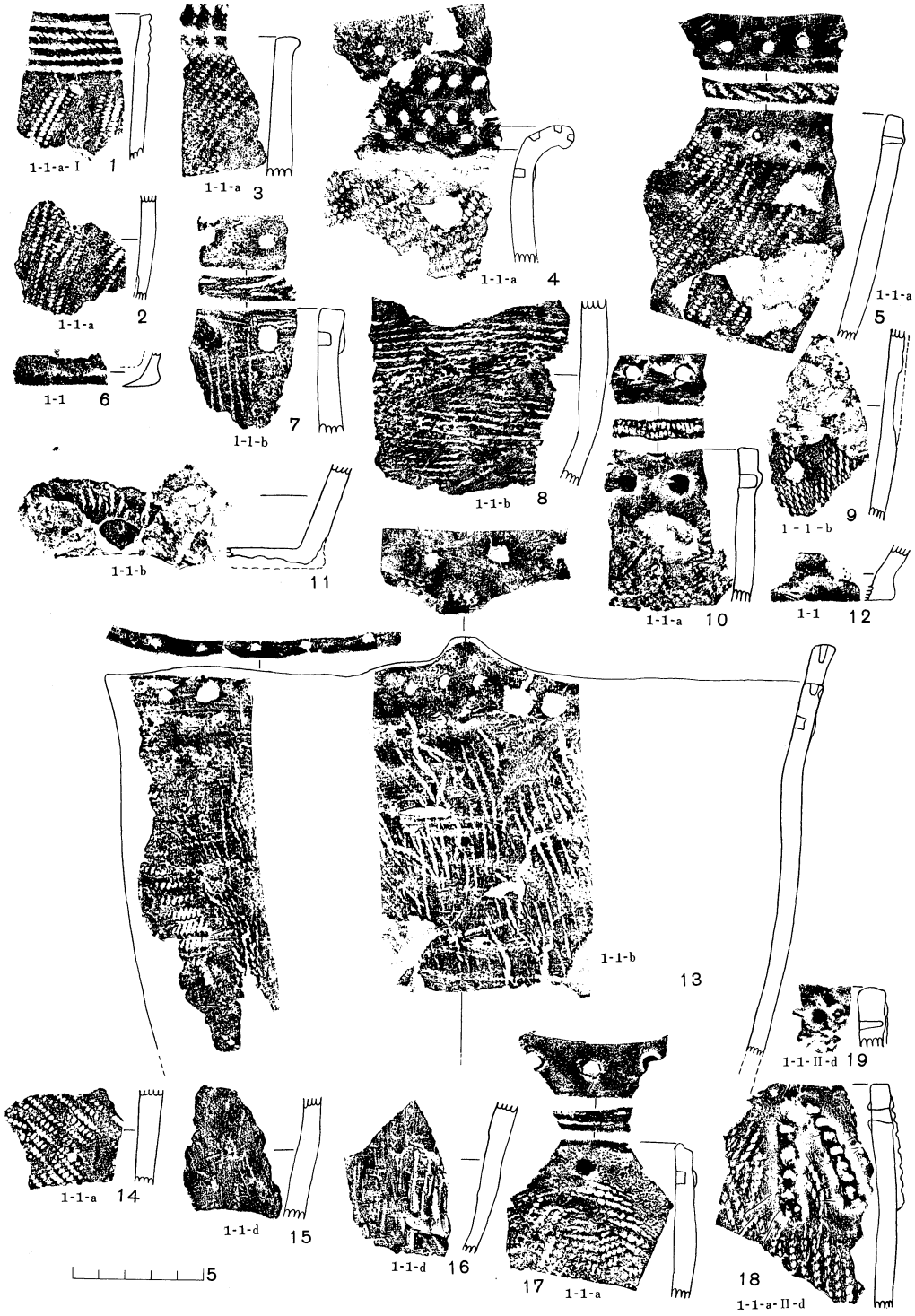
1～5　貝層下
7、8　純貝層中
6、9～17　貝層上
18～21　表土
22　人骨伴出

第38図　1966年　第3トレンチ出土土器　2



第39図　1970年　第1、　3トレンチ出土土器　1

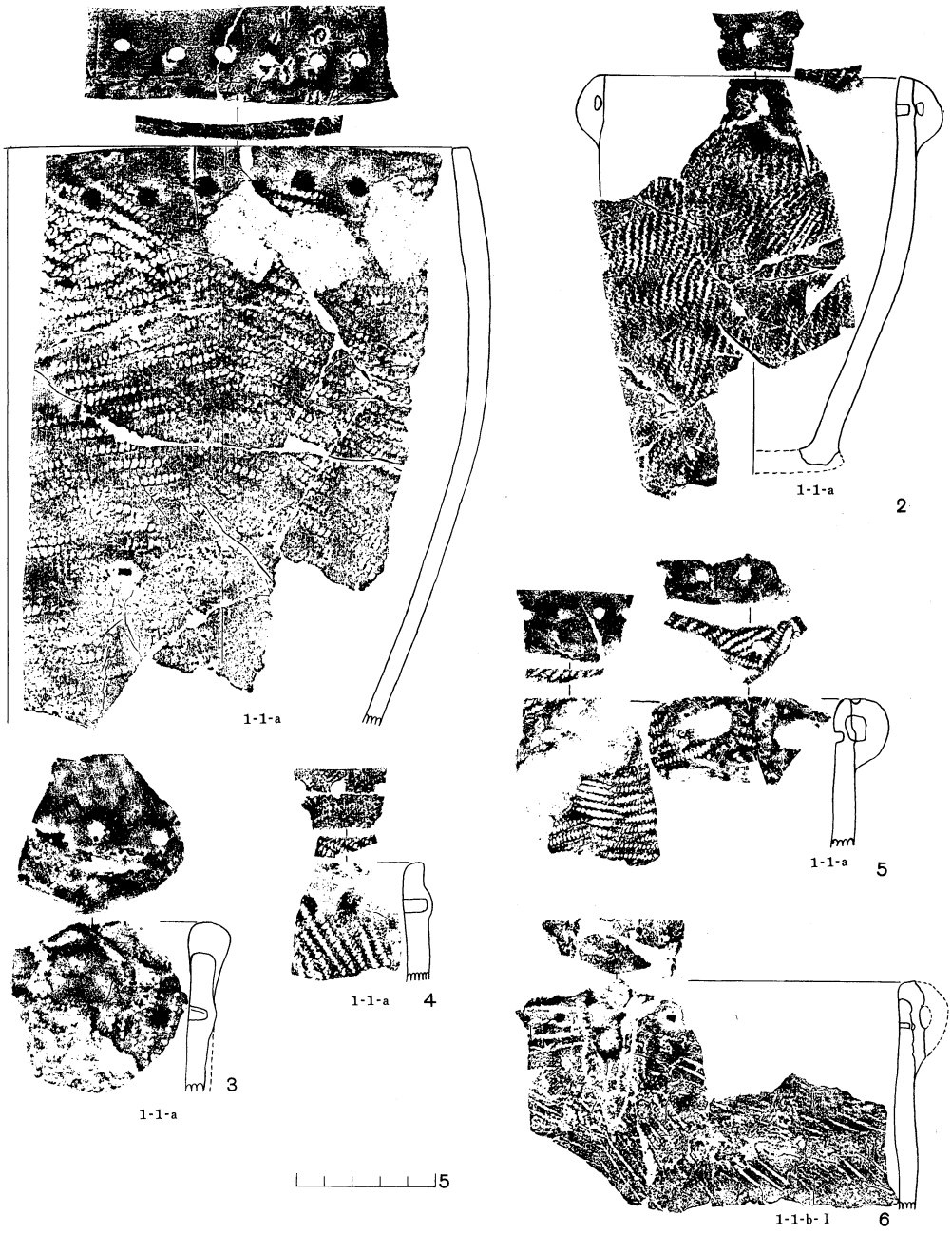
1～6　表土



第40図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　2

1～18　泥炭層直上

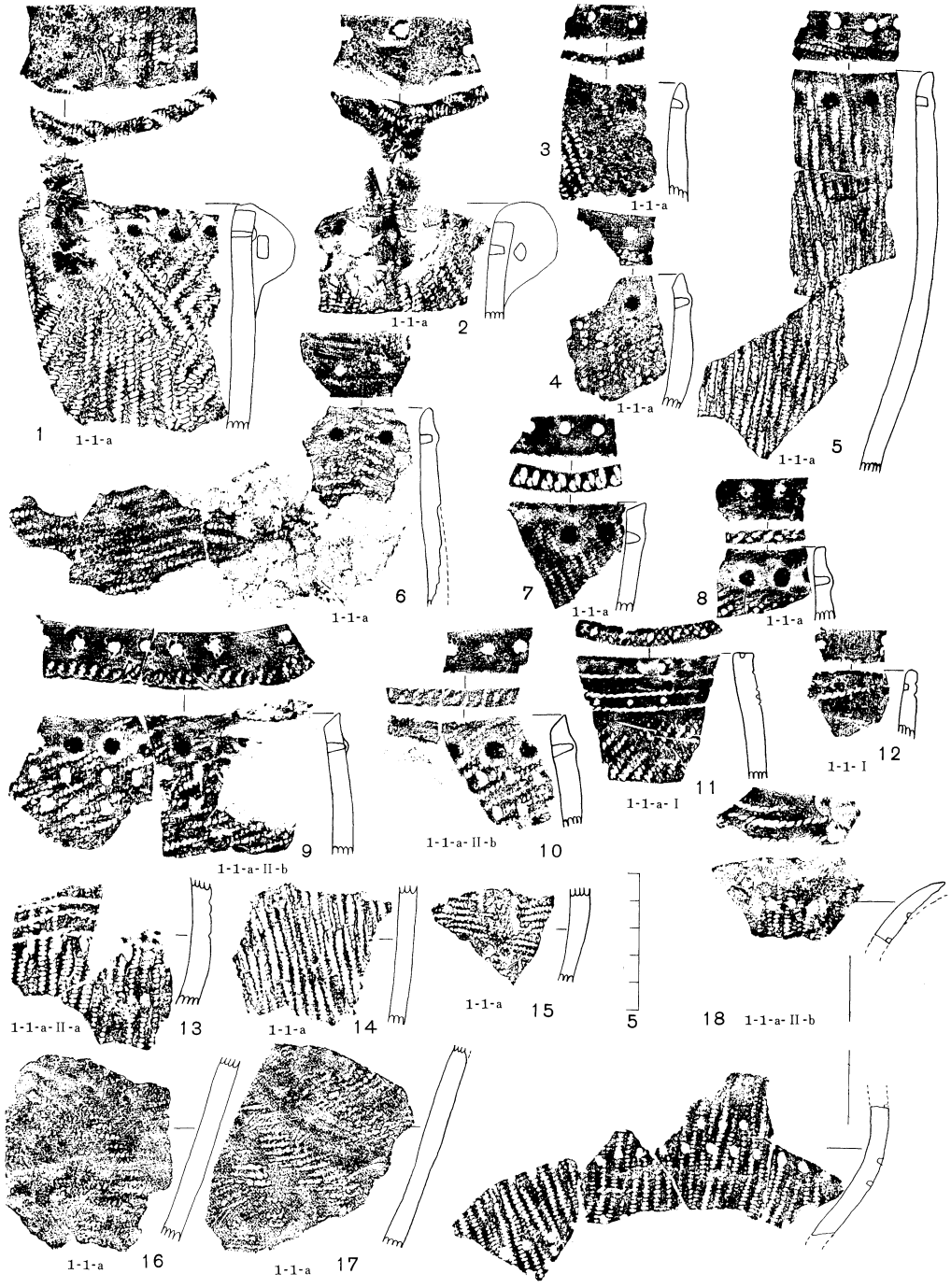
19　　青色粘土中



第41図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　3

1～5　魚骨腐蝕土層

6　泥炭層

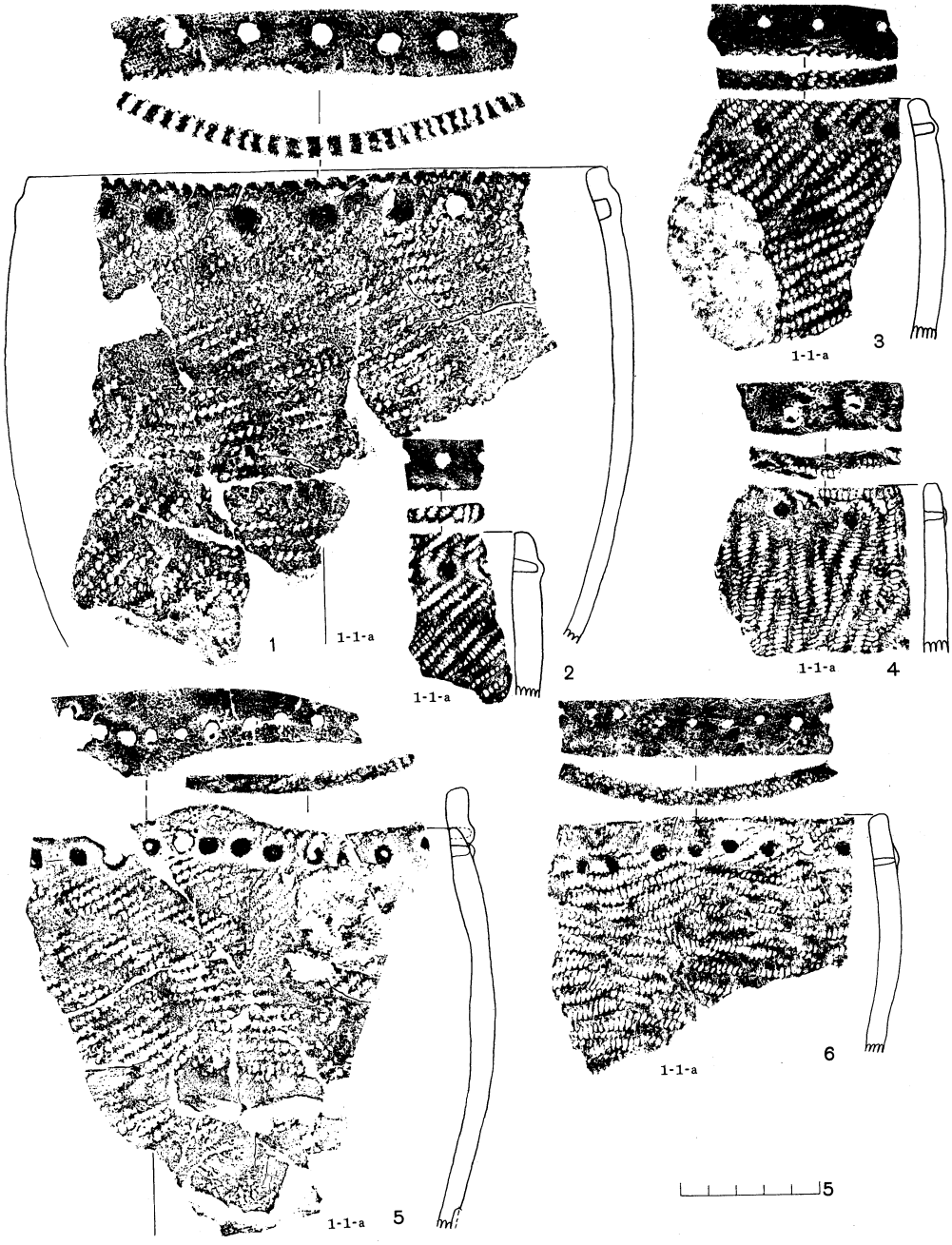


第42図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　4

1、2、18　魚骨腐蝕土層

3～6、8～17　貝層下黄褐色土層

7　　貝層下礫群

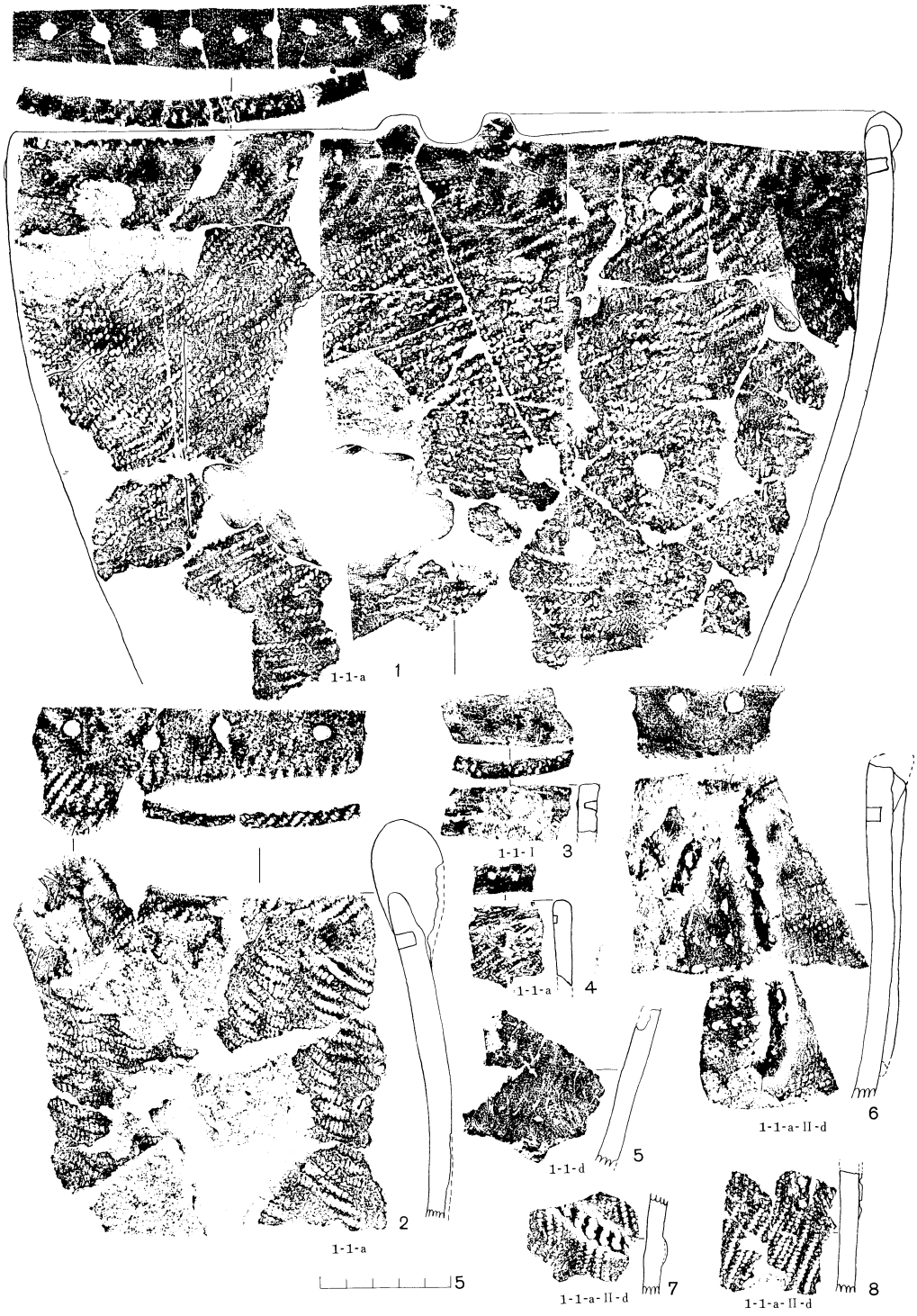


第43図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　5

1～2、4、5　貝層下黄褐色土層

3　貝層下礫群

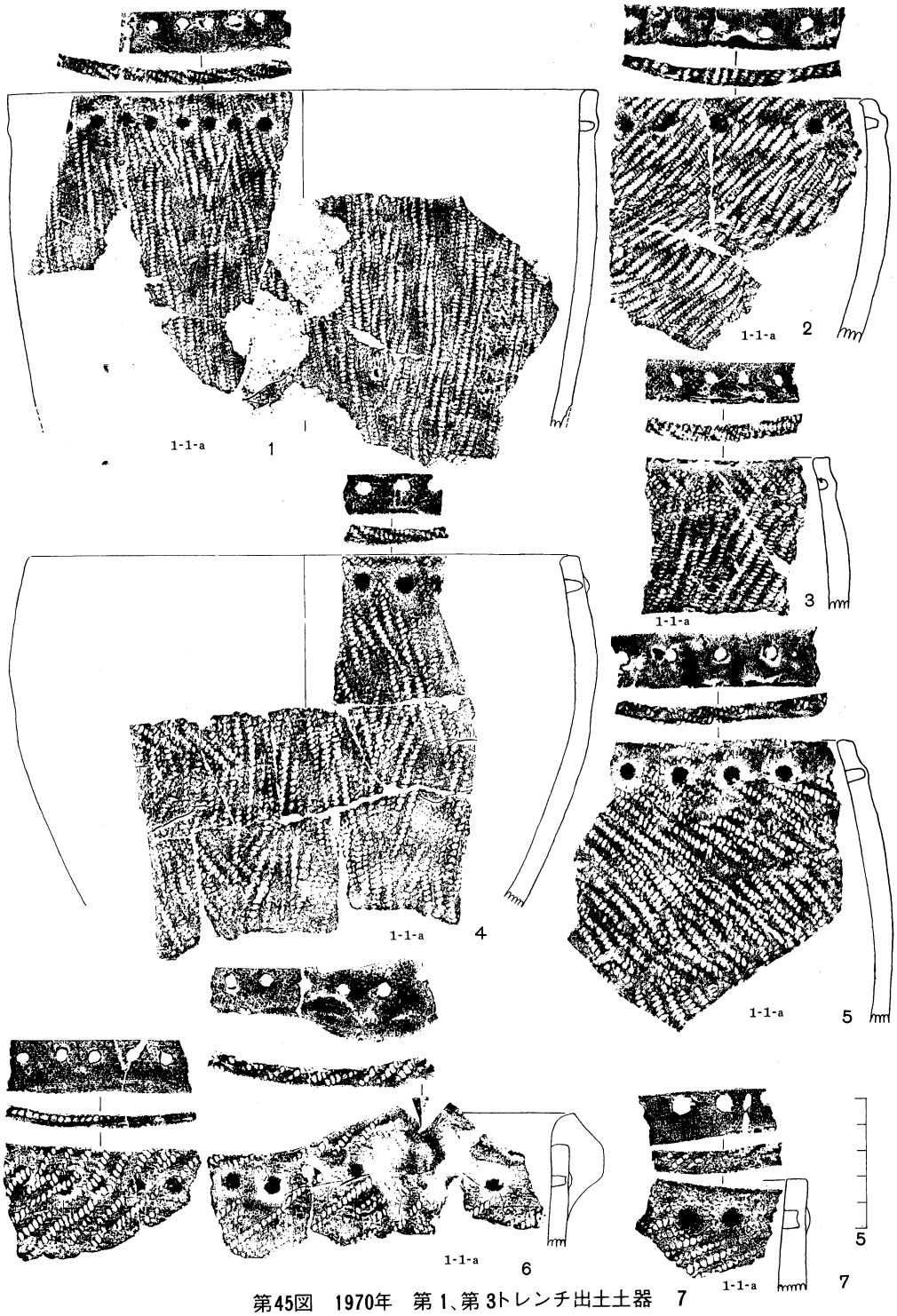
6　魚骨腐蝕土層



第44図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　6

1～7　貝層下黄褐色土層

8　魚骨腐蝕土層

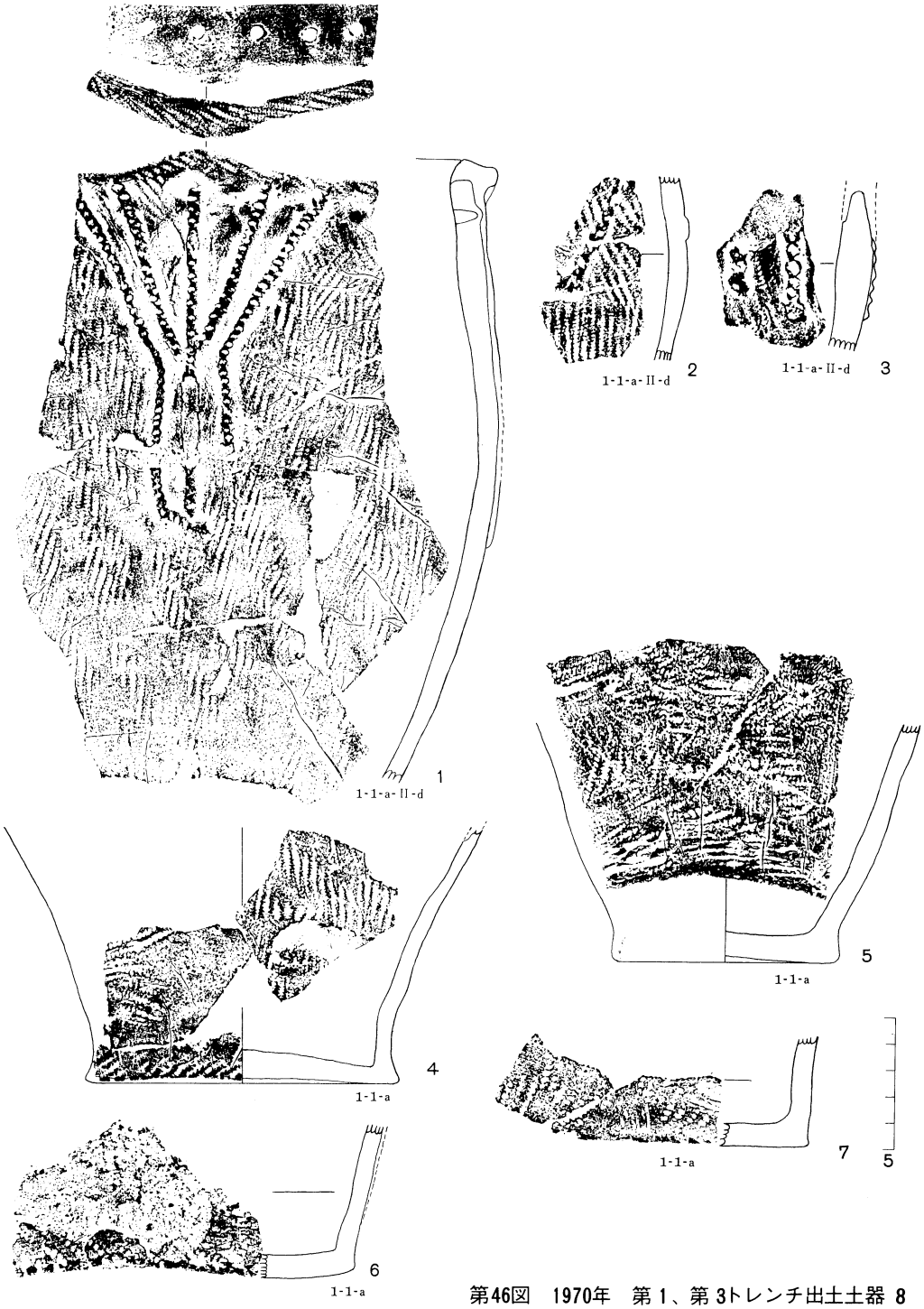


第45図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　7

1　貝層下礫群

2　魚骨腐蝕土層

3～7　貝層下黄褐色土層

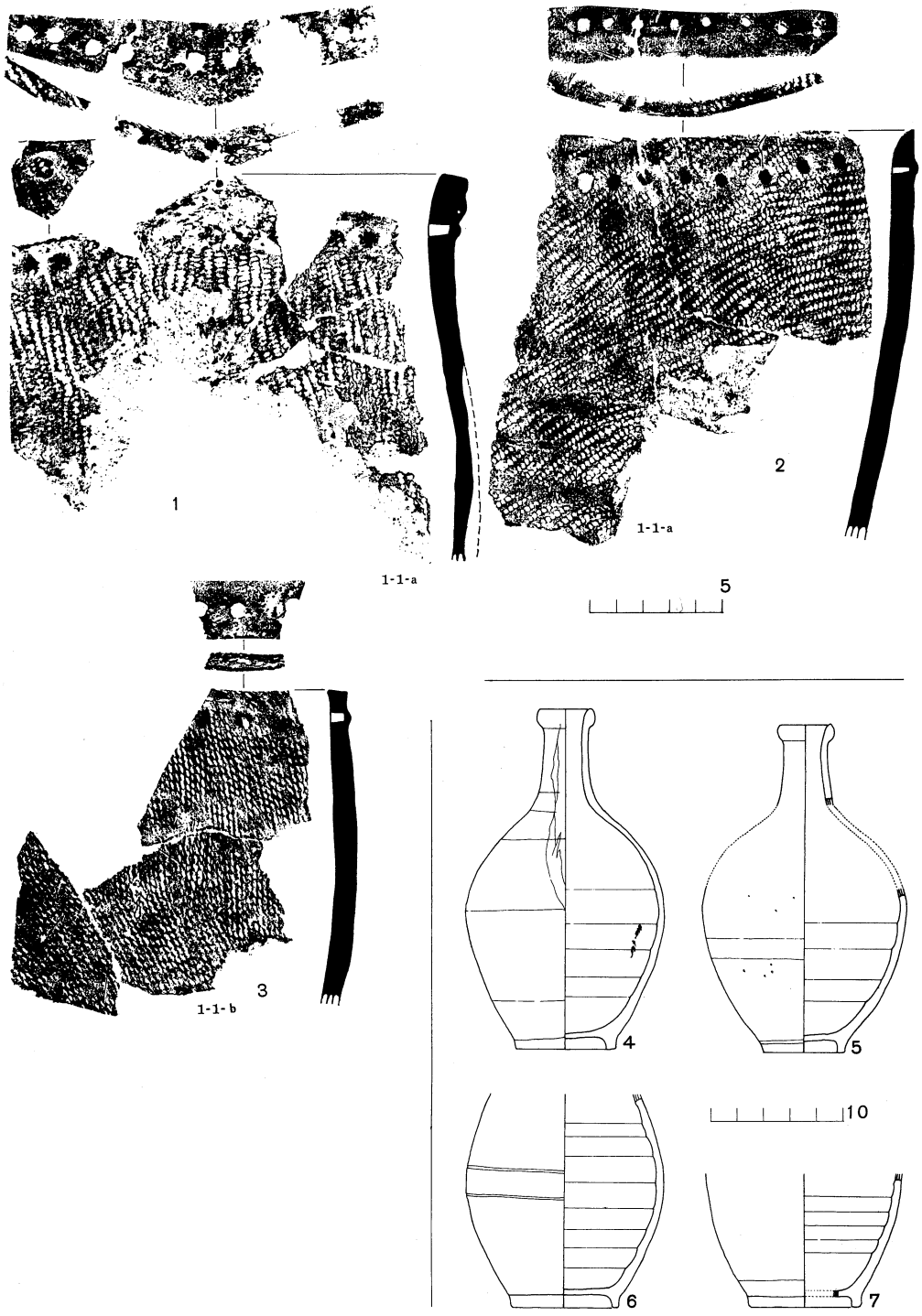


第46図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器 8

1～3、5、7　貝層下黄褐色土層

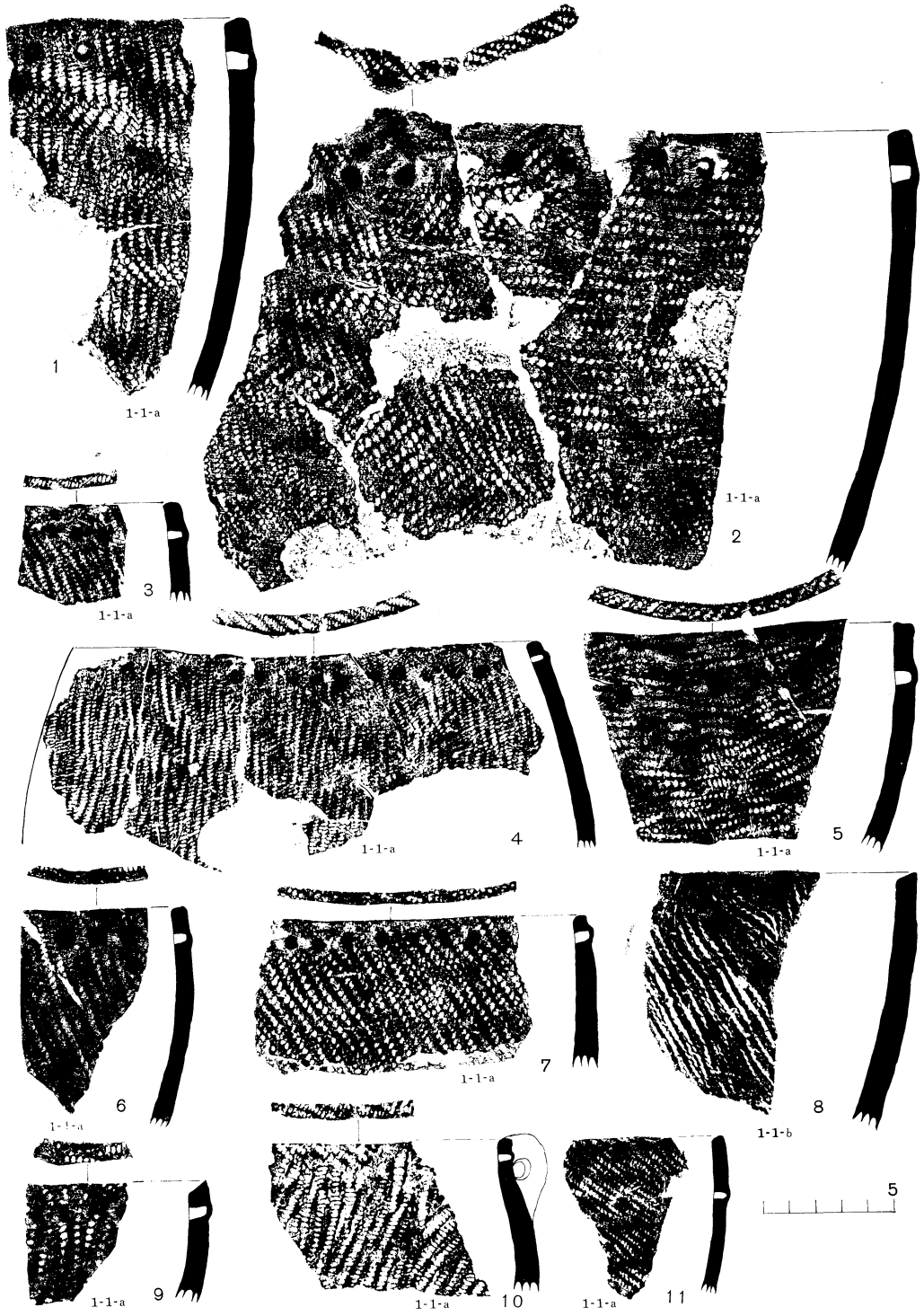
4、貝層下礫群

6、魚骨腐蝕土層



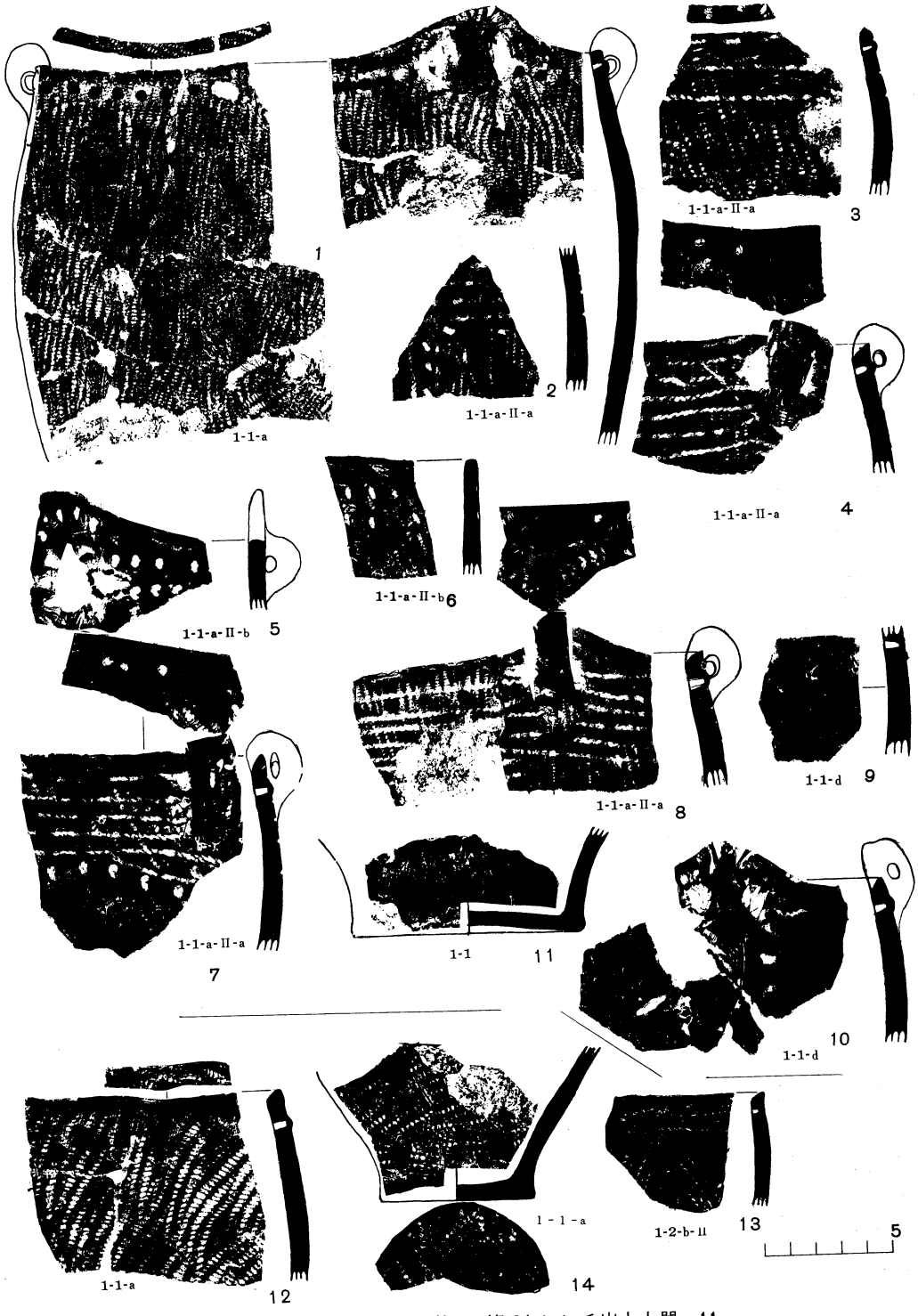
第47図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器 9
および1号住居址出土　徳利

1～3、貝層下黄褐色土層
4～7　1号住居址表土



第48図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　10

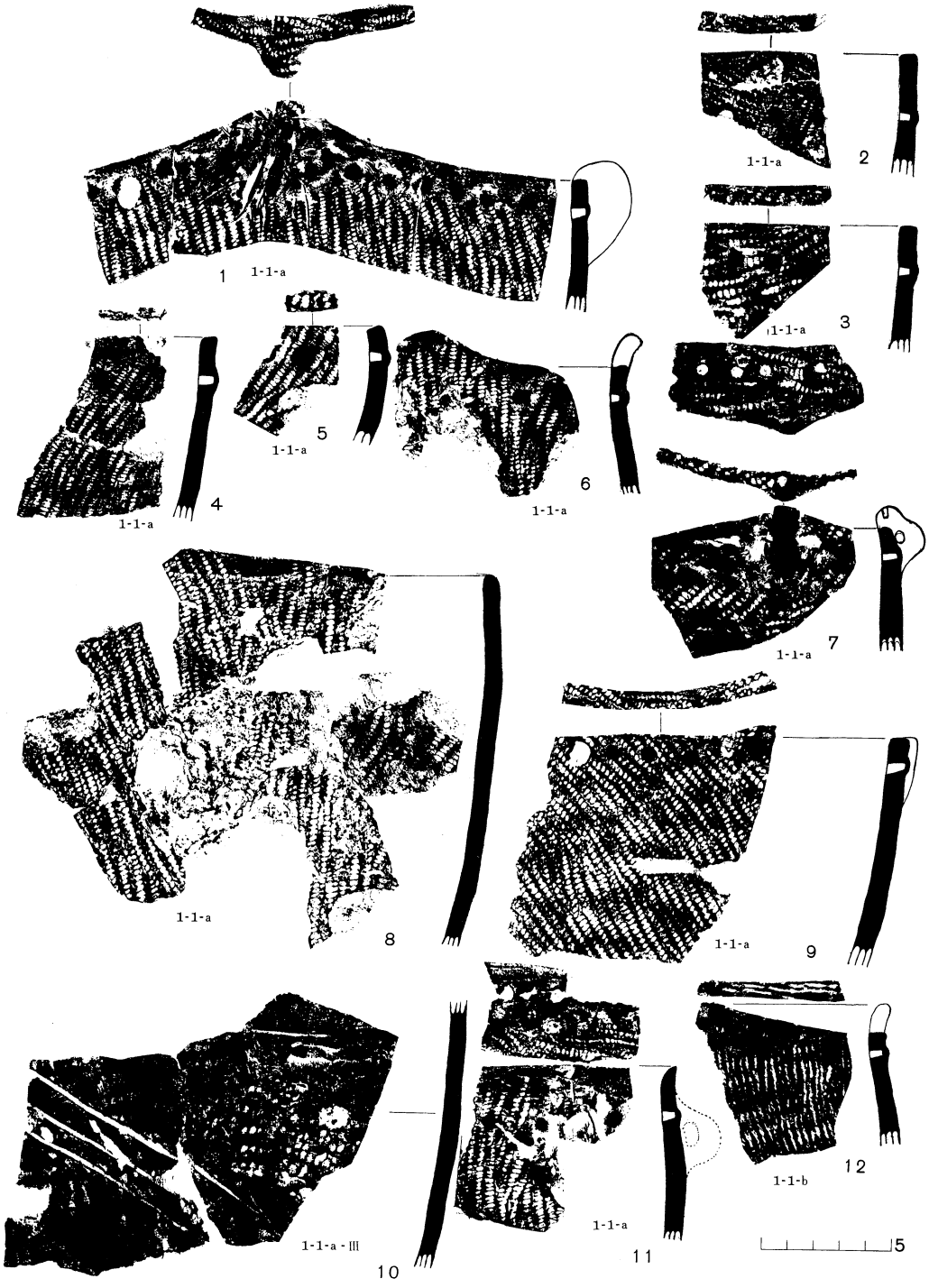
1～11　純貝層中



第49図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　11

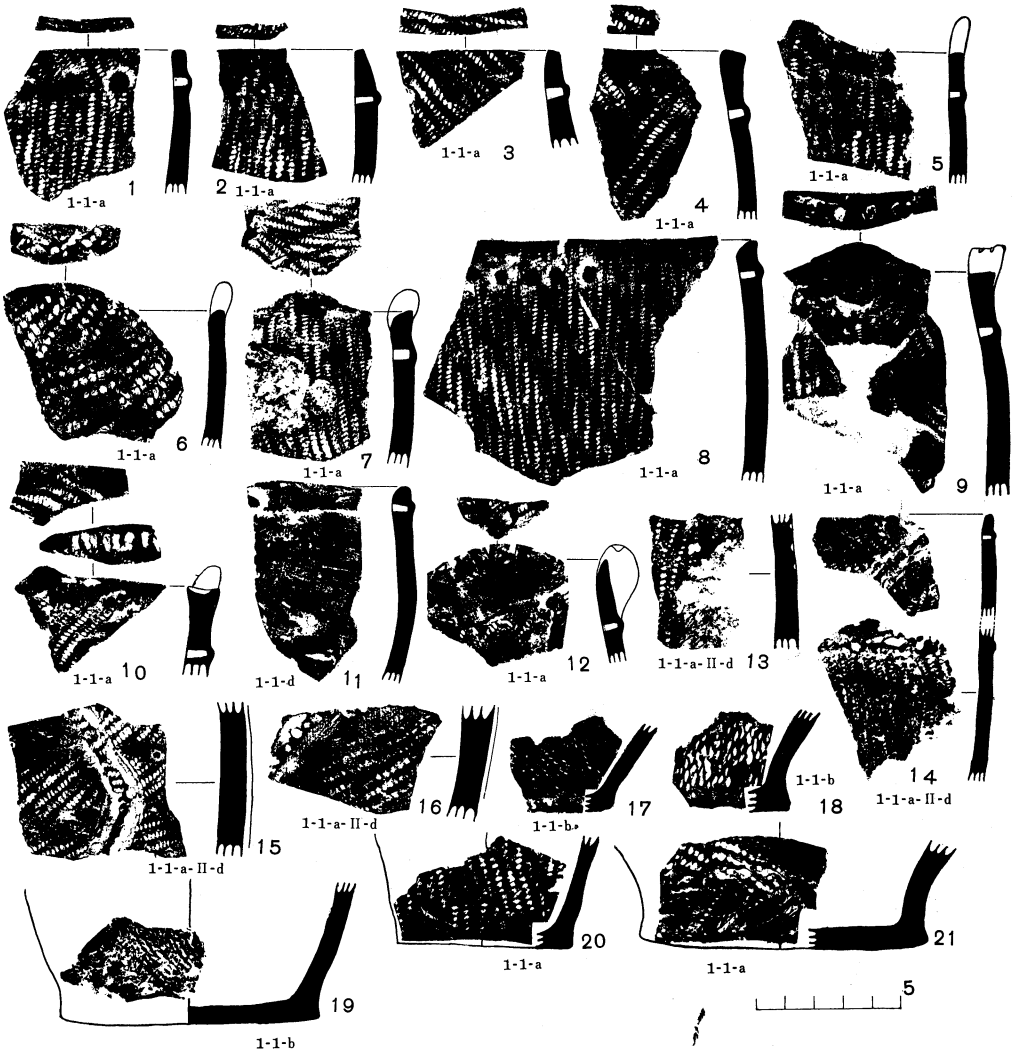
1～11　純貝層中

12～14　貝層上黄褐色土層



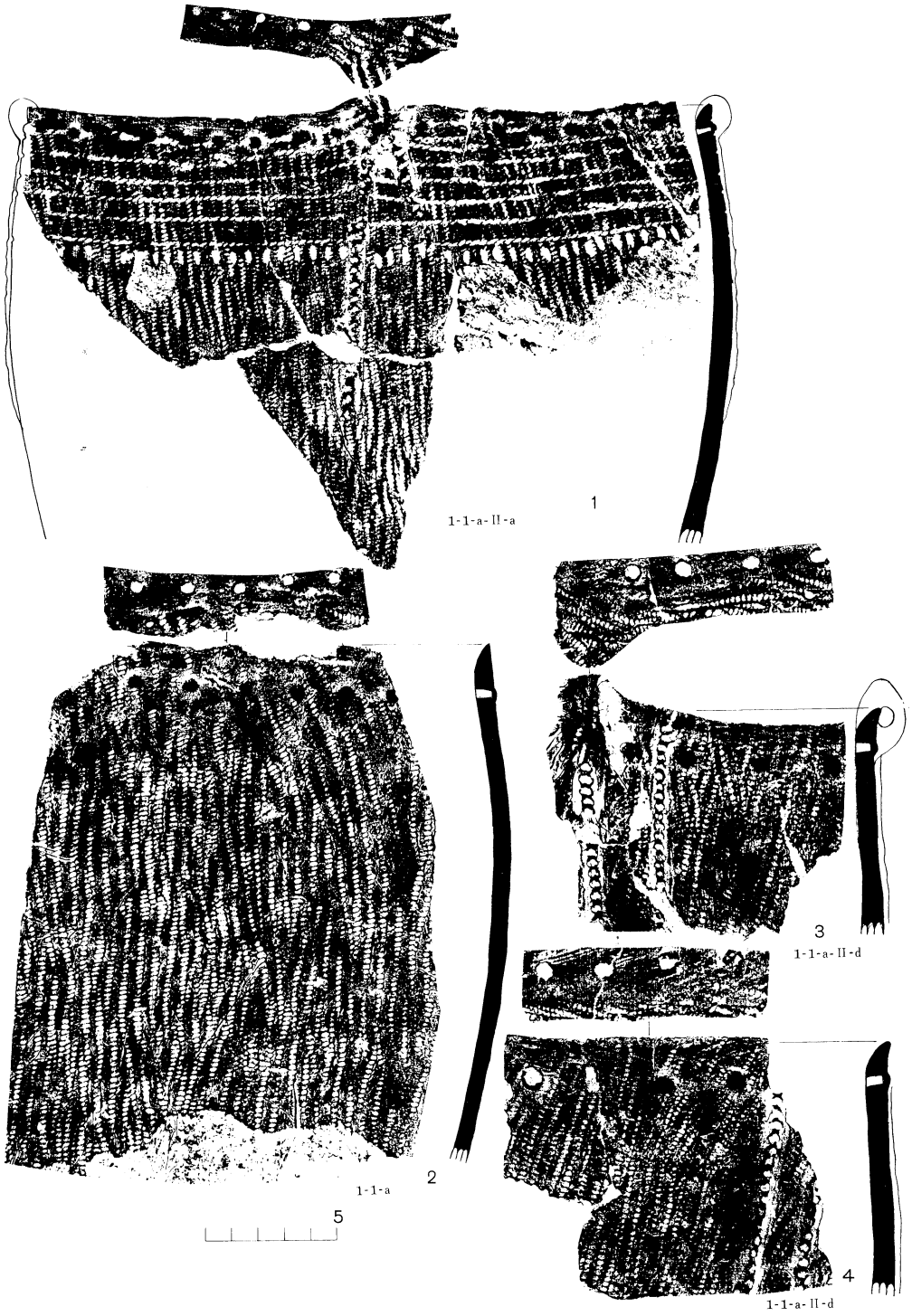
第50図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　12

1～12　貝層上黄褐色土層



第51図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　13

1～21　貝層上黄褐色土層及び混貝土層



第52図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　14

1、2　混貝土層

3、4　表土

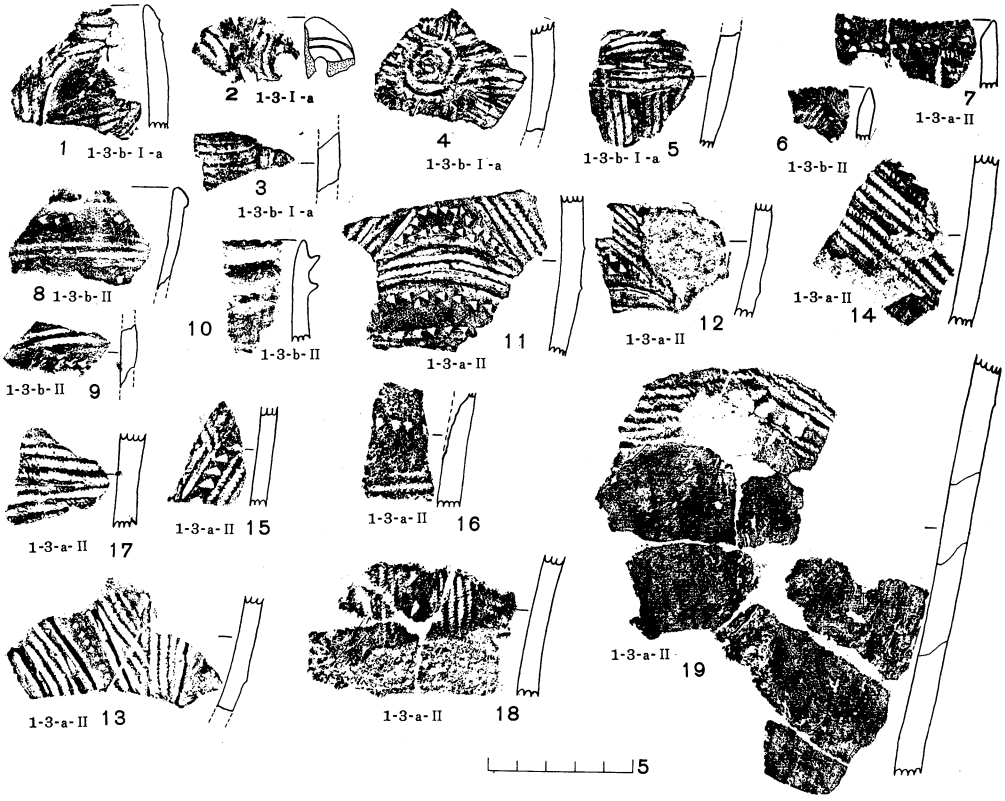
第53図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　15

1～6　表土

第54図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　16

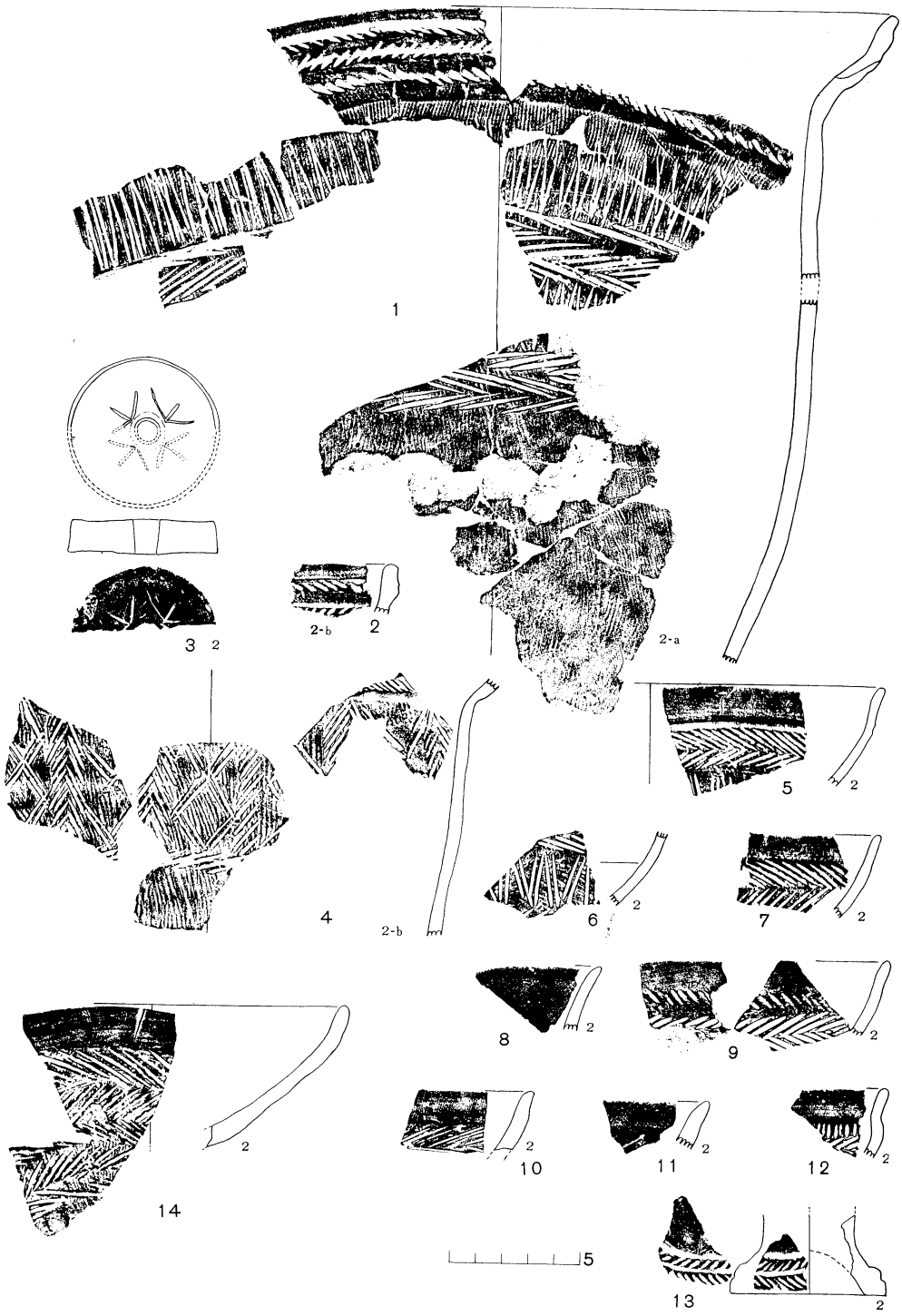
1～7　表土

8～12　混貝土層



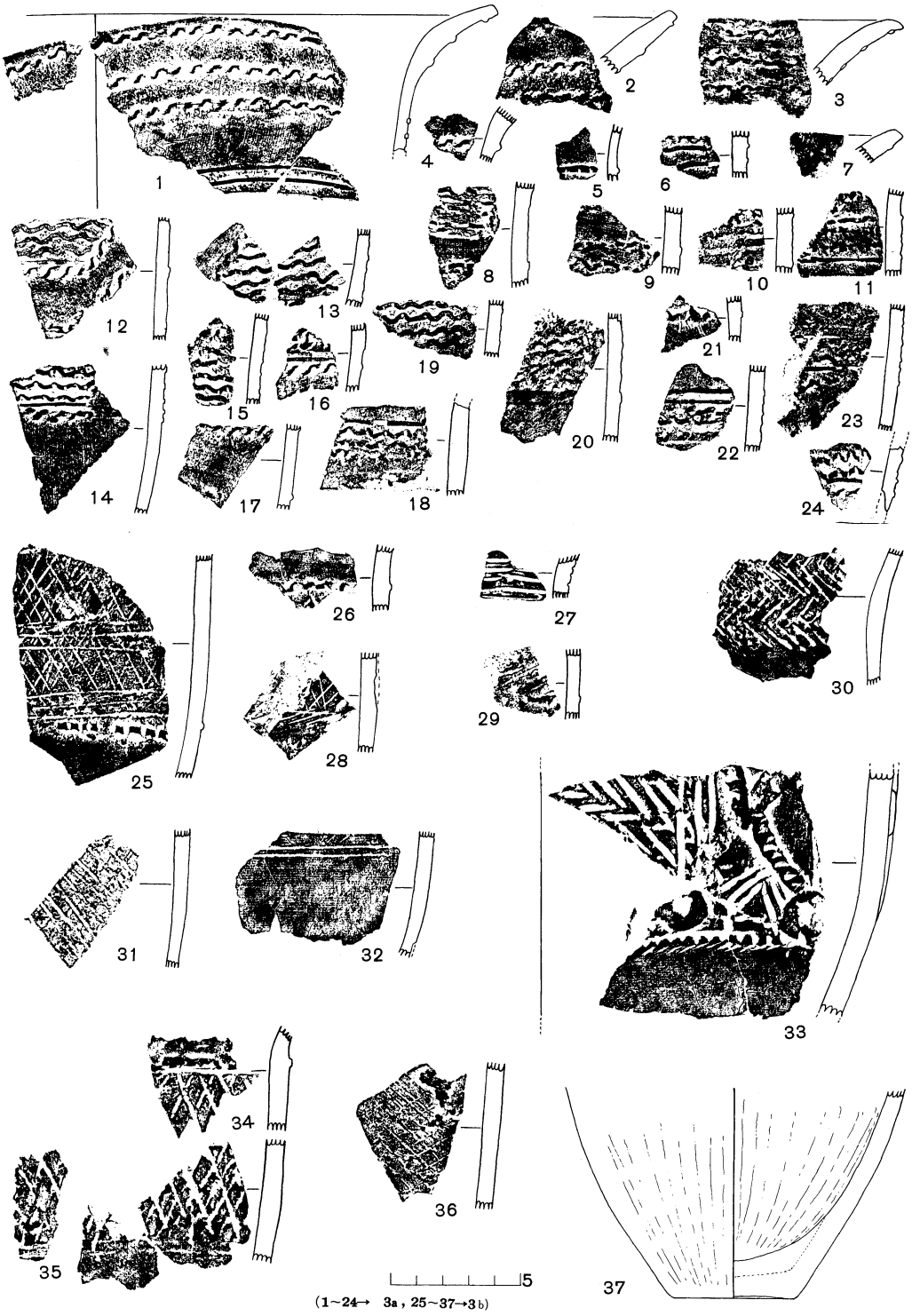
第55図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　17

1～19　表土および混貝土層



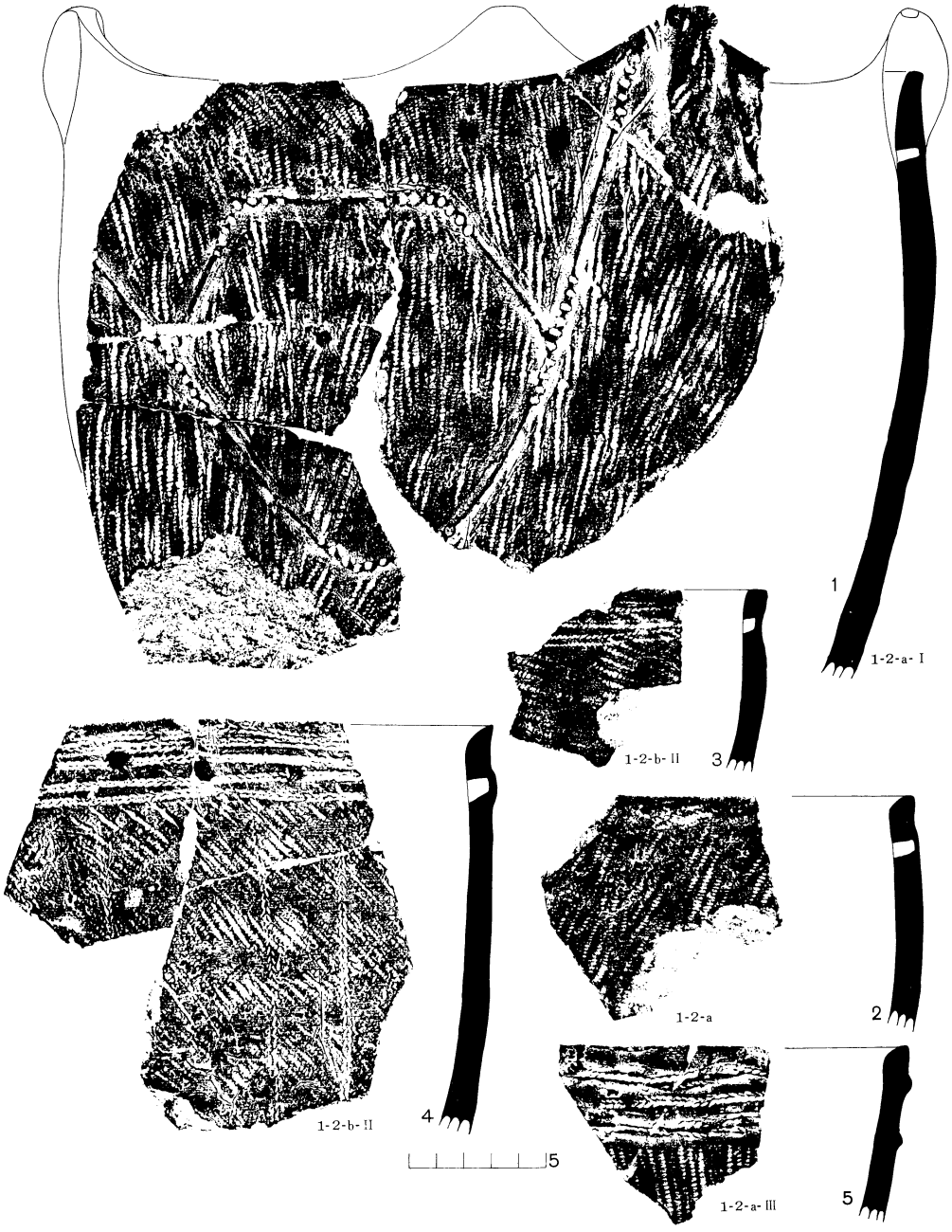
第56図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器18

1～13　表土および混貝土層

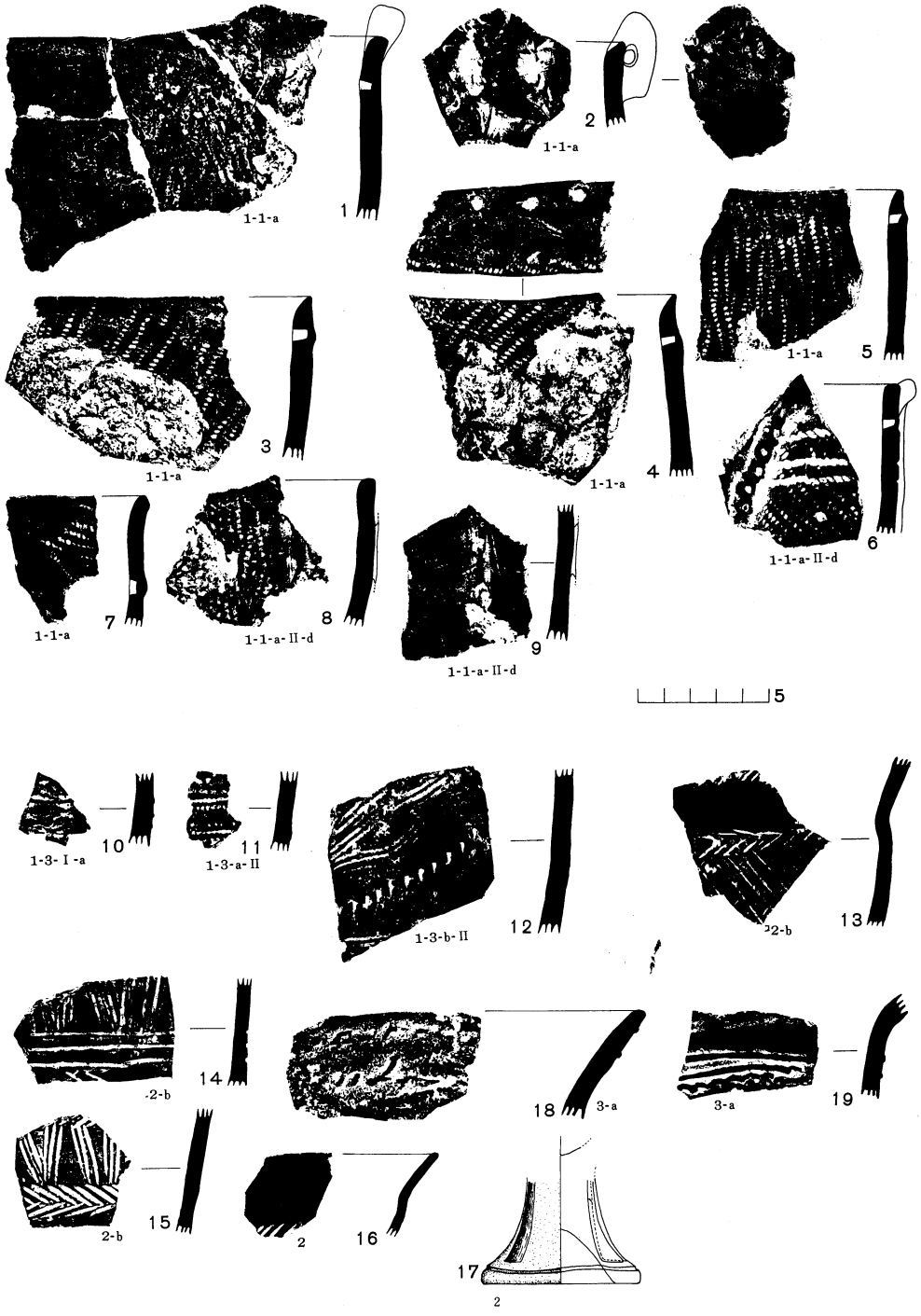


第57図　1970年　第1、第3トレンチ出土土器　19

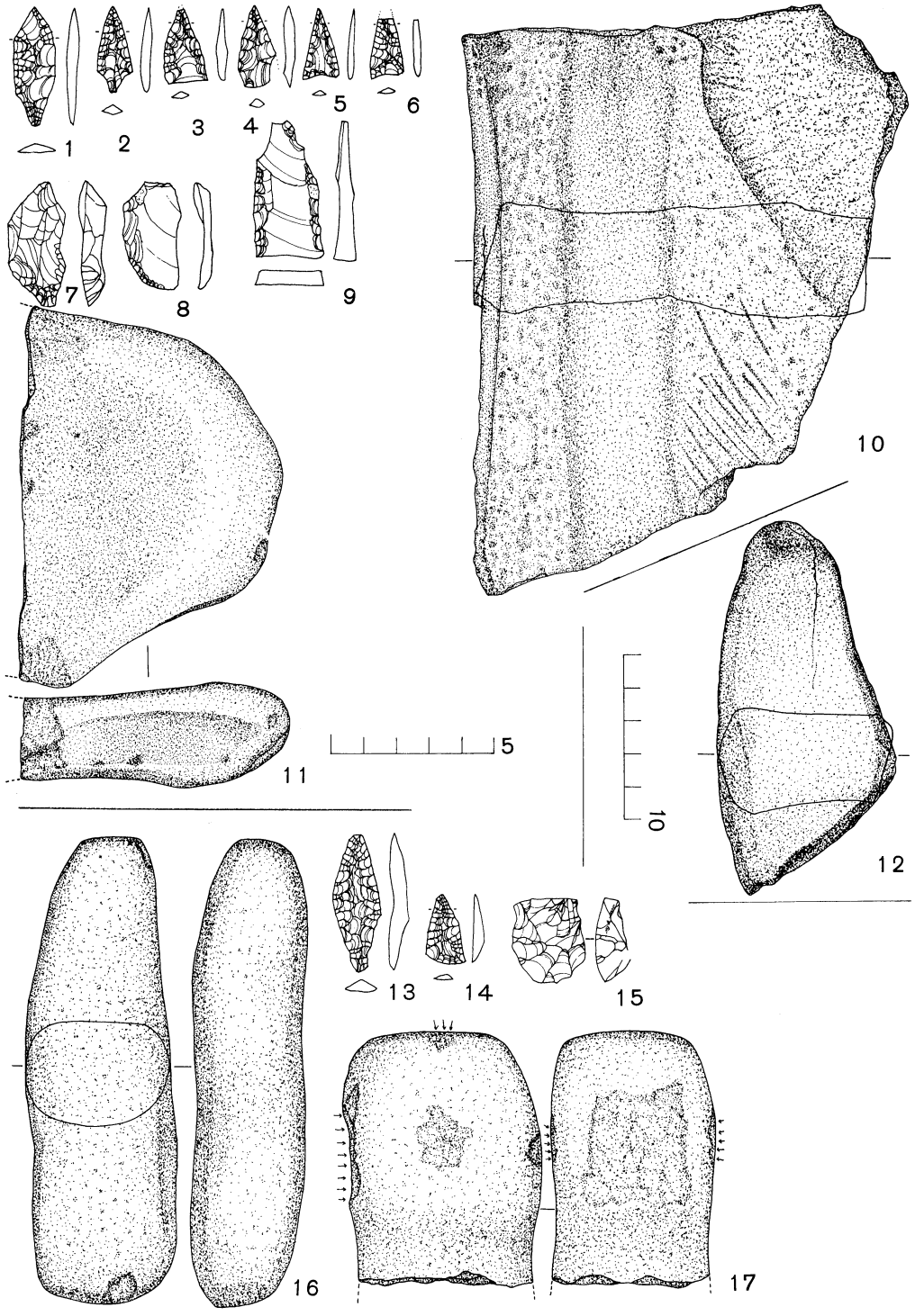
1～37　表土および混貝土層



第58図　1970年　第2トレンチ出土土器 1

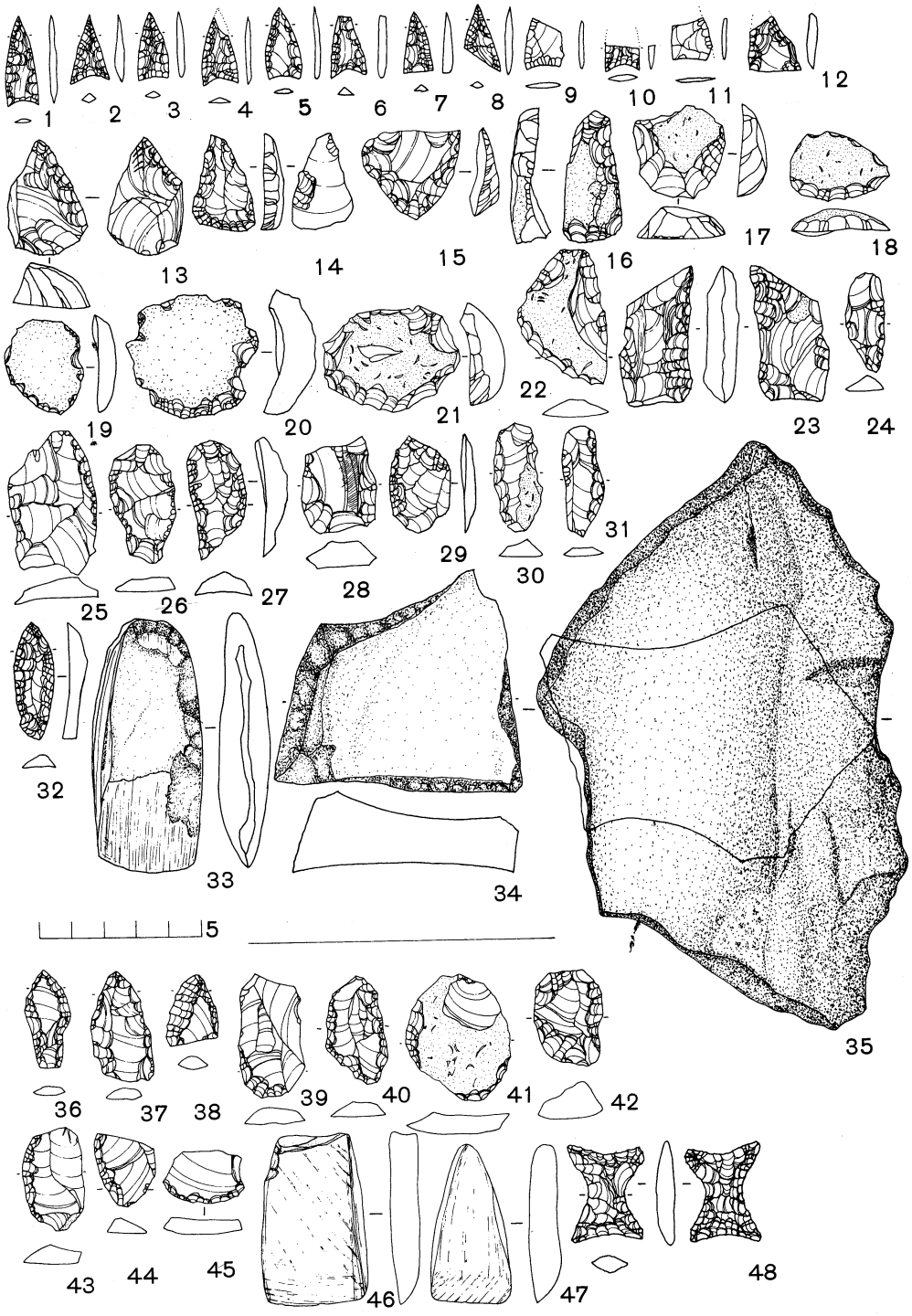


第59図　1970年　第2トレンチ出土土器　2



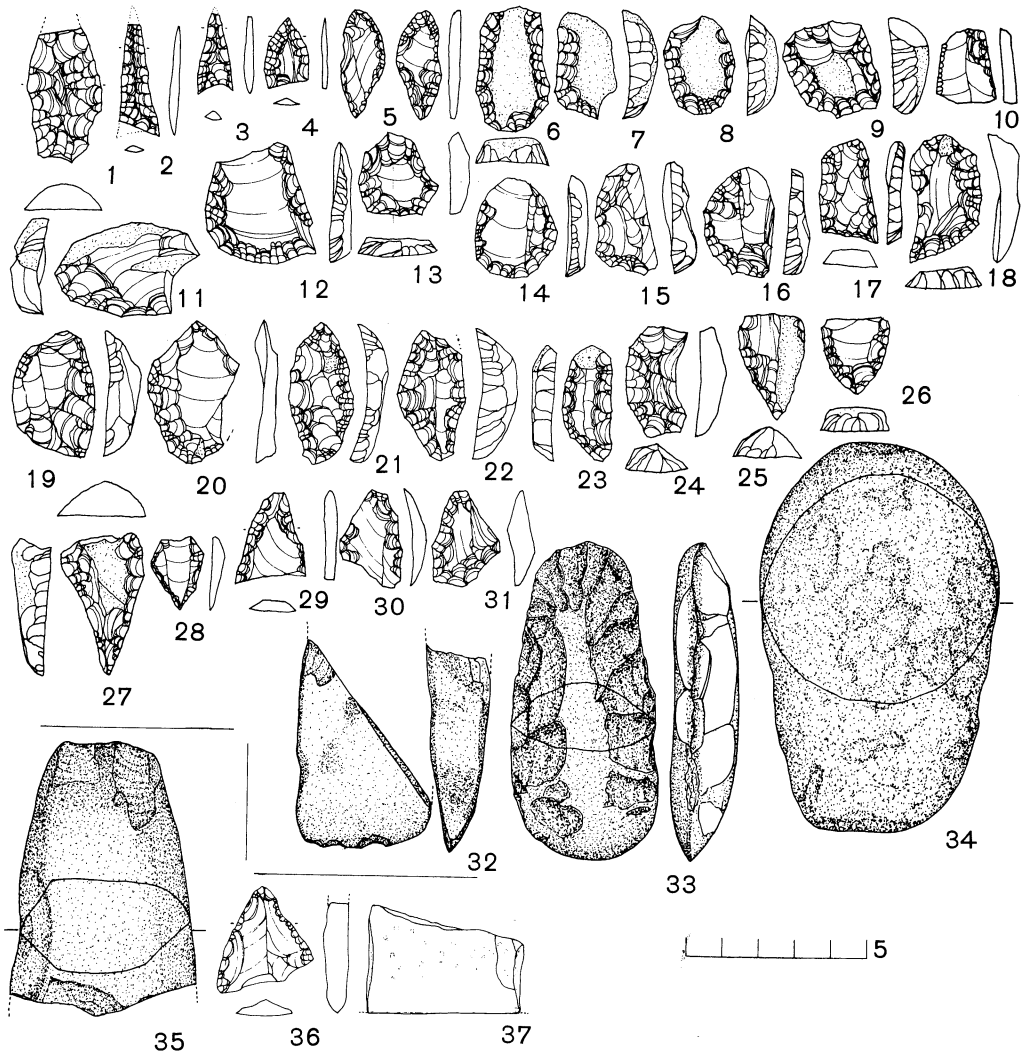
第60図　竪穴住居址出土石器

1～12　1号住居址　13～17　2号住居址



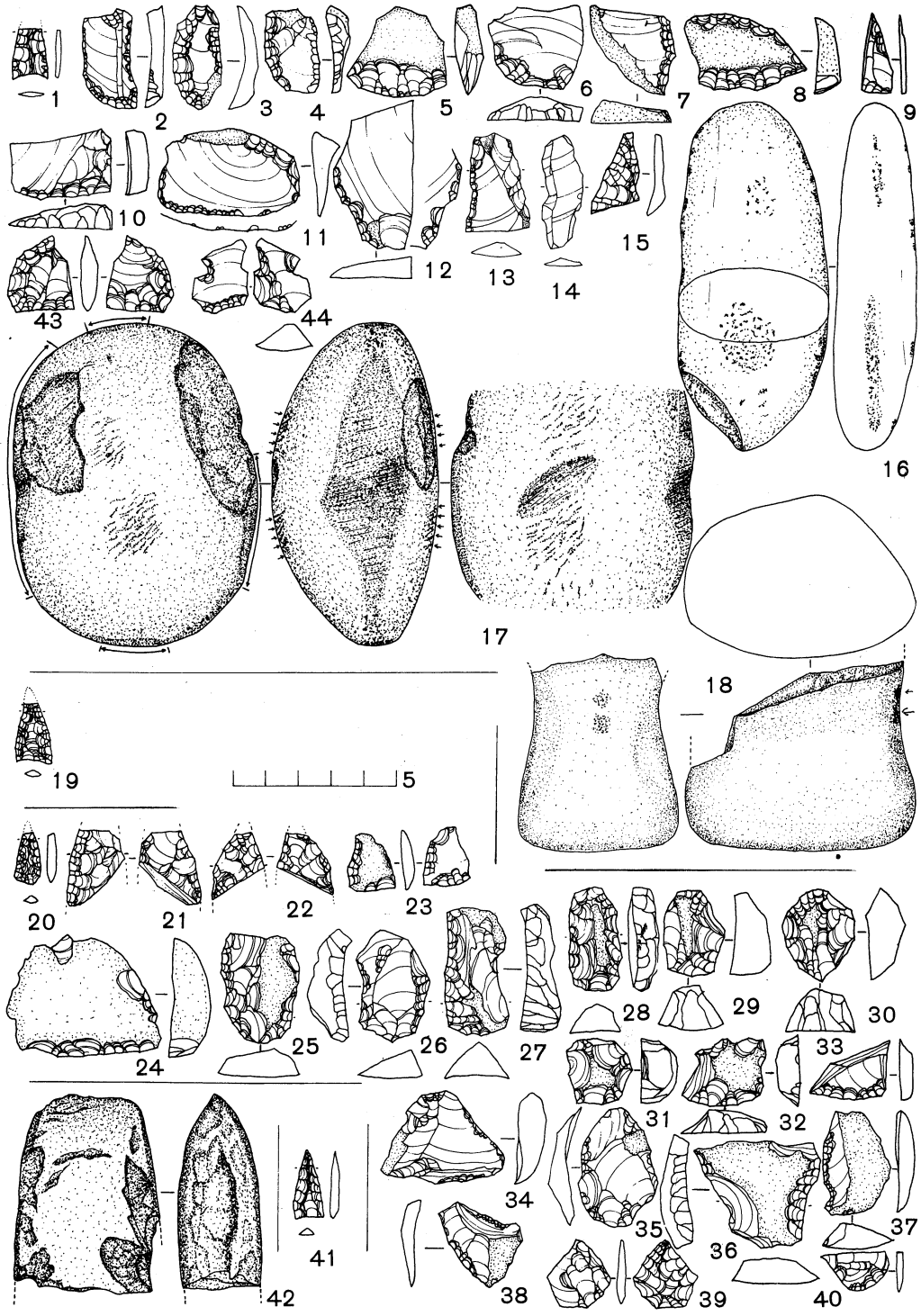
第61図　1965年　第1トレンチ出土石器　1
および表面採集石器

1～35　表土および破砕貝層
36～48　表面採集（夏堀氏採集）



第62図　1965年　第Ⅰトレンチ出土石器　2

1～34　純貝層中
35～37　泥炭層

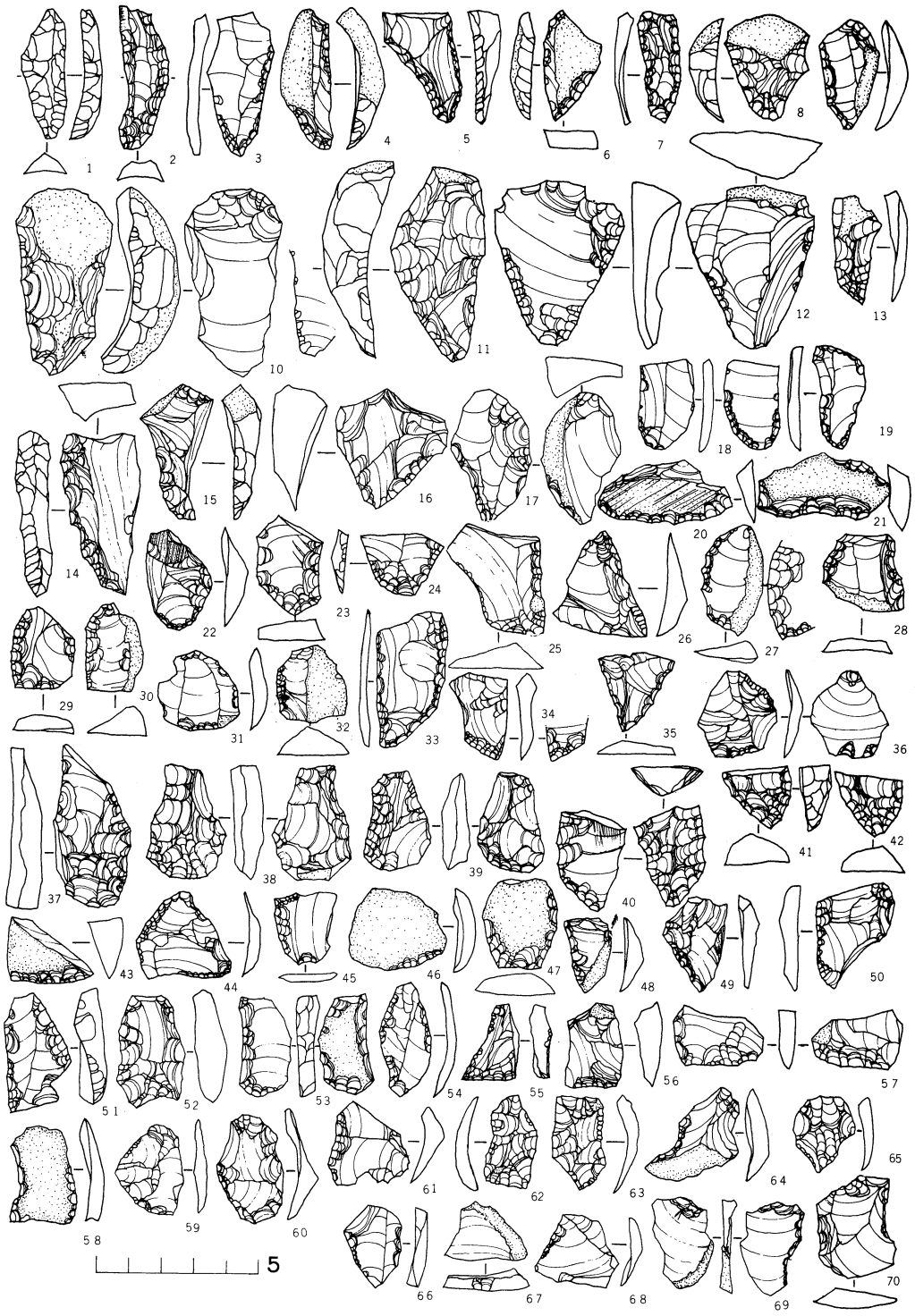


第63図　1966年　第1トレンチ出土石器

1～18, 43, 44 表土および破砕貝層
19　石組
20～40　純貝層中
41　魚骨腐蝕土層
42　黄褐色砂質土層

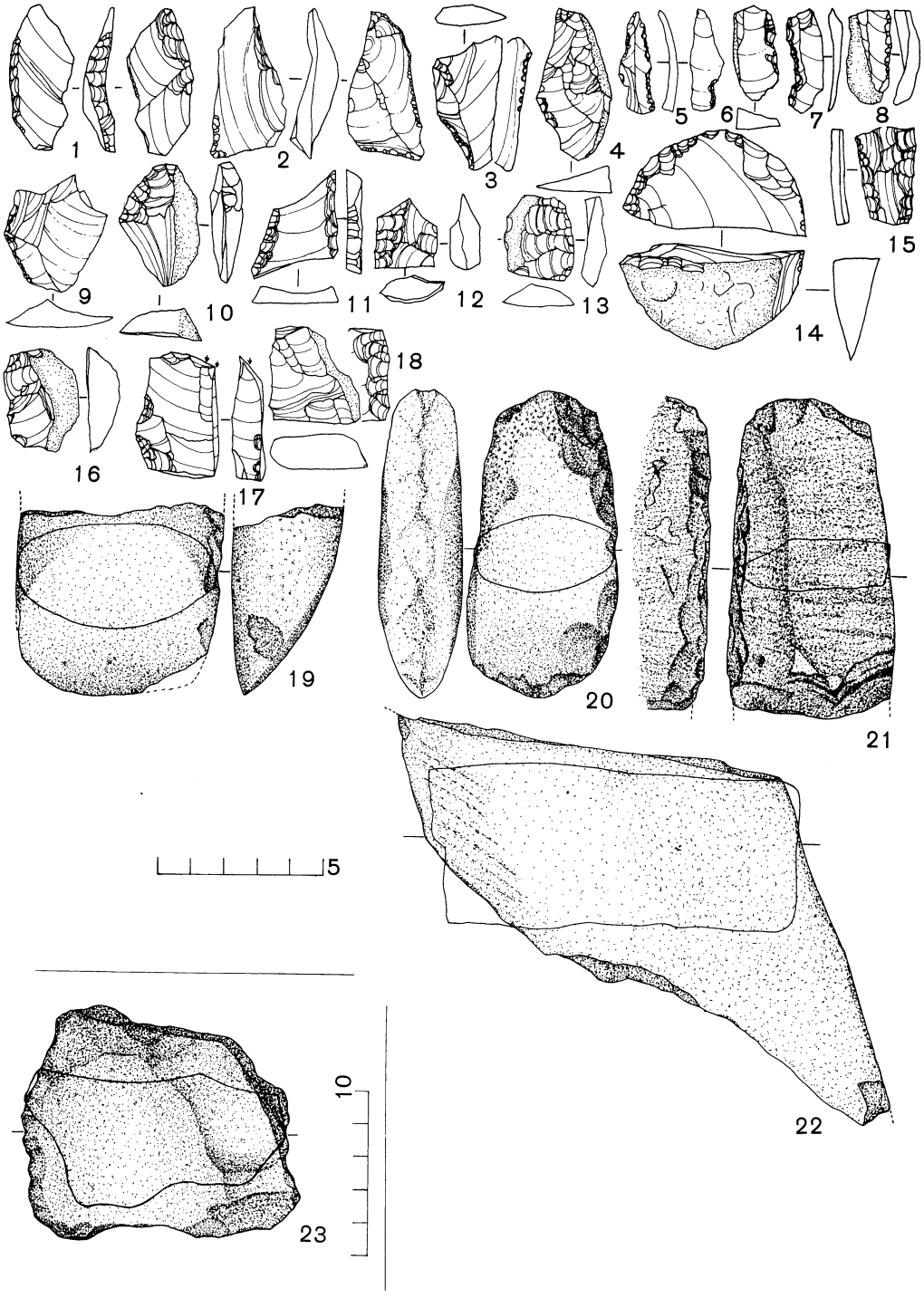
第64図　1966年　第2トレンチ出土石器　1

1～70　表土および破砕貝層



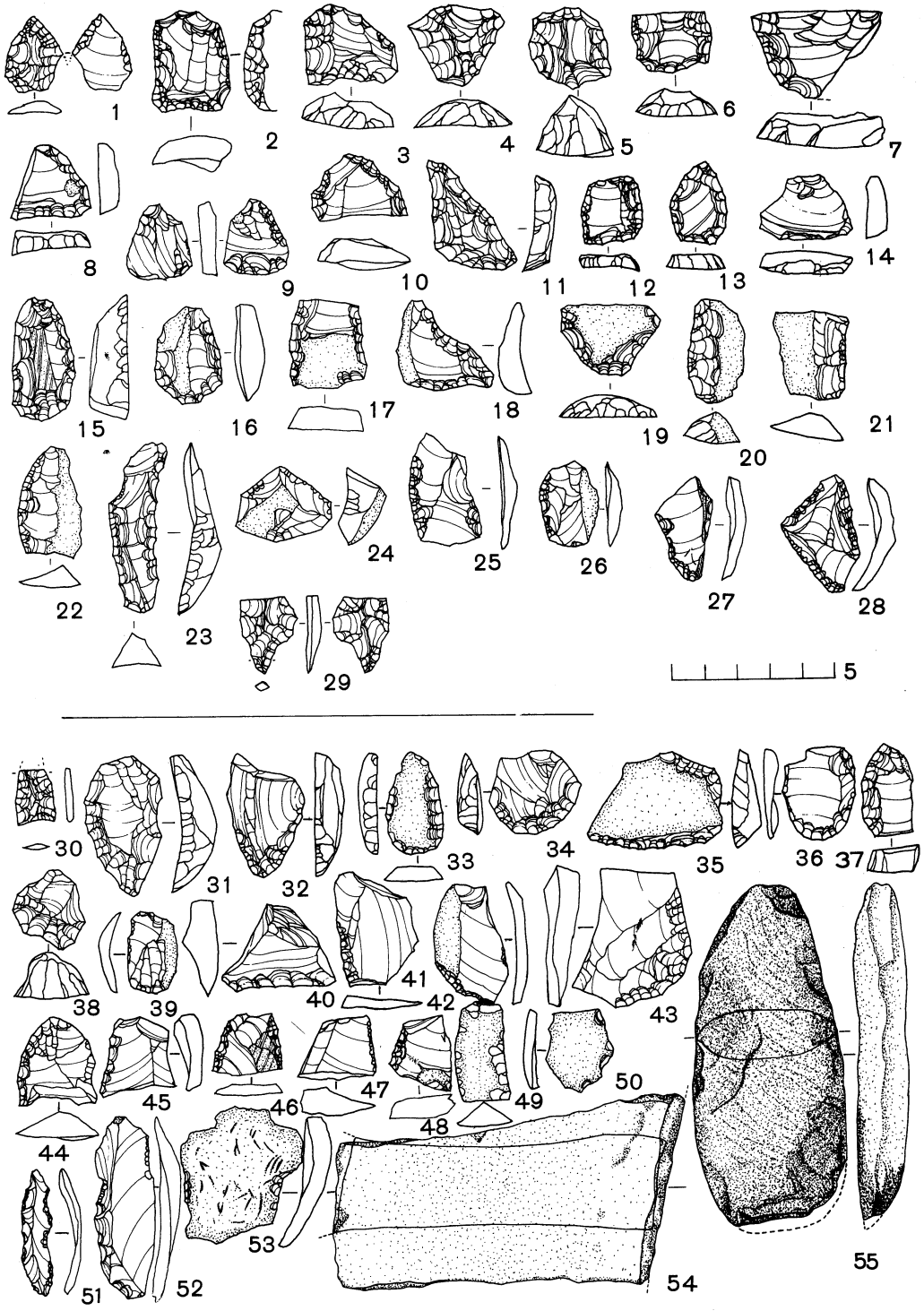
第65図　1966年　第2トレンチ出土石器　2

1～70　表土および破砕貝層



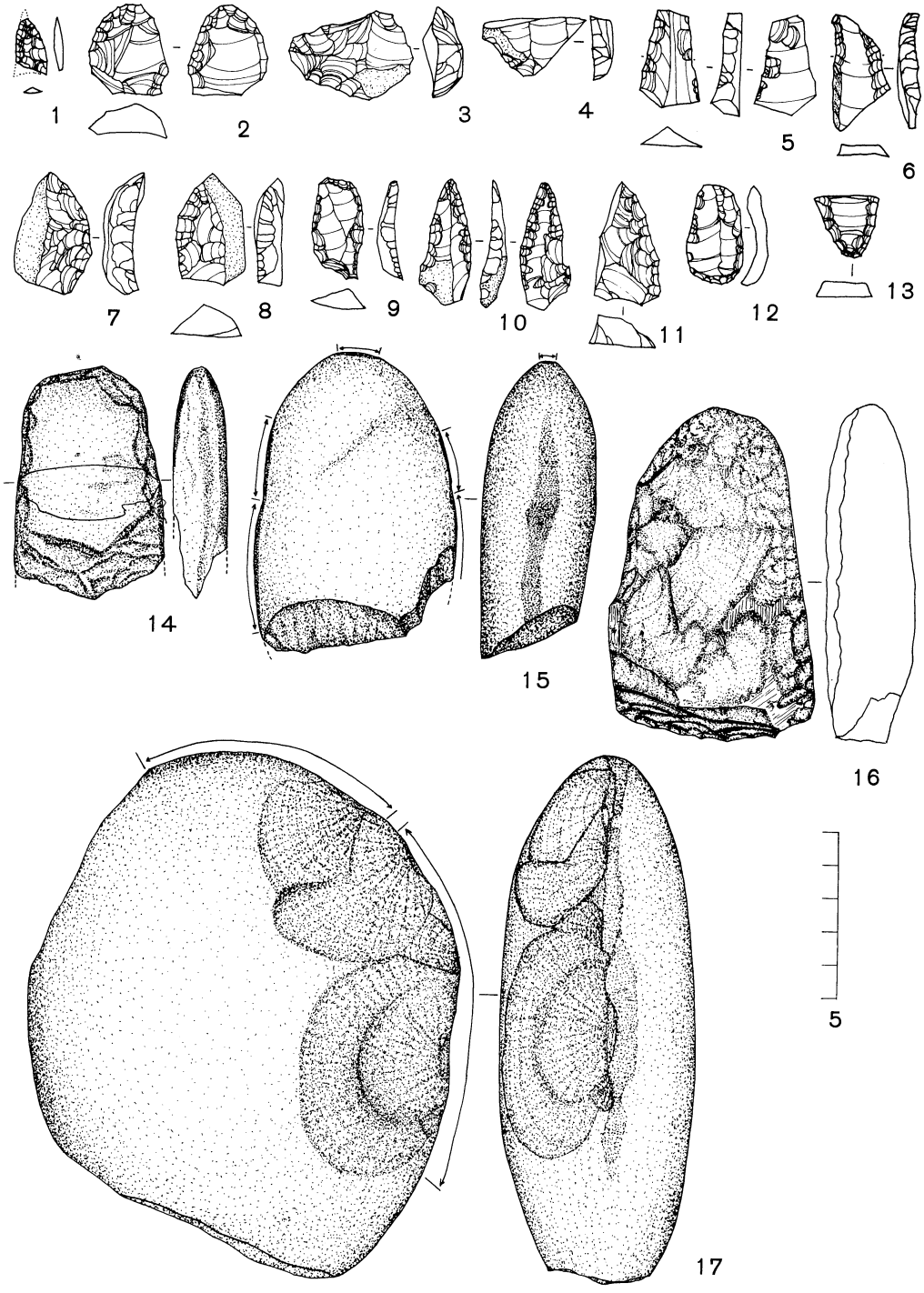
第66図　1966年　第2トレンチ出土石器　3

1～23　表土および破砕貝層



第67図　1966年　第2トレンチ出土石器　4

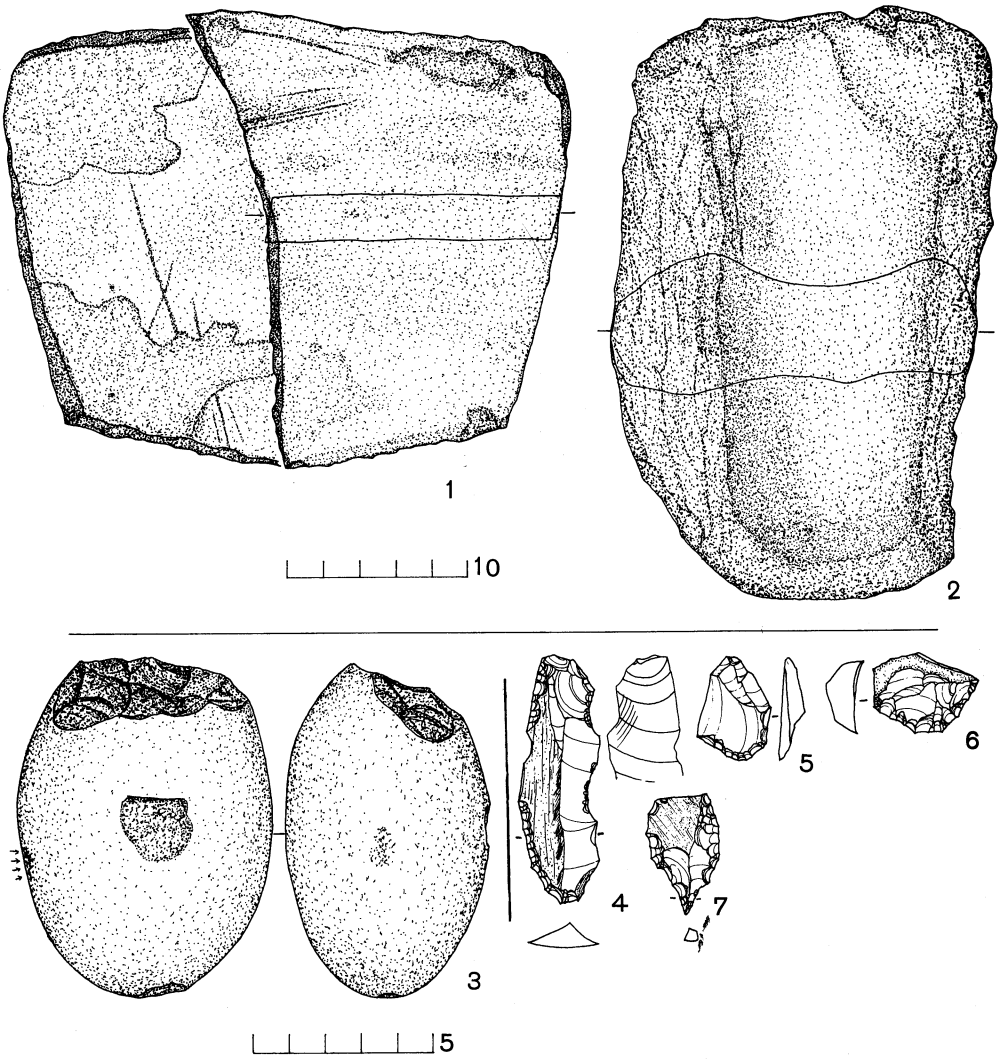
1～29　純貝層中　　30～55　魚骨腐蝕土層



第68図　1966年　第3トレンチ出土石器

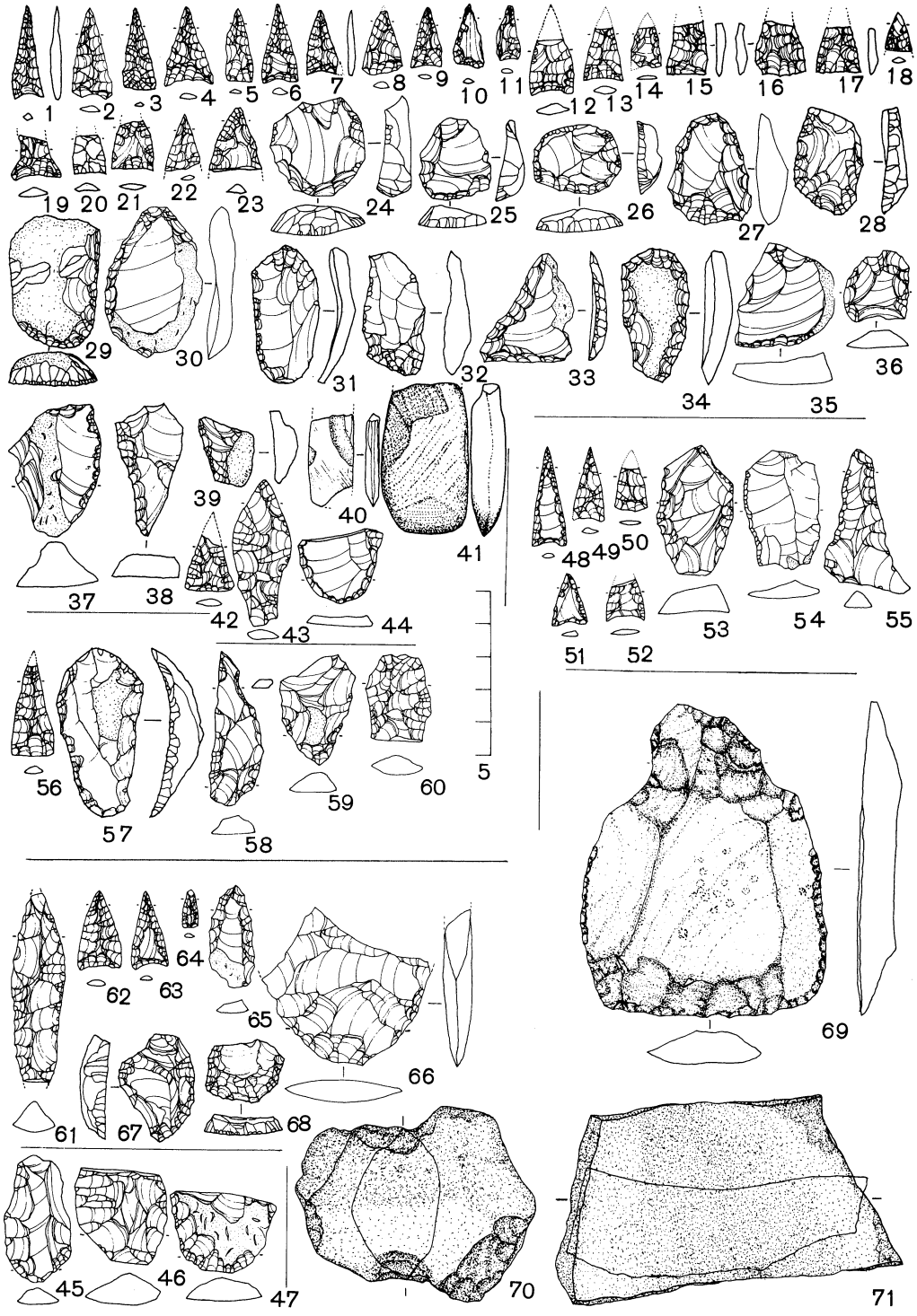
1～6，14～16 表土および純貝層中

7～13，17　　貝層下



第69図　1966年第1、第2、第3トレンチ出土石器

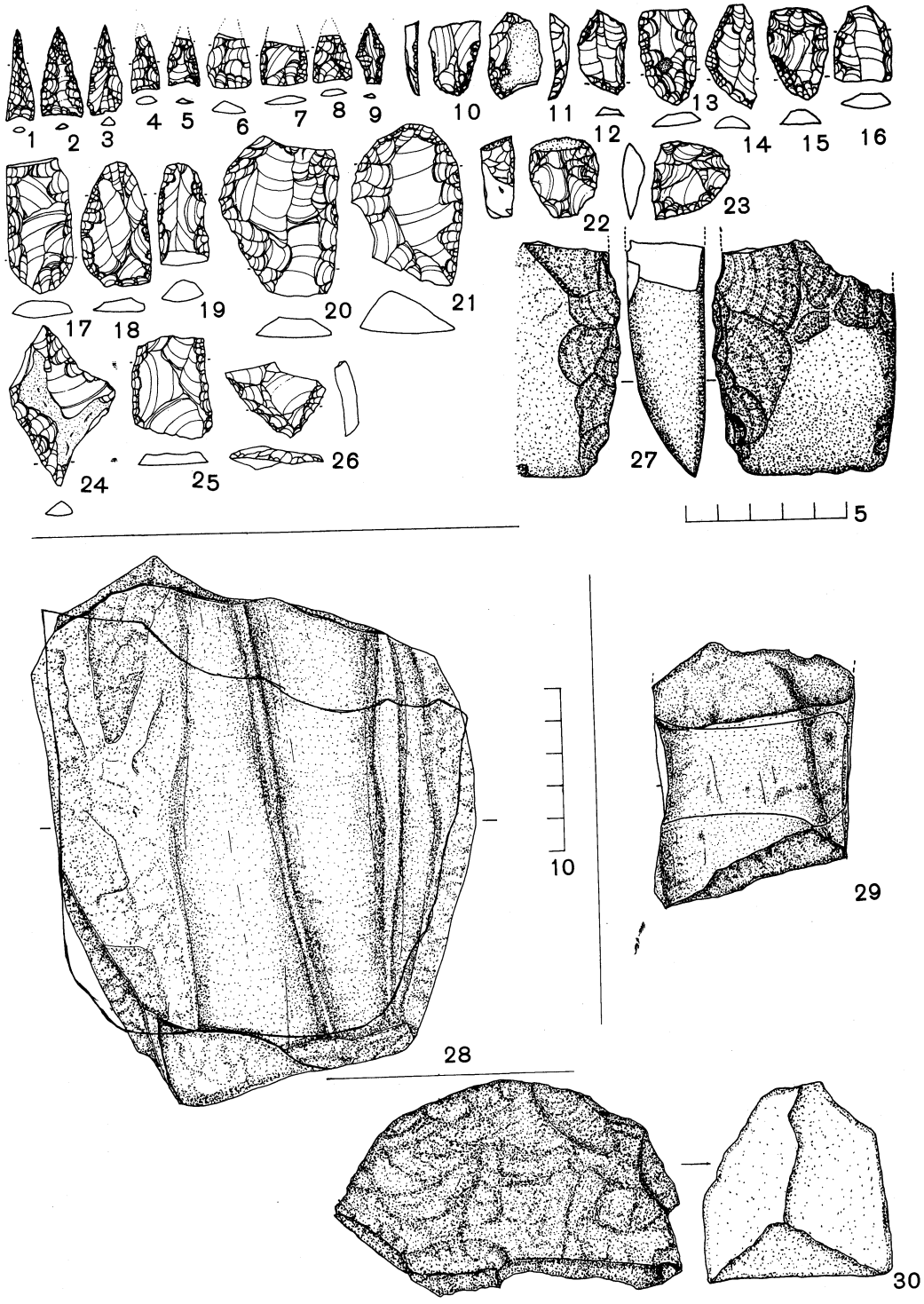
1、（第2トレンチ）魚骨腐蝕土層
2、3　（第3トレンチ）純貝層中
4～7　（第1トレンチ）黄褐色砂質土層



第70図　1970年　第1トレンチ出土石器

1～47　表土および混貝土層　　56～60　純貝層中

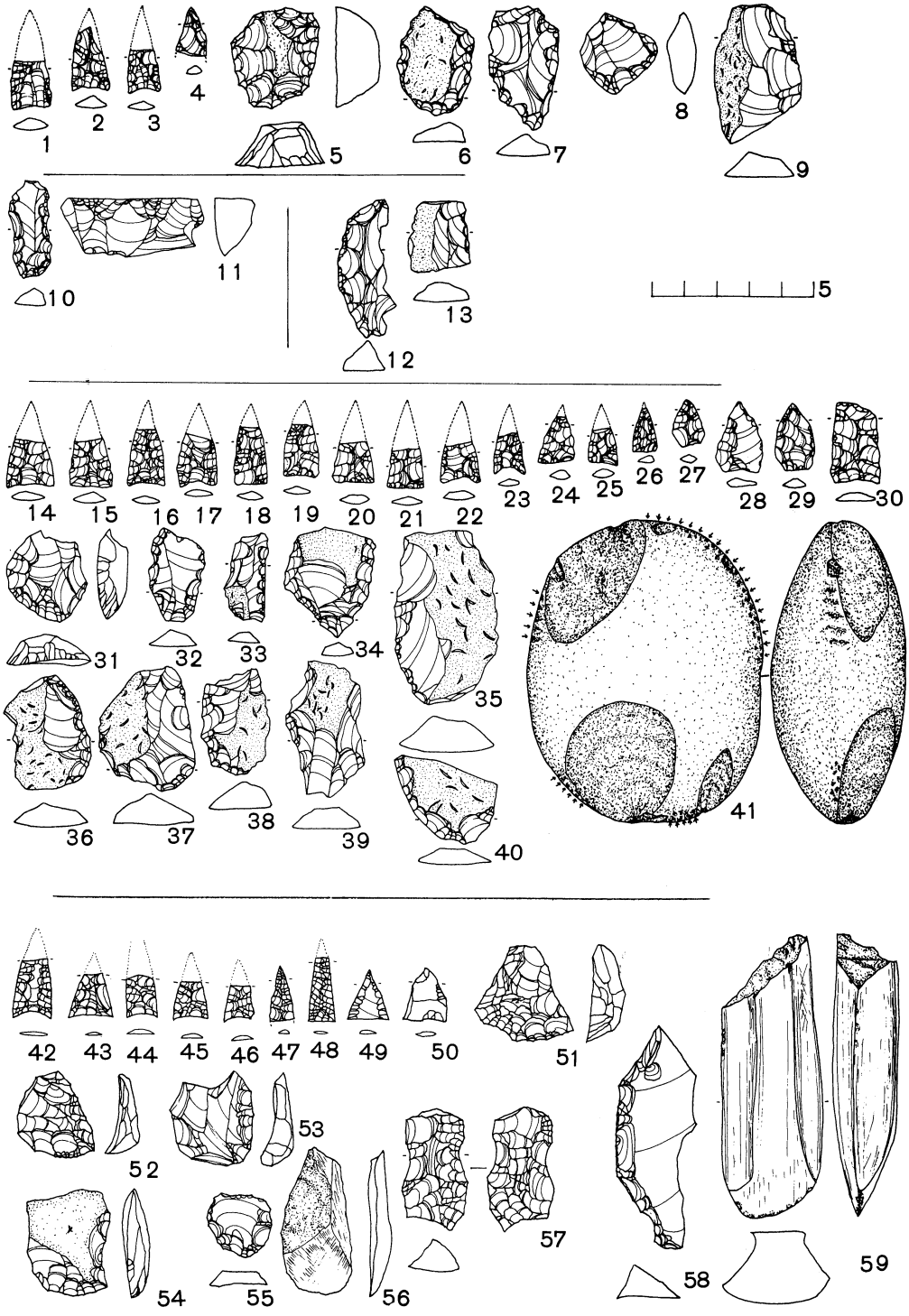
48～55　貝層上黄褐色土層　　61～71　魚骨腐蝕土層



第71図　1970年　第1、第2トレンチ出土石器

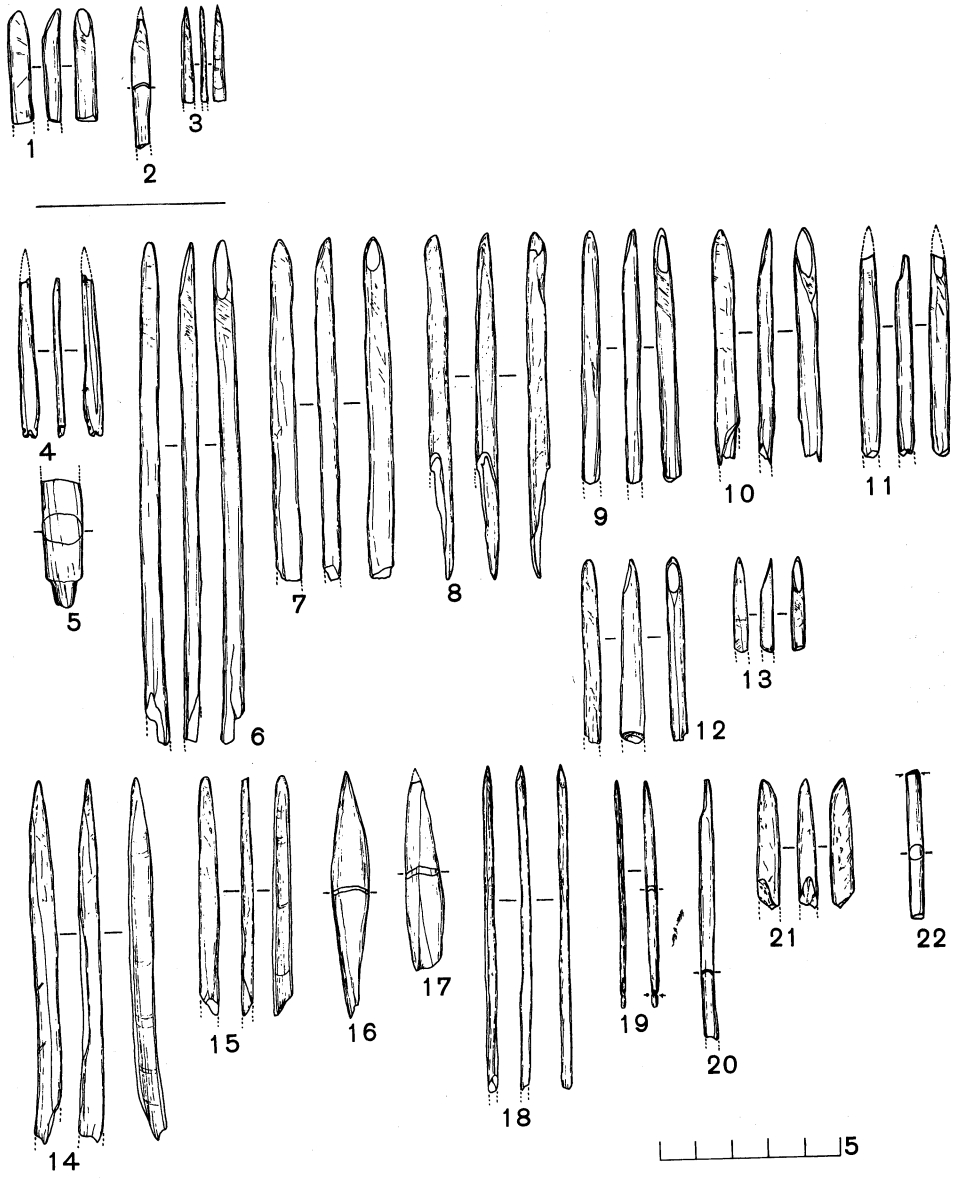
1～27（第1トレンチ）泥炭直上　28（第1トレンチ）貝層下住居址

29、30（第2トレンチ）泥炭直上



第72図　1970年　第2、第3トレンチ出土石器

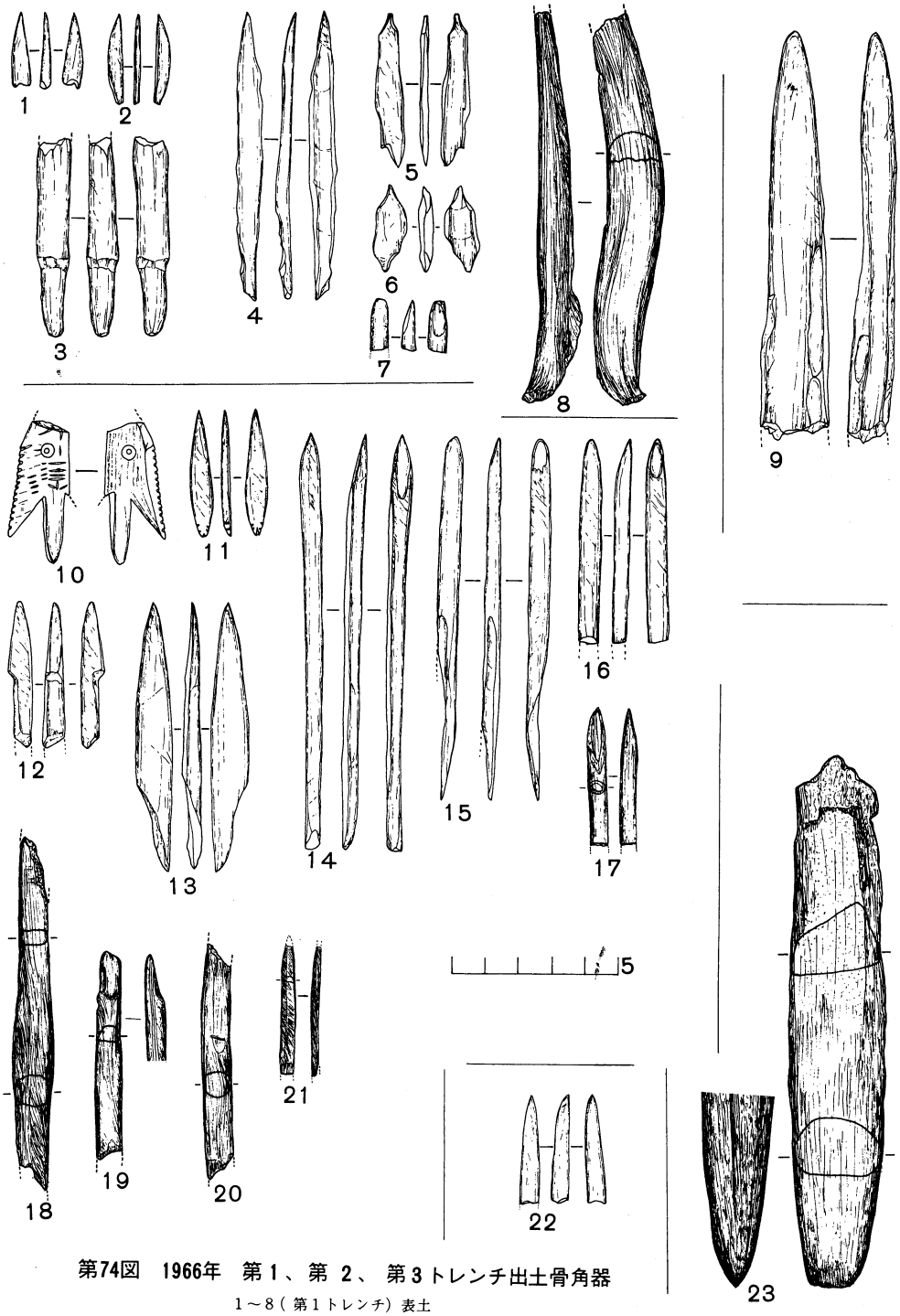
1～9　表土および混貝土層
10、11　貝層中
12、13　魚骨腐蝕土層
14～41　泥炭直上
42～59　（第2トレンチ）泥炭直上
1～41　（第3トレンチ）



第73図　1965年第1トレンチ出土骨角器

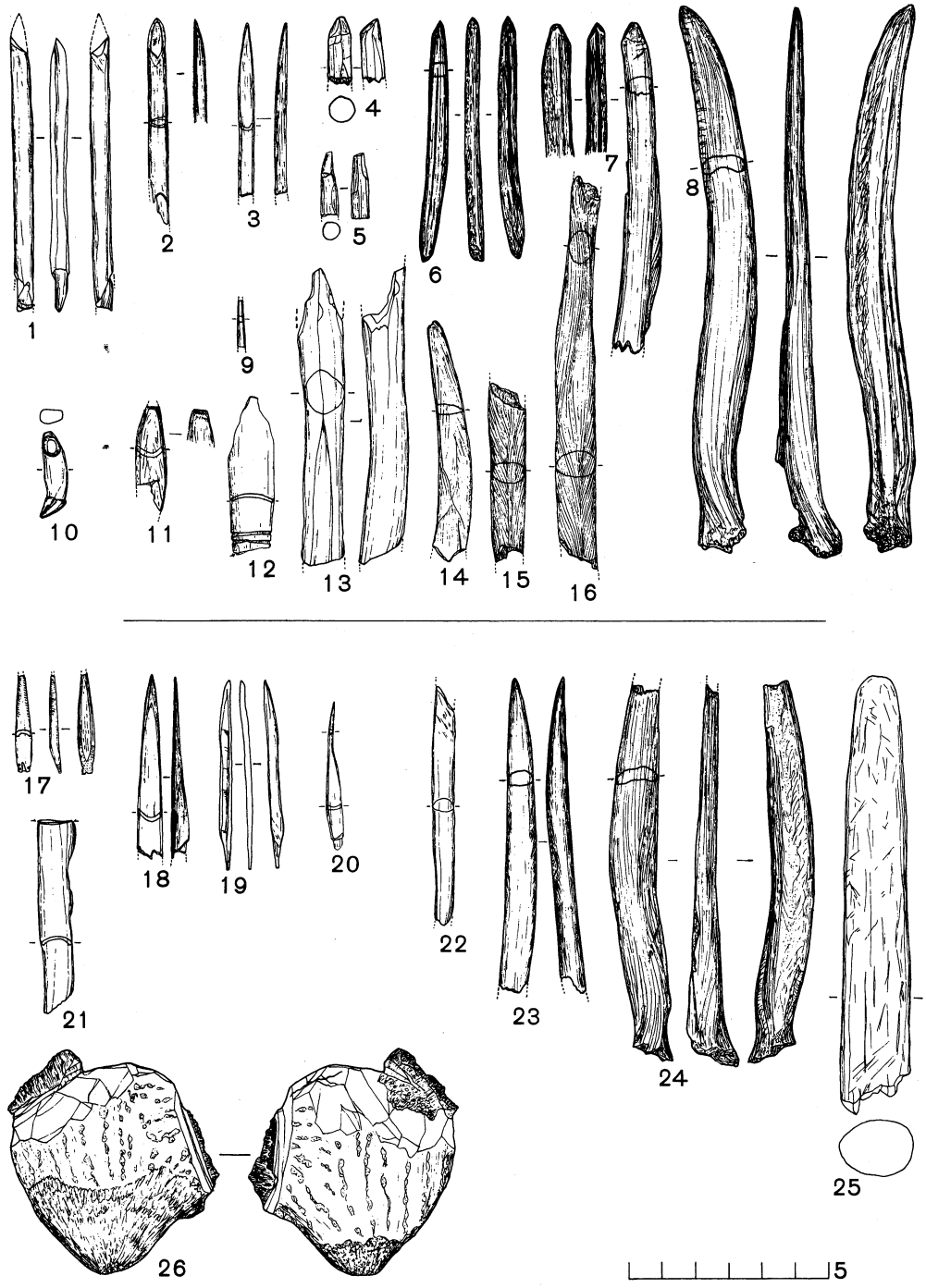
1～3　表土

4～22　純貝層中



第74図　1966年　第1、第2、第3トレンチ出土骨角器

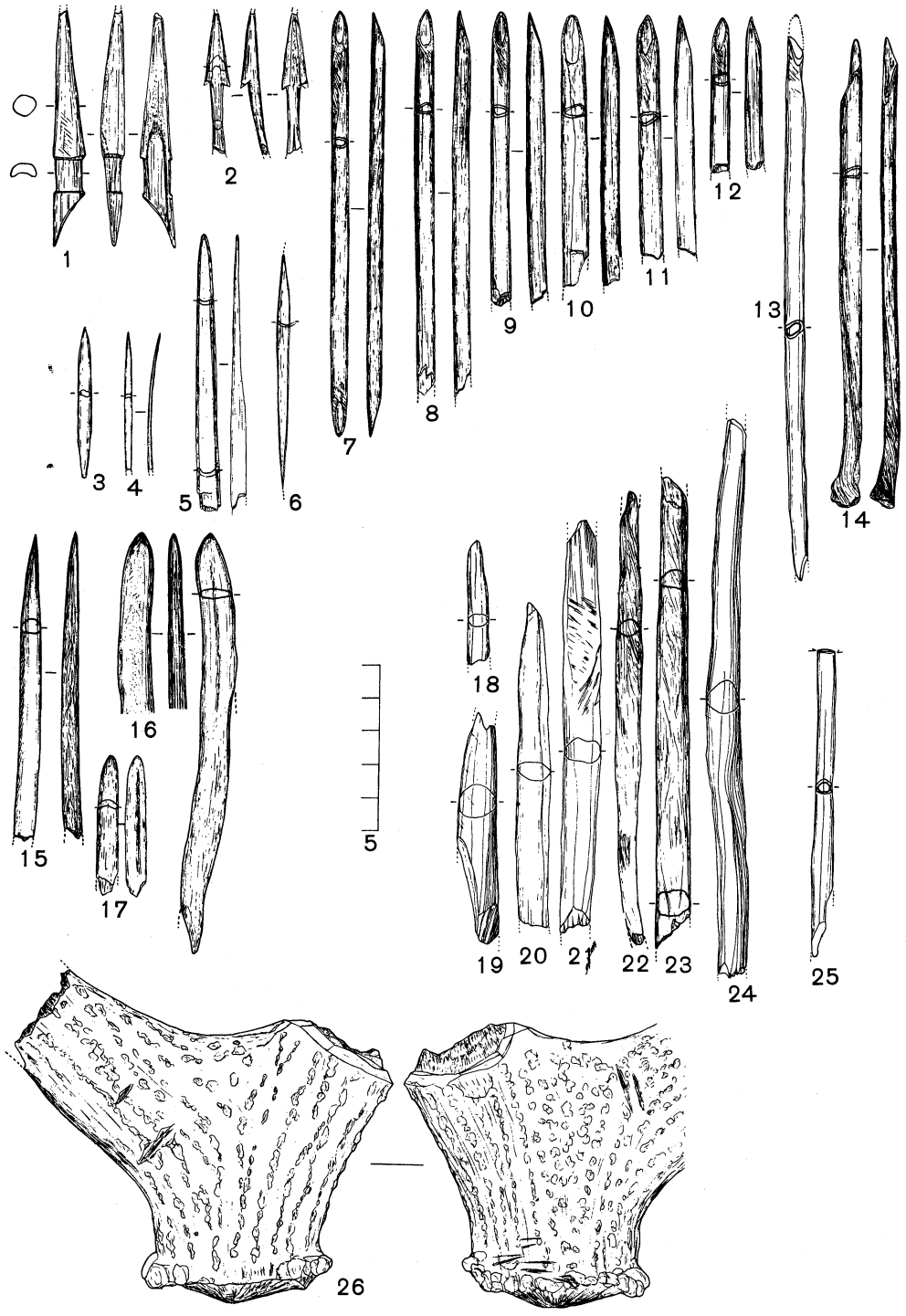
1～8（第1トレンチ）表土
9（　〃　）魚骨腐蝕土器
10～21（第2トレンチ）表土
22（　〃　）純貝層下部
23（第3トレンチ）純貝層中



第75図　1970年 第1トレンチ出土骨角器

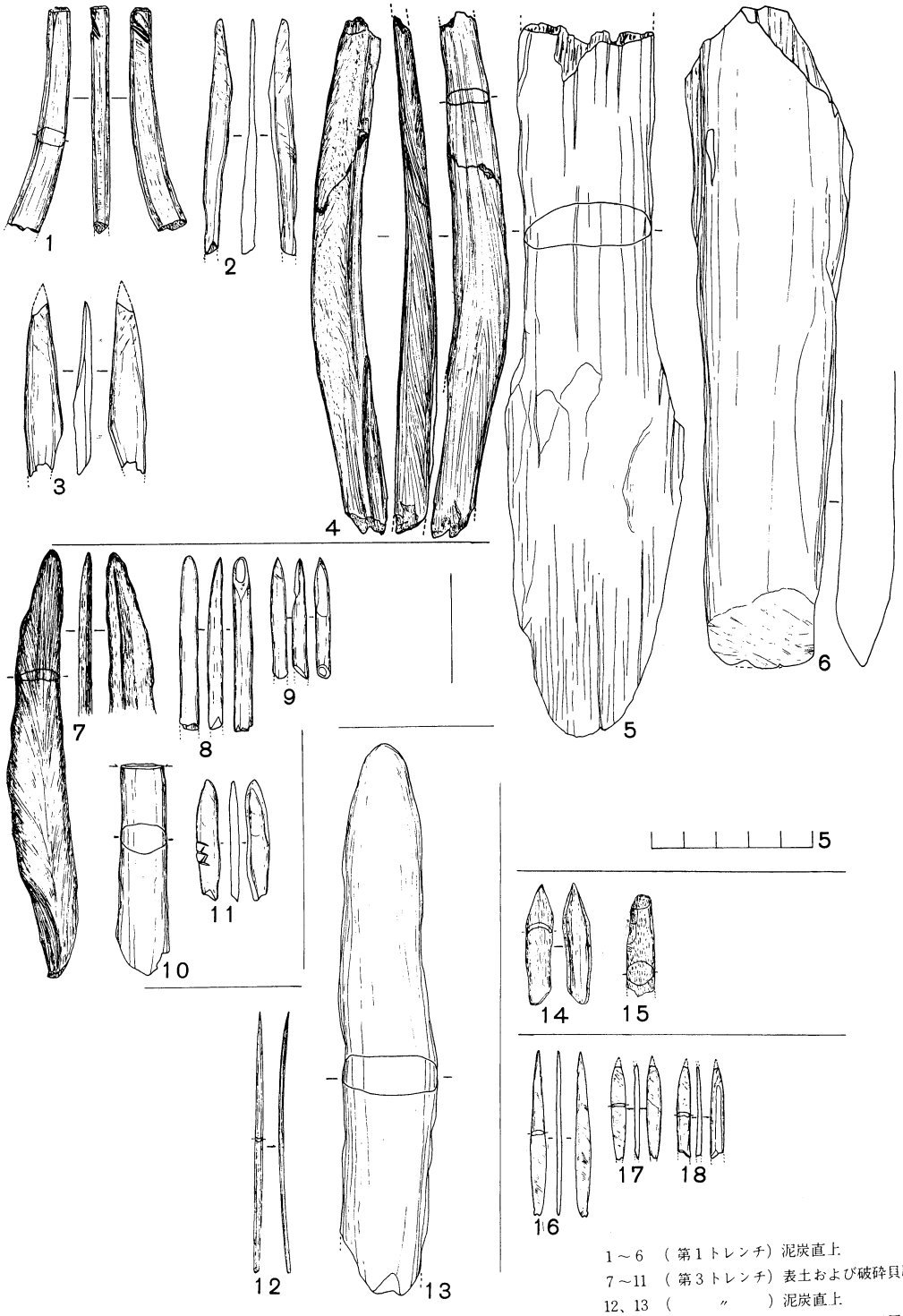
1～16　表土および混貝土層

17～26　純貝層中



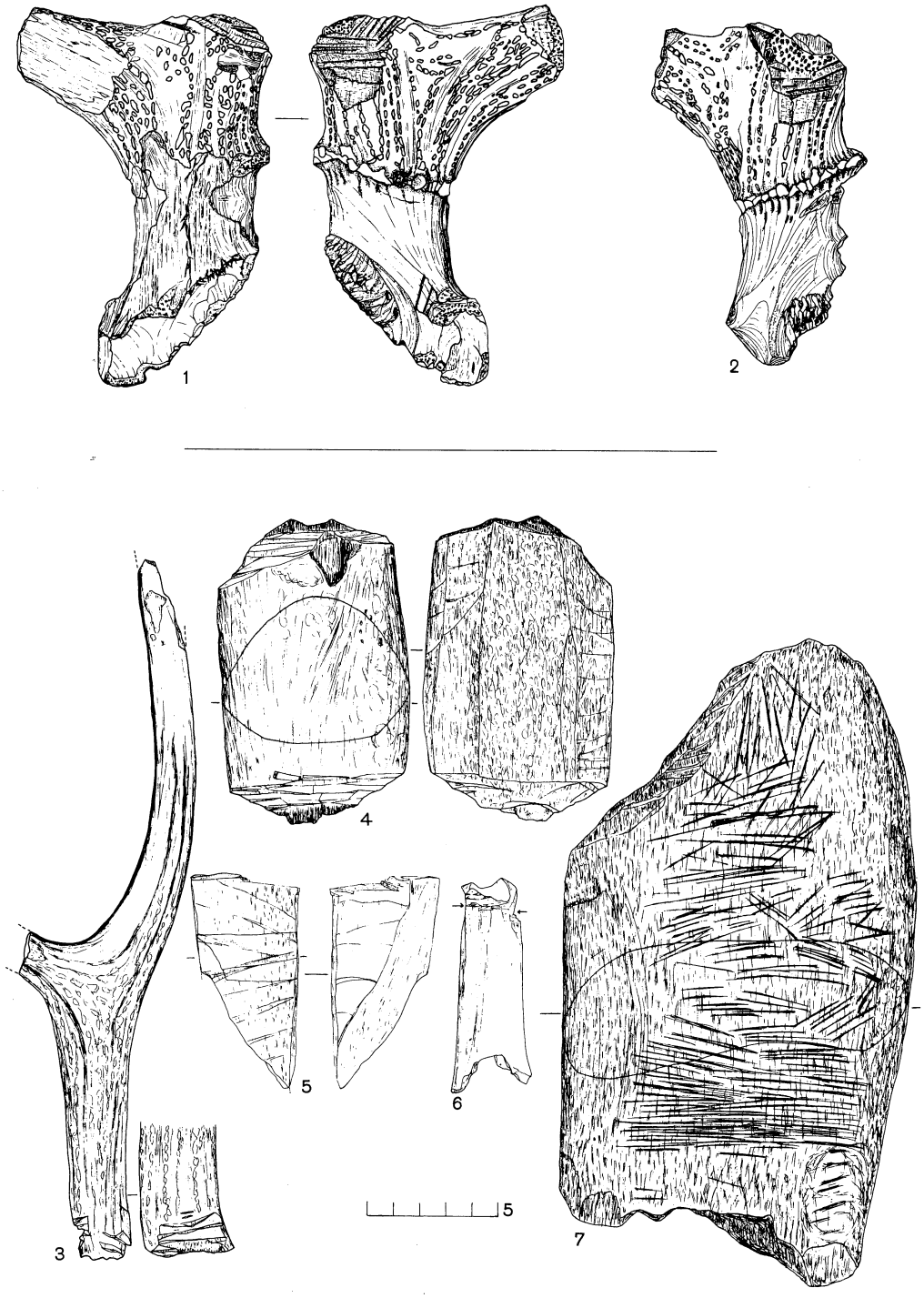
第76図　1970年第1トレンチ出土骨角器　2

1～26　貝層下黄褐色土および魚骨腐蝕土層



1～6　（第1トレンチ）泥炭直上
7～11　（第3トレンチ）表土および破砕貝層
12、13　（　〃　）泥炭直上
14、15　（第2トレンチ）表土および撹乱層
16～18　（　〃　）泥炭直上

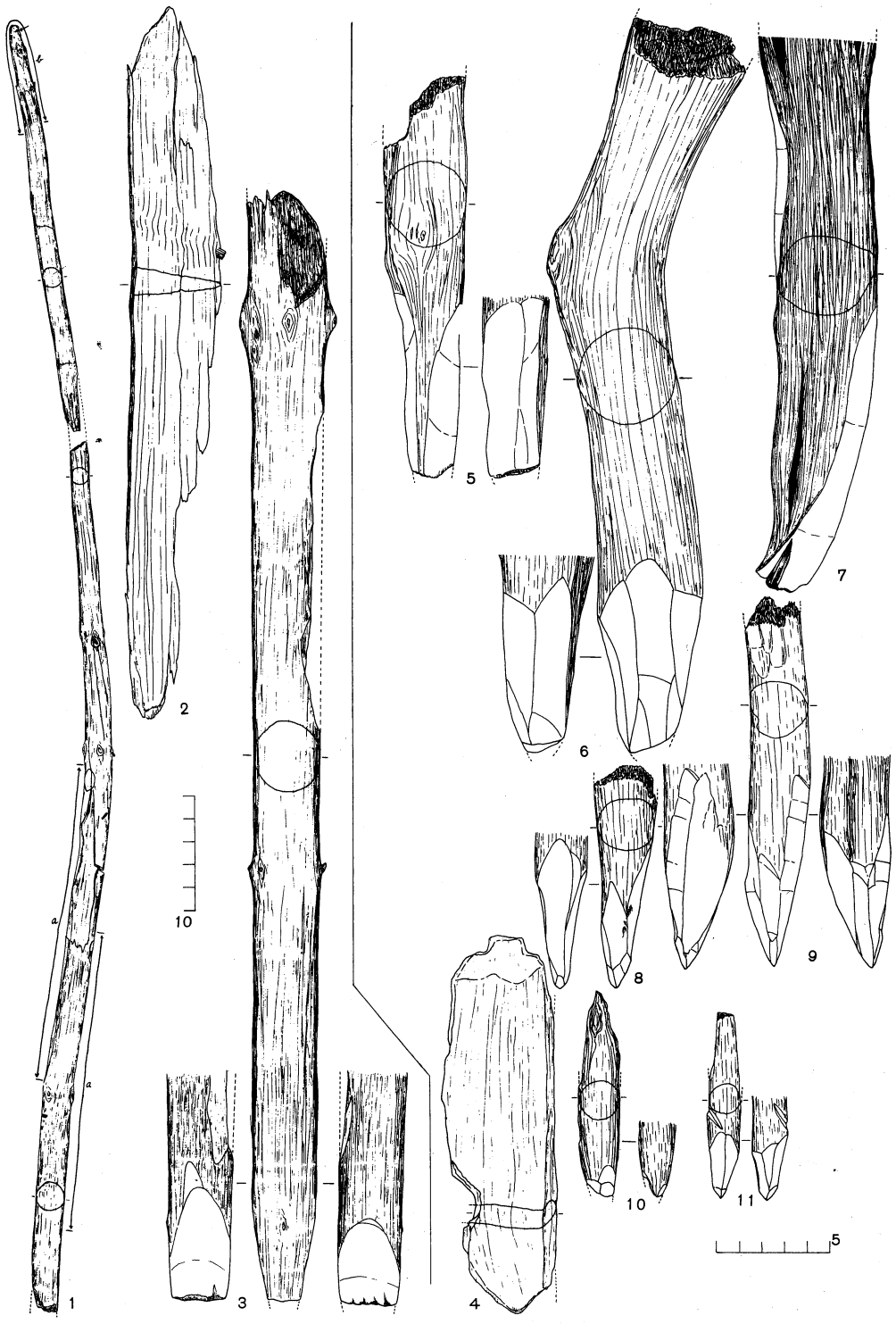
第77図　1970年　第1、第2、第3トレンチ出土骨角器



第78図　第2号住居址および石組出土骨角器

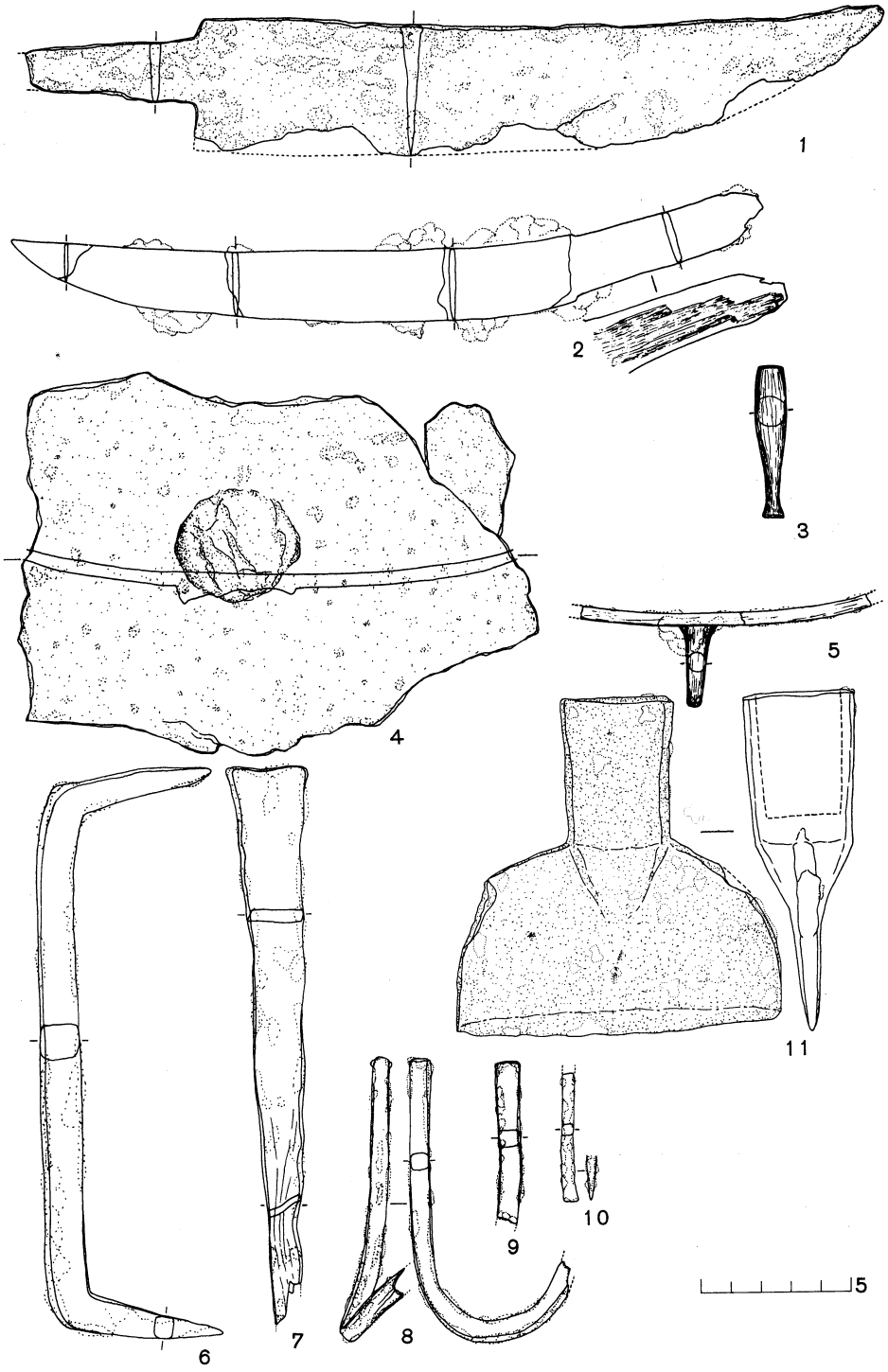
1～2　2号住居址

3～7　石組



第79図　出土木製品

1～4、7　（1965年　第1トレンチ）泥炭層
5、6、8～11　（1966年　第2トレンチ）泥炭層



第80図　出土金属器

1　（1970年　第1トレンチ）表土　　2　（1970年　第3トレンチ）埋葬人骨伴出
3　（1965年　第1トレンチ）破砕貝層　4、5（1970年　第3トレンチ）表土
6～11（1号住居址）表土

付，厚岸湖と湖岸の遺跡付近の地形

岡崎　由夫

厚岸湖は高度100m 内外のやや平坦な台地にとりまかれている一大潟湖である。この台地は白亜紀層を侵食した隆起海成段丘（根室面）、もしくは海食台である。厚岸湖と厚岸湾が占める低地は、白亜紀層のうち軟弱な泥岩地帯が、河川と海波の侵食で巾広く削られて原形がつくられたのである。

この原形をもたらしたのは、約２万年前のウルム氷河期の海面最低下による河食である。このことは、湖口付近の底質（＝〝沖積層〟）が深さ30m 以上に及んでいることで裏付けされる。この時期の河谷が湾口と湖口を狭く深く刻んで開口したものとみられる。

その後、沖積世のいわゆる「縄文海進」で沈水し、また沈降して一層水域を広げて現状をもたらしたのである。

1．厚岸湖

厚岸湖は周囲25.5km、面積31.7km²の不規則な円形を呈した汽水湖で、西の湖口の約500m の狭い水路で、南に広がる厚岸湾に通じている。本湖の水深は低潮時で２m 以下、潮流の強い湖口付近では２～７m であり、最深8.3m と記録されている。また、北西部の別寒辺牛川河口付近でも５m 以上の深部がある。

島と底質　本湖には多くの低平な小さい島を浮かべているが、低潮時には大小40以上の島が数えられる。しかし、高潮では多くは水没し、やや高いカキ島、弁天島など13島のみが、わずかに水面上に残っているに過ぎない。

島々は二群に分れる。一つはカキ島など湖口の北部にほぼ東西に並ぶ30余の島々で、島上で東西600m に及ぶが、巾は100m に満たない。

他の一群はその南部に湖口をはさんでほぼ東西に並んだ２島で、その一つに弁天島がある。

これらの島々は、砂を含む泥質物からなり、厚さ 20～30cmのカキでおおわれ、いわゆるカキ礁をなしているが、もともと以前からあった自然の島である。カキ礁は浅い湖底からわずか２m 余の高さに過ぎない。

湖の底質はほとんどが泥（シルト）だが、細粒砂質底も湖西部や湖口から東へ、島々をつつんで張り出して分布している。これら島々の下には、白亜紀層の岩盤が比較的浅く横たわっている。

この島をつくった土砂の堆積は、上述の底質と配列からみて、周辺の河川、とくに別寒辺牛川から湖心へ流れてきた泥を含む水と、満潮時の潮流で砂質物を運ぶ海水が、もっとも激しく接して停滞しているところにできたものとみなされる。

貝類　島々にはカキが表面にのり、カキ殻の間にはたくさんのエゾタマキビが着生している。また、干潮時に水面上に露われる礁上の泥質物部にはホソウミニナが多く、礁のまわりの底質下10cmより浅い部分にアサリが棲息し、これにまじってヒメシラトリガイもみられる。オオノガイはこれより深く、底質下20～30cmにもぐっている。

貝類は島ばかりでなく、湖北部中央の沿岸にアサリ、オオノガイが、東部のトキタイ川河口にはアサリ、オオノガイ、ホソウミニナが生息し、また、ここの底質下にはヤマトシジミの自然貝層もみられる。

これら貝類は、本湖北岸地帯に分布する大小の貝塚にみられる。貝塚は概してカキを主に、アサリとオオノガイを伴っている。このほかホタテやウバガイもまじるが、両者は厚岸湾に現生する。また暖海系のアカガイもみえて、貝塚築成の時期に海況が変化していたことを暗示している。

注入河川と湖岸の段丘

本湖へ注ぐ河川は、北西部に河口をもつ別寒辺牛川が最大で、本川の河口付近では尾幌、大別、チライカリベツの三川を集めている。東部にはトキタイ川とその南に東梅川、南部にイクラウシ川がある。

上記の諸川の下流部の標高５ｍ以下には、やや広く、泥炭湿地が横たわるが、別寒辺牛川河口では三角州状の泥炭地が発達する。泥炭の生成は続縄文期前から始まり、また多少沈降したことを教える。

湖のまわりには、湖岸に平行したり、また、小沢沿いに低い段丘様地形が巾狭く、また短かく、点在的に分布する。この段丘様地形は湖面上１ｍと３ｍの高さのものと、５～６ｍと10ｍのものが分布し、このうち前二者の発達は悪く、５～６ｍ段丘がもっともよく分布している。５～６ｍ段丘は巾５～10ｍであるが、ときには20ｍ（東梅付近）を有し、延長は最大100ｍ、多くは10～50ｍで切れる。10ｍ段丘は巾10ｍ内外、延長は10～50ｍが多いが、発達は悪い。これらは主に泥質物から構成される。

これら段丘様地形は散在的だが、厚岸湖の周囲ではいたるところで認められ、湖岸段丘とみてよい。かって湖面がこれらの面まで高まっていたが、湖面の低下、もしくは地盤の隆起で形成されたとみなせよう。

貝塚　湖面の上昇を示すものとして、湖北部の別寒辺牛川下流付近に３貝塚がある。このうち、縄文中期（北筒式）で海水棲貝を含む大別川河口北岸の「オオベツ（大別）貝塚」と、尾幌川河口南岸台地の「尾幌別貝塚」がある。また、オホーツク式土器を伴出するチライカリベツ川河口南岸には「二股貝塚」がある。

貝塚は、北岸の神岩の東西や、湖の西岸（真竜～尾幌川口）に17ヶ所知られているが、上述した段丘面上にも小規模にのせていることがある。また、東岸の東梅付近にも３ヶ所以上存在する。これらは続縄文（前北式）時代のもので、いずれもカキを主体としている。

2．厚岸湖の変遷

次に、上述した地形やそれに関連する考古学的側面から、厚岸湖の変遷史をたどってみよう。

1）　先土器時代の古別寒辺牛川

いまから約2万年前は、考古学では旧石器もしくは先土器の時代であり、地質学では洪積世末のウルム氷河期の最盛期に当たる。寒冷気候のため、海面は100ｍないし、それ以上も低下した時期である。このため台地は遠く海へ張り出し、一方、河川は深く刻みこんだに違いない。古別寒辺牛川が形成し、厚岸湖が厚岸湾へ抜ける河谷をつくり、30m 以上の深さの狭い湖口も、厚岸湾口（尻羽岬～大黒島）も、このときに堅い白亜紀層や古第三紀層を破ったと思われる。

2）　縄文時代の古海湾

その後、気候の回復とともに海面は除々に上昇し始めてきた。おそらく古別寒辺牛川を海水で満たしながら、内陸へと海進してきた。

縄文海進　この海進は、いわゆる「縄文海進」と呼ばれるもので、縄文前期初葉の6000年前ごろに最高頂に達した。ここまでにいたる長い海進の過程で海域を広げたが、これは海水面の上昇と海波で台地を削りとっていったものであった。最盛期の最終的な海面は現在より５～６ｍ ほども高まり、厚岸湾や厚岸湖もほぼ現状に近い形まで海水で満され、現在の別寒辺牛川をはじめ、湖へ注入する諸河川へも浸水を許したと思われる。とくに別寒辺牛川では、貝塚の存在などから、現河口より約３km奥までも浸水を許し、湖岸に沿う10mの段丘地形面まで高まり、この面が海底をなしていたらしい。

この面は、このあとの海退（海面降下）で残され、いま段丘としてみられるものである。

いずれにしても、縄文海退のマキシマムには、厚岸湾と同様な水質をもつた奥深い海湾をなしていたに違いない。

3）　海退と貝塚の形成

その後、海面は低下しはじめたが、一方このころから地盤の沈降も行なわれたとみられる。もっとも地盤沈下量は海面の低下量より少なかったらしい。おそらく、この頃から諸河川の下流部では、海水から半海水（汽水）化をみせはじめ、ここに汽水棲のカキが生息したらしい。　上記した別寒辺牛川河口付近の縄文中期（5000～4000年前）の「大別」と「尾幌別」の両貝塚は、こうしたときにつくられたものと思われる。厚岸に始めて人類の足跡が現われたのはこのときからである。

このうち、大別貝塚は獣骨も伴い、その厚さは表土（黒土層）２尺（66cm）の下に、貝塚が3.5尺（1.16m）以上の厚さで埋っているといわれている。その組成は筆者がみたところ、カキとアサリが目立つ。尾幌別貝塚は、同様に獣骨や鳥骨を伴い、カキを主としてホタテ、ウバガイ、アサリのほか、アカガイがあるという。アカガイはこの付近には現生し

ない暖海棲種である。当時はいまと違って、暖流がより北上していた温暖な気候下にあったことがわかる。

このような暖海系の貝類（アカガイ、ハマグリ、シオフキ、アカニシなど）は、釧路や網走、あるいは北海道の貝塚などでもしばしば認められている。縄文早期末から前期、中期中葉までの間の貝塚に含まれ、現在より暖かった気候が広く日本を支配していたことがうかがえる。

厚岸湖の縄文中期のころは、温暖な気候下で大部分がまだ海水におおわれていた海湾であったことは疑いのないところである。

古厚岸湖と段丘地形　縄文前期以降の海面低下は、汎世界的な現象で、ここ厚岸でも例外ではなかった。

海面が現在の海岸線まで後退したのは、釧路などでは3000年前ごろの縄文後期末である。厚岸でも同じころであったに違いない。このときの厚岸湖はほとんど土砂で埋って、小さな淡水湖になっていたと思われる。もっともこれを裏付ける積極的な資料はない。

海面降下は一方において、かって広く面積を占めていた海湾底を、現湖面上５～６ｍの段丘面として残したものと考える。

４）　続縄文時代以降の厚岸湖

今から2000～1000年前の続縄文時代のころである。この文化をもつた人びとが厚岸にもやってきた。厚岸湖北岸の神岩付近を中心として住みつき、ここに上述したような小貝塚を残している。

貝塚の貝はほとんどがカキで、アサリ、オオノガイ、オオイシカゲガイ、ウバガイ、ホタテ、エゾフネガイ、ヒメエゾボラ、エゾタマキビ、ホソウミニナなどを伴う。前三者と後二者の巻貝は、現在厚岸湖にも生息するが、他の５種は厚岸湾を住み家としている。この貝塚の貝が、現在湖が占めているところから採取したとすれば、いまのような汽水湖でなく、海水域であったことになる。つまり、海水の再進入である。

再小海進　海退期から始まっていた地盤沈下（海面降下量を下まわる量）が、海面低下の停止とともに、より顕著に現われ、再度海水の侵入を許す状態になったかも知れない。

このような地盤沈下の現象は、東隣りの霧多布でも、海退で海岸線がおち着いたあとで起って、霧多布泥炭地の形成を導いている。

いま、厚岸、霧多布付近の地形を大観すると、東西性の海岸地が高く（高度100～134ｍ）その北側には、それと平行して並ぶ低地が横たわっている。尾幌原野、厚岸湖、火散布沼、霧多布泥炭地を結ぶ線である。これは海退停止線の南高北低型の隆起と沈下の地盤運動がもたらしたものとみなせよう。

厚岸湖についても、続縄文期の沈降による再海進を導いたことは確からしい。例えば、湖の北岸の一小沢（下田ノ沢）の続縄文（前北式）期の遺跡は、泥炭層（厚さ30㎝）下と

泥炭中にある。この時代の貝塚はこの上位にあって、20～30cmの厚さで貝層をつくっている。このことは、泥炭形成後に今の湖のところに海進が行なわれたことを示すものとみなせよう。

トキタイ川河口の湖底下のシジミの自然貝層も、再海進による続縄文時代のころの所産とみれば矛盾しない。

これを要するに、現状の厚岸湖の姿が現われたのは、続縄文期以降である。

泥炭の花粉化石　上述した続縄文期前期後に形成された泥炭の花粉化石を検出した結果は次のようである。

花粉組成　（試料T₁．Tre．1970年6月8日）

針葉樹	
Abies（モミ）	1.4%
Pinns（マツ）	15.3%
広葉樹	
Salix（ヤナギ）	7.0%
Betula（シラカンバ）	4.2%
Carpinus（シデ）	13.9%
Quercus（コナラ）	15.3%
草本類	
Gramineae（イネ）	11.1%
Chenopodium（アカザ）	18.1%
Dorosera（モウセンゴケ）	1.4%
Persicaria（タデ）	1.4%
シダ類	
Polypodiaceae（ウラボシ科）	2.8%
Lycopodium（ヒカゲノカズラ）	2.8%
Osmunda（ゼンマイ）	1.4%

この結果をみると、樹林種では針葉樹のマツが多く、広葉樹はコナラとシデが優勢である。その他草本類が多いが、とくに変ったものがなく、全体としてその組成は現在の厚岸地方の植生と似ている。このことは、続縄文の貝塚の貝についても現在のものと変わりない点から気候的にはよく一致している。

縄文中期にみられた温暖な気候も、それ以後減暖して、晩期以降は現在のような気候に定着したようだ。

3　参考.引用文献

赤松守雄（1969）：北海道における貝塚の生物群集ー特に縄文海進に関連してー地球科学、23—3、P107～117.

金子浩昌（1965）：貝塚と食糧資源 — 縄文時代 — 日本の考古学Ⅱ、河出書房、P374

駒木茂・佐藤芳和（1966）：厚岸湖の水質について、北海道区水産研究所（北水研業績C67）.

河野常吉（1924）：北海道史蹟名勝天然記念物調査報告、北海道庁、P197～198.

湊正雄（1956）：厚岸道立公園 — 道立公園、観光北海道社　P111～112

元田茂（1950）：厚岸湖、水産孵化場試験報告（湖沼特輯号）5－1、P63～66.

大場利夫・沢四郎（1965）：北海道厚岸町下田ノ沢遺跡調査略報、釧路の古代文化第8集　P20～24.

岡崎由夫（1965）：厚岸湖の生いたち、釧路の古代文化、第8集、P25.

酒詰仲男（1959）：日本貝塚地名表、日本科学社　P8.

佐々保雄（1957）：北海道厚岸湖牡蛎礁における一観察、北海道地質要報35、P22～23

塩沢孝之（1969）：厚岸湖および厚岸湾の底質 — 粒度組成と粘土鉱物組成—地質学雑誌、75—1、P1～11.

吉田三郎（1958）：厚岸湖口底層中の有孔虫群、北海道学芸大学紀要（第2部）、7—1、P124～131.

吉田三郎（1967）：北海道釧路支庁産化石および現生カキ礁について、山形大学紀要（自然科学）、6—4　P481～493.

図　　版

図　版　目　次

1　下田ノ沢遺跡全景 …… 123

2　下田ノ沢遺跡全景 …… 123

3　1966年発掘　第２トレンチ最下層（泥炭層の遺物出土状態） …… 124

4　1966年発掘　第１トレンチ拡張区Ｃ′.Ｃ″.Ｄ′.Ｄ″区の石組遺構 …… 124

5　1966年発掘　第３トレンチにおける人骨埋葬状態 …… 125

6　出土遺物　続縄文式土器 …… 125

7　出土遺物　続縄文式土器 …… 126

8　出土遺物　続縄文式土器 …… 126

9　出土遺物　続縄文式土器 …… 127

10　出土遺物　続縄文式土器 …… 127

11　出土遺物　続縄文式土器 …… 128

12　出土遺物　続縄文式土器 …… 128

13　出土遺物　続縄文式土器 …… 129

13　出土遺物　擦文式土器 …… 129

15　出土遺物　擦文式土器 …… 130

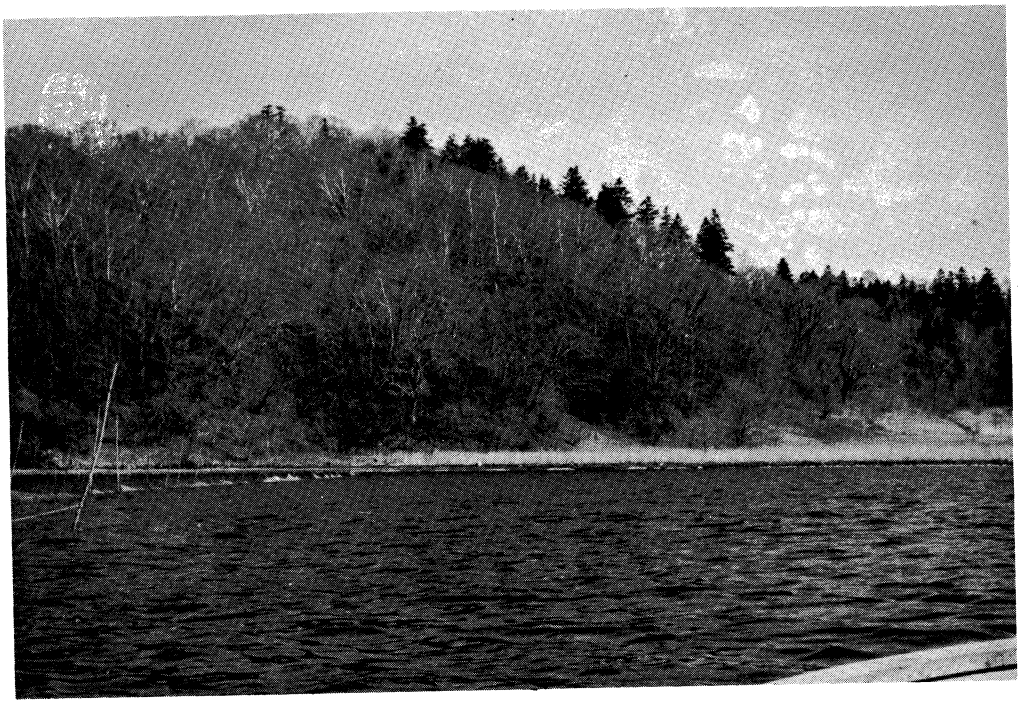
16　出土遺物　オホーツク式土器 …… 130

17　出土遺物　石　斧 …… 131

18　出土遺物　砥　石 …… 131

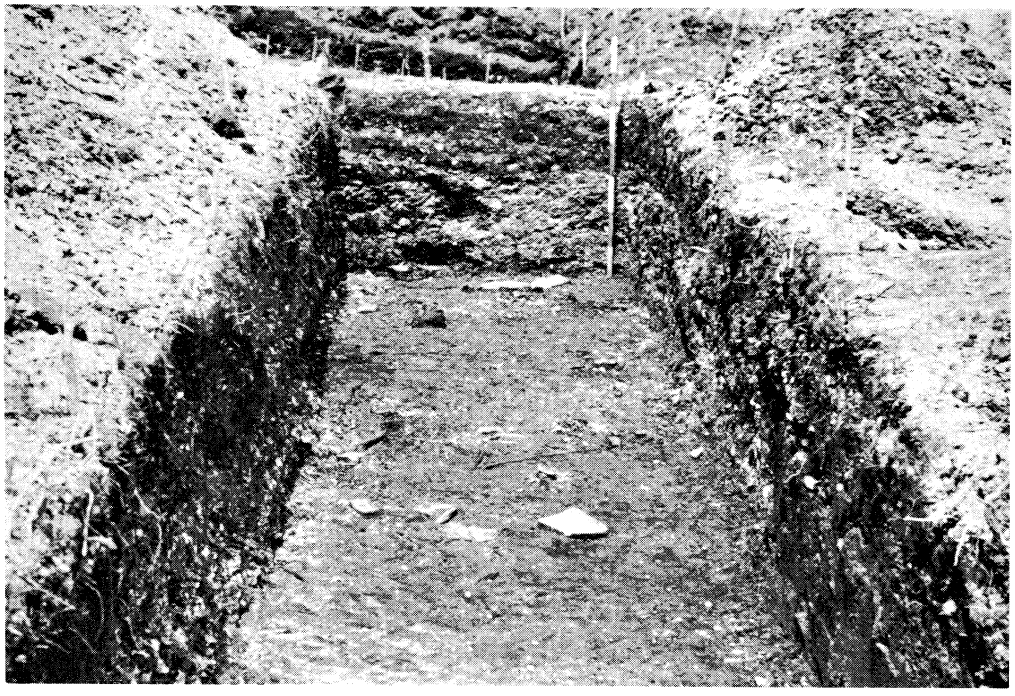
19　出土遺物　金属器 …… 132

20　出土遺物　金属器 …… 132



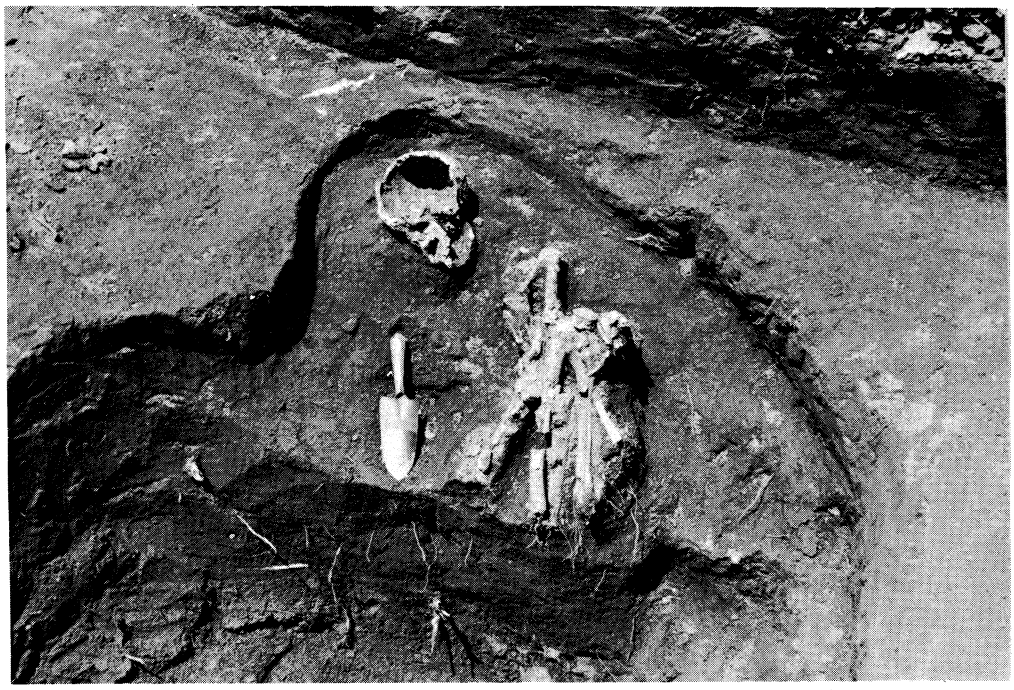
1　下田ノ沢遺跡全景

2　下田ノ沢遺跡全景

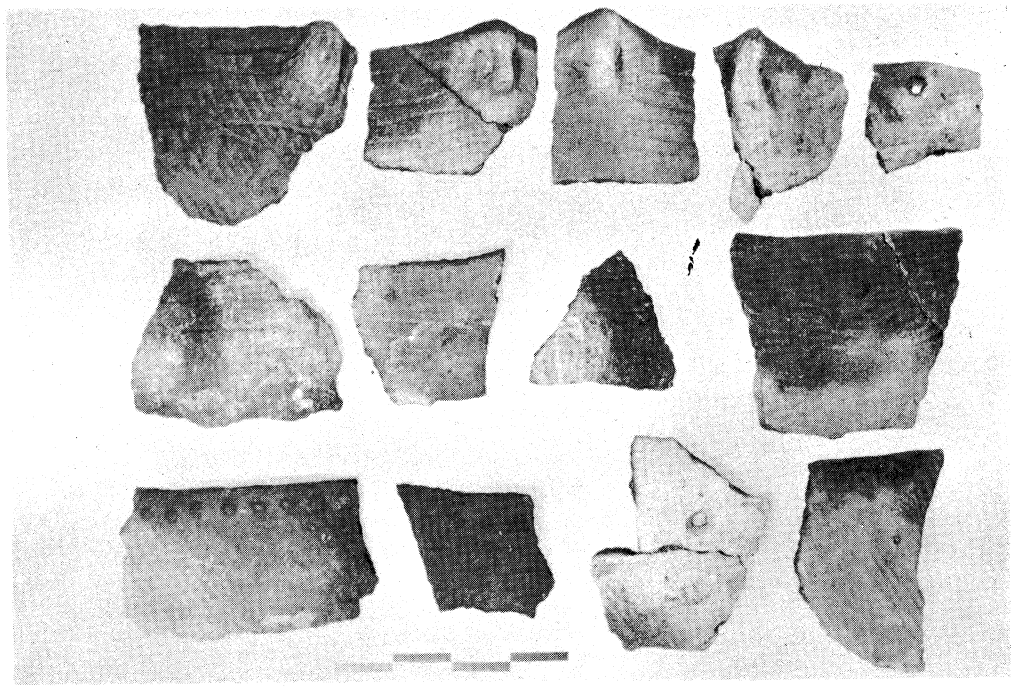


3　1966年発掘　第２トレンチ最下層（泥炭層）の遺物出土状態

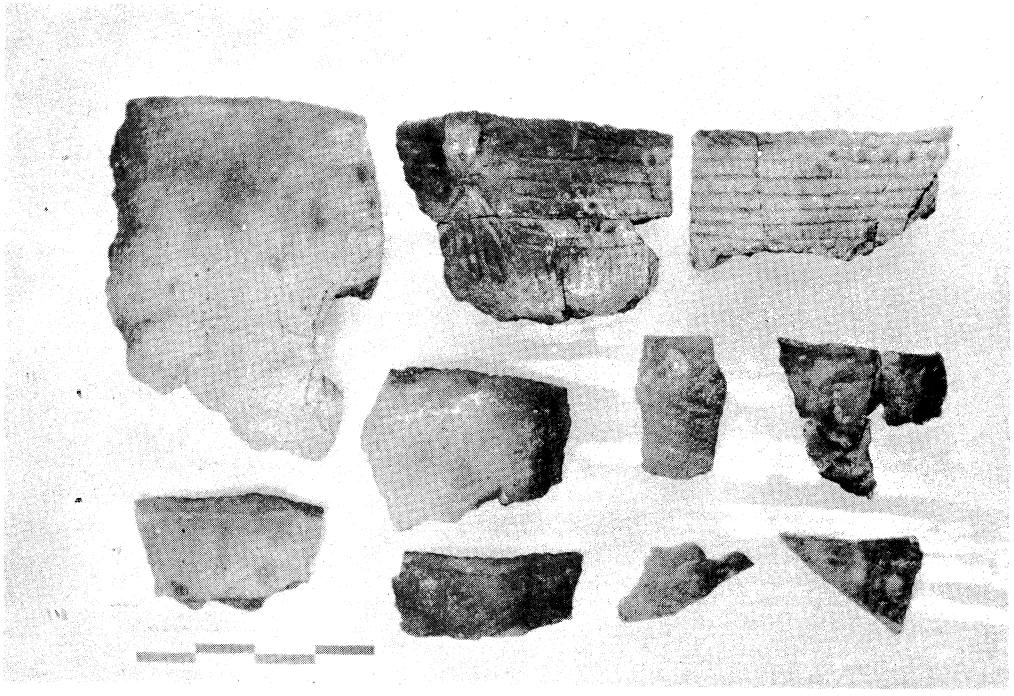
4　1966年発掘　第１トレンチ拡張区C′、C″、D′、D″区の石組遺構



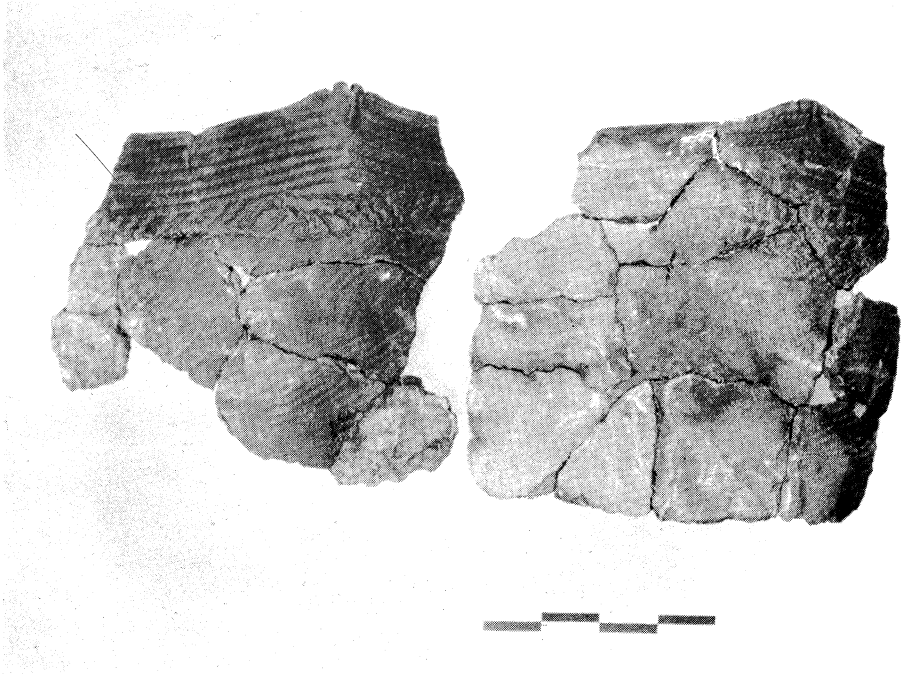
5　1966年発掘　第3トレンチにおける人骨埋葬状態



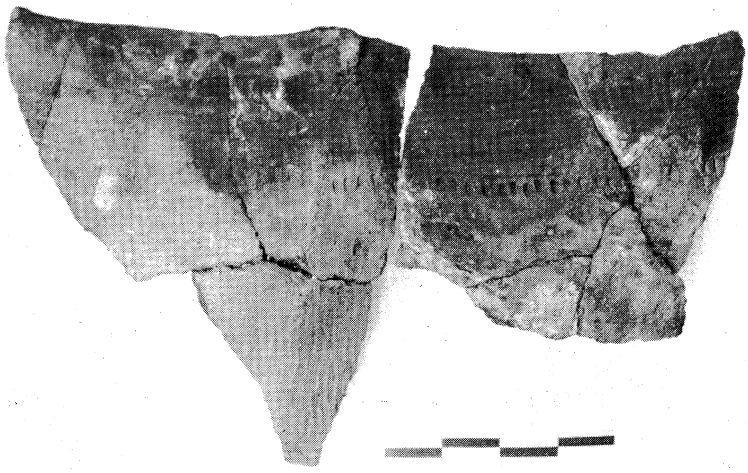
6　出土遺物　続縄文式土器



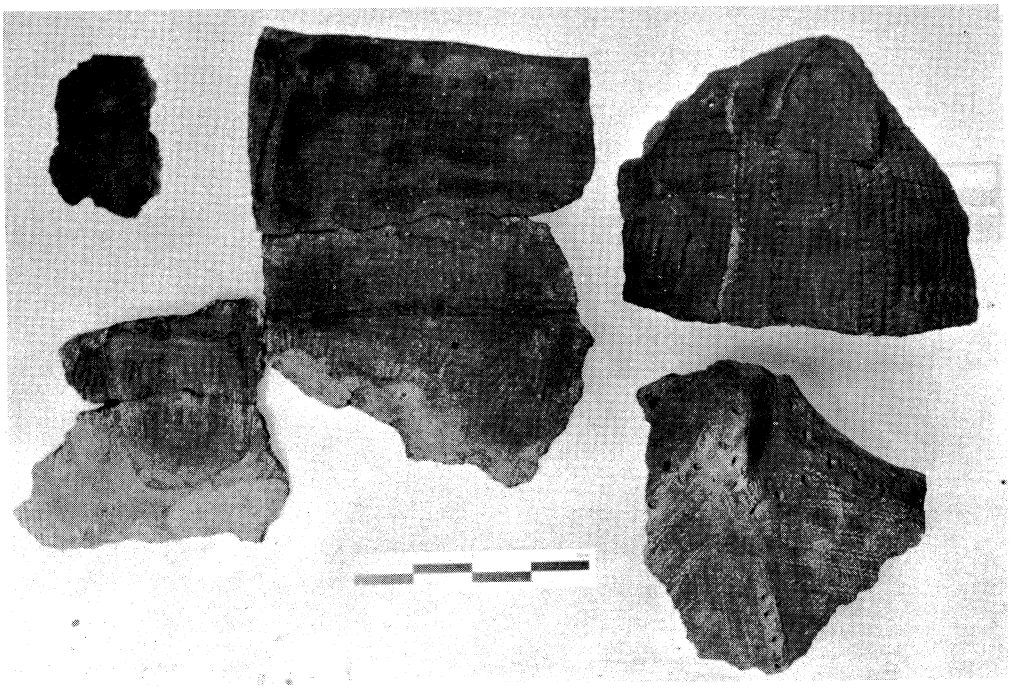
7　出土遺物　続縄文式土器



8　出土遺物　続縄文式土器

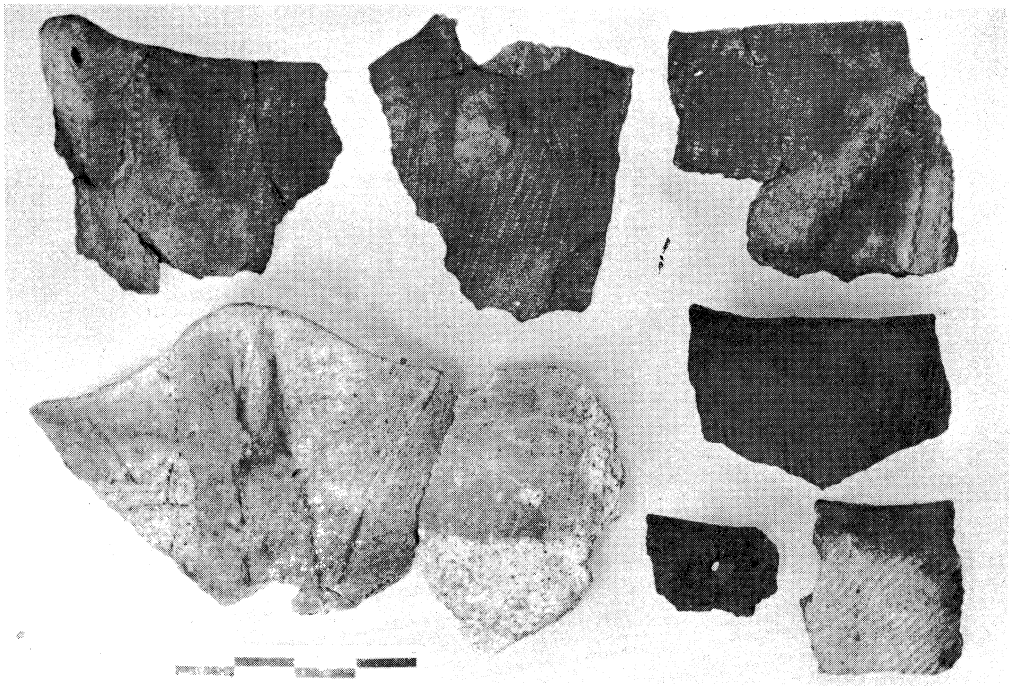


9　出土遺物　続縄文式土器

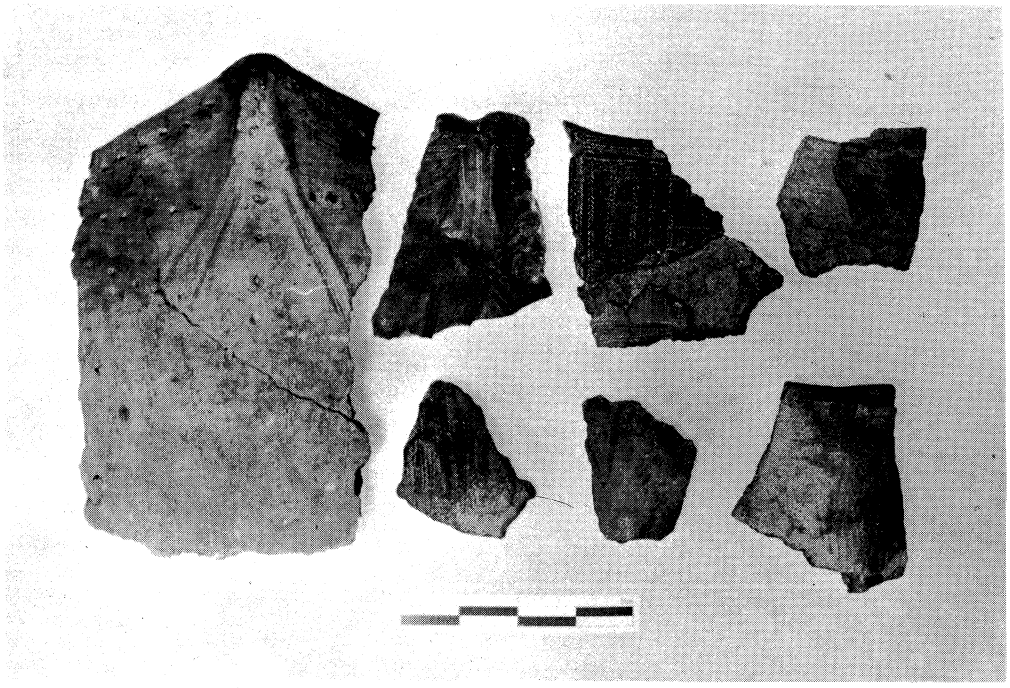


10　出土遺物　続縄文式土器

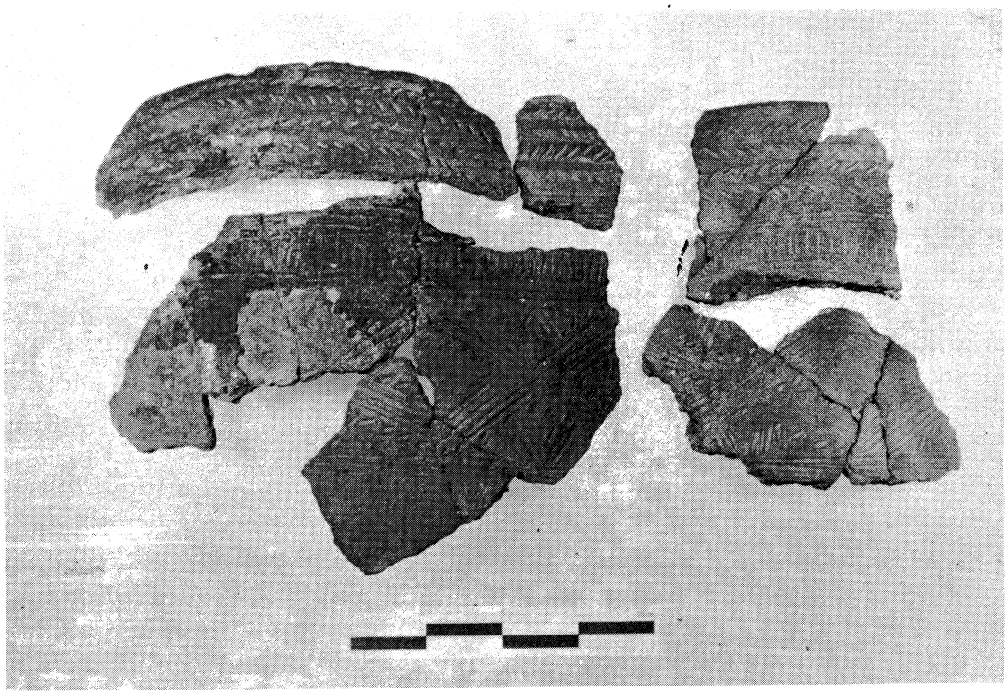
11　出土遺物　続縄文式土器



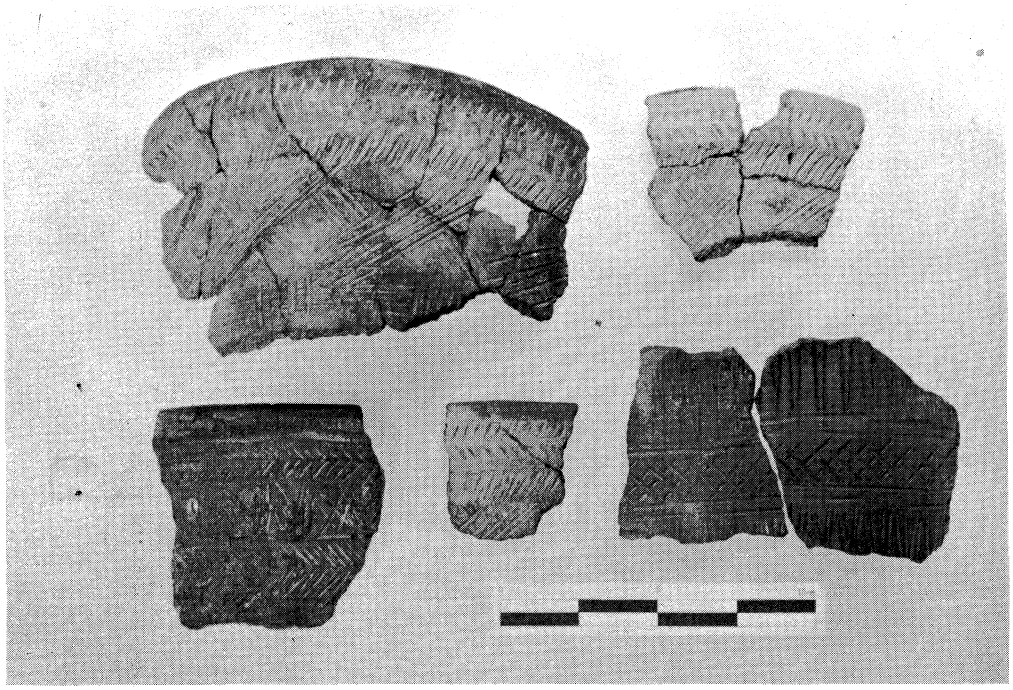
12　出土遺物　続縄文式土器



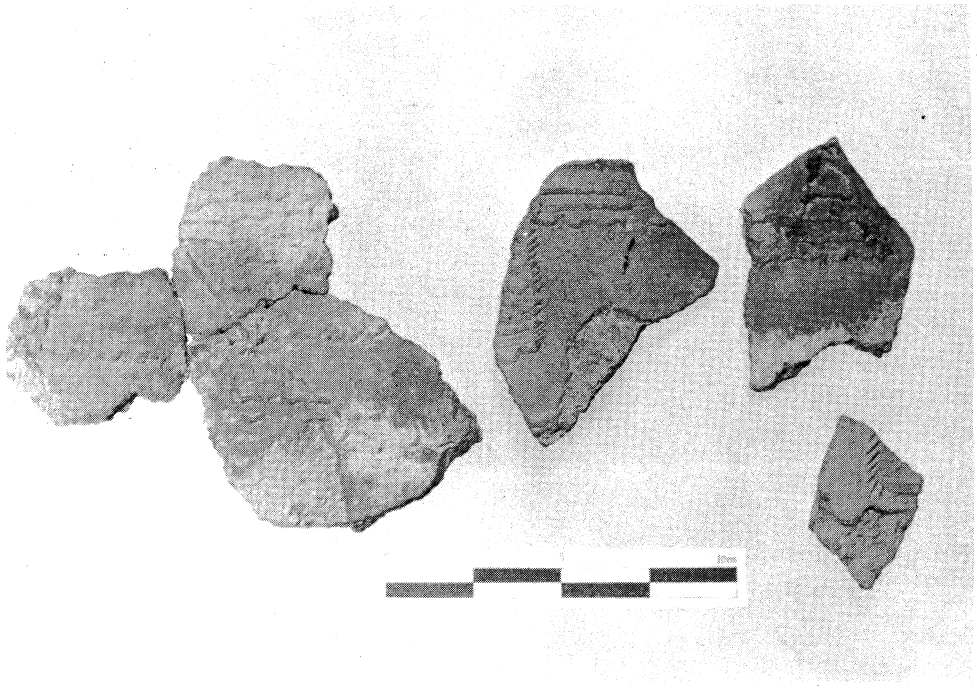
13　出土遺物　続縄文式土器



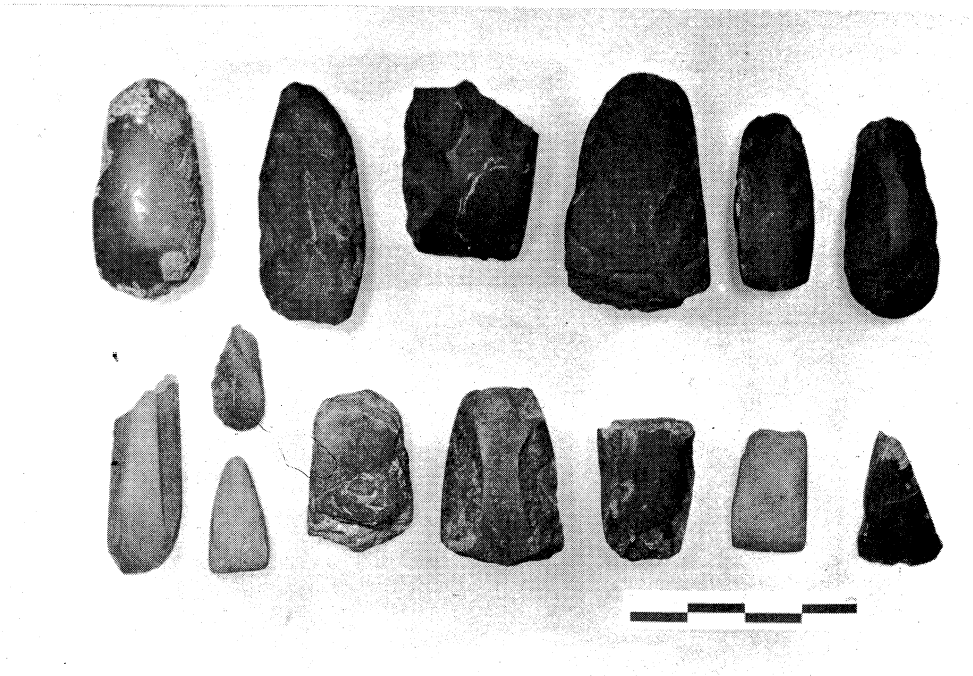
14　出土遺物　擦文式土器



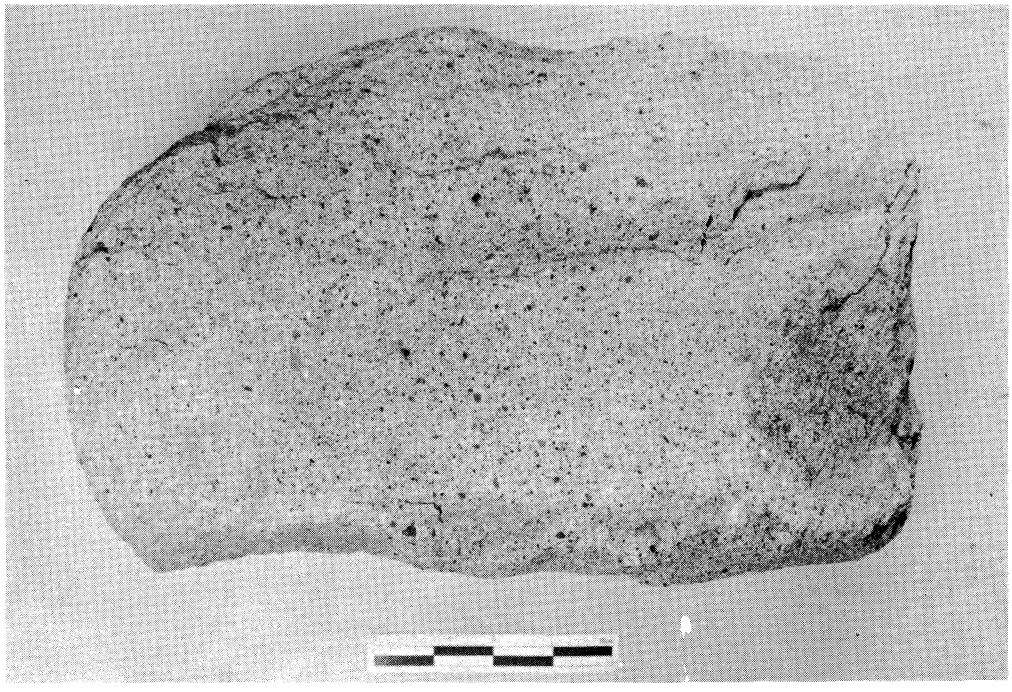
15　出土遺物　擦文式土器



16　出土遺物　オホーツク式土器

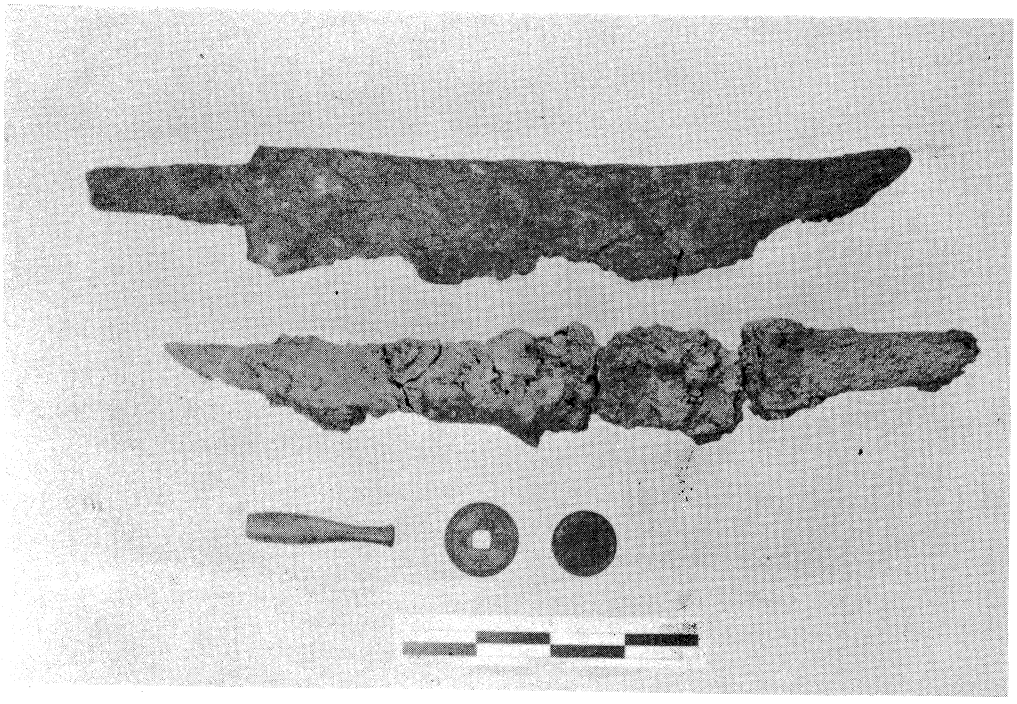


17　出土遺物　石斧



18　出土遺物　砥石

19　出土遺物　金属器



20　出土遺物　金属器

北海道発掘調査シリーズ No. 8
北海道厚岸町下田ノ沢遺跡

昭和四十七年三月二十五日初版
昭和五十五年四月三十日復刻
編　者　厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会
発行者　野沢信義
発行所　北海道出版企画センター
〒〇六〇　札幌市中央区北三西三スノー会館四階
電話（〇一一）二三一一七二〇　振替小樽一六七七
取引銀行　北海道拓殖銀行本店

乱丁・落丁はおとりかえいたします。